札幌市文化財調査報告書56

K36遺跡

タカノ地点

1997

札幌市教育委員会

口絵1

A　第1号竪穴住居跡床面出土漆器椀

B　同竪穴床面検出、第17号焼土粒範囲内出土錫製環状装飾品

例　言

1　本書は、札幌市北区北23条西14丁目５番１の内における（株)タカノによる共同住宅建設のために実施したＫ36遺跡の埋蔵文化財発掘調査報告書である。Ｋ36遺跡は昭和61年度にも調査されているため原因者の名前を取り、Ｋ36遺跡タカノ地点とした。

2　発掘調査は、平成８年10月１日から同年11月15日まで行い、札幌市市民局文化部文化財課加藤邦雄、上野秀一、羽賀憲二、藤井誠二、秋山洋司が担当し、秋山が主として調査にあたった。

3　本書の編集、執筆は秋山が行ったが、分析調査及び保存処理は下記の方々の御協力を賜った。
植物遺存体　静修女子大学　吉崎昌一氏　北海道大学　椿坂恭代氏
動物遺存体　東北大学　富岡直人氏
漆製品分析　国立歴史民俗博物館　永嶋正春氏
漆製品保存処理　(財)元興寺文化財研究所　伊藤健司氏　植田直見氏
環状装飾品　北海道開拓記念館　小林幸雄氏

4　発掘調査及び整理作業には、下記の人々が主として従事した。
現場作業　青木瑞枝、朝比奈健太、東夕起子、安念栄子、井坂美佐、石塚八穂子、今田瑞枝、加藤直美、笠松芳江、金森ミサヲ、久保田芳子、小林美津子、今野誠明、斎藤恭子、佐々木雄太、佐藤順子、佐藤紀子、佐藤洋子、嶋美和子、菅原純子、清野玉実、世戸恵子、高槻和貴、鷹野裕司、高橋宏文、高橋雅子、高橋満知子、池鯉鮒結子、中橋敏子、西村恵子、橋岡明子、東出千春、富士本礼子、藤森真規子、船渡川力、三浦進、溝田洋子、山下郁子、山下知香子、山下富久治、吉田友美、和田健
整理作業　遺物データ整理、土器接合復元・拓本・断面実測、挿図作成：西村恵子、佐藤洋子
図面整理・トレース：吉田友美　遺構遺物データ処理、各種一覧表、図版作成：船渡川力
土器実測・トレース：佐藤紀子　石器・土器断面・その他遺物各実測・トレース：高橋宏文
遺物・挿図・図版整理、土器接合復元・拓本：笠松芳江、斎藤恭子、橋岡明子
土器接合復元：安念栄子、清野玉実、東出千春、藤森真規子、今野誠明、鷹野裕司、成田幸法
写真：三浦進　微細遺物選別：高橋雅子、本間直子、安澤孝子、和田啓子、小松和子

5　発掘調査及び整理作業において、下記の方々より助言及び協力を賜った。(順不同・敬称略)
文化庁、北海道教育庁文化課、北海道開拓記念館、(財)元興寺文化財研究所
赤松守雄、大井晴男、大沼忠春、岡田淳子、菊池俊彦、越田賢一郎、佐藤和雄、澤田健、鈴木信、田才雅彦、高橋和樹、田口尚、種市幸生、千葉英一、土肥研晶、豊田宏良、中山昭大、西田茂、西脇対名夫、長谷山隆博、藤原秀樹、松崎水穂、松田淳子、三浦正人、宮宏明、柳沼弥生、山田悟郎、山田昌久、吉田玄一、四柳嘉章
本文中の漆器の説明にあたり、永嶋氏、四柳氏から多大な御教示を得た。記して感謝致します。

6　発掘調査及び整理・報告書出版にあたっては、下記の個人もしくは機関より全面的な御協力と御支援を賜った。記して感謝の意を表する次第である。
清水義雄氏、株式会社タカノ、株式会社宮川建設

凡　例

1　各種遺構の平面図と断面(セクション)図等の主なスクリーンの凡例は下記のとおりである。

2　個々の遺構図面などで使用した遺物記号の凡例は下記のとおりである。

3　各種断面(セクション)図の層名の記載方法は、第3章第2節で詳述した。

4　遺構の平面図および本文中などで使用した遺構の略称は下記のとおりである。
HP：竪穴住居跡、SP：柱穴、PT：土壙、HE：焼土、DB：焼土粒の範囲、C：炭化材

5　挿図の縮尺は、個々にスケールを入れて示した。基本的な縮尺率は下記のとおりである。

遺構関係	発掘区セクション：1/40	竪穴住居跡・柱穴：1/60
	竪穴住居跡カマド：1/30	溝状遺構：1/200
	焼土、焼土粒集中：1/20	土壙：1/10
遺物関係	土器1/3　礫石器1/3	剝片石器1/2
	漆1/2　環状装飾品1/2	

6　写真図版の縮尺については、現場写真は任意であるが、遺物については下記のとおりである。
土器1/3、礫石器1/3、紡錘車1/2、漆器椀2/3、漆製品1/2、錫製環状装飾品2/3

7　第1図は、国土地理院発行の2万5千分の1地形図「札幌北部」「札幌」を使用した。

8　土層注記や土器の内外面や断面の色調については標準土色帳を用いた。

スクリーン（Letraset）

- No. 31：各セクション図の噴砂・砂、焼土粒中の焼土のまとまり
- No. 62：溝状遺構セクション図2層群中の腐植土層
- No.112：焼土粒範囲
- No.253：基本層5層
- No.273：基本層2層（遺物包含層）
- No.320：かまど火床、焼土
- No.687：火山灰
- 塗潰し：各セクション図の炭化材

遺物記号

●竪穴床面の土器	▲竪穴床面礫・石器	■発掘区の土器	①くるみ
○竪穴覆土の土器	△竪穴覆土礫・石器	□発掘区の礫・石器	⊗粘土塊

目　次

第１章　発掘調査に至る経過 …… 8
第２章　遺跡の位置と環境 …… 8
第３章　発掘調査の方法と層序 …… 10
第４章　遺構および遺物 …… 16
　第１節　竪穴住居跡 …… 16
　第２節　溝状遺構 …… 44
　第３節　焼土および焼土粒範囲 …… 52
　第４節　発掘区出土遺物 …… 58
第５章　分析 …… 69
　第１節　Ｋ36遺跡タカノ地点出土動物遺存体（富岡直人） …… 69
　第２節　Ｋ36遺跡タカノ地点出土の炭化植物種子（吉崎昌一・椿坂恭代） …… 74
　第３節　放射性炭素年代測定結果（古環境研究所） …… 76
　第４節　Ｋ36遺跡タカノ地点第１号竪穴住居跡床面出土の漆器椀２点について
　　（永嶋正春） …… 77
まとめ …… 78

口絵目次

口絵１Ａ　第１号竪穴住居跡床面出土漆器椀 …… 1
口絵１Ｂ　同竪穴床面第17号焼土粒範囲内出土
　　錫製環状装飾品 …… 1

挿図目次

第１図　遺跡付近地形図(1) …… 7
第２図　遺跡付近地形図(2) …… 9
第３図　発掘区配置図および遺構関連図 …… 11
第４図　発掘区断面図(1) …… 13
第５図　発掘区断面図(2) …… 14
第６図　発掘区断面図(3) …… 15
第７図　第１号竪穴住居跡 …… 17
第８図　第１号竪穴住居跡かまどおよび床面検出
　　焼土、焼土粒範囲 …… 19
第９図　第１号竪穴住居跡遺物出土状況および
　　漆器椀、錫製環状装飾品 …… 20
第10図　第１号竪穴住居跡出土遺物 …… 21
第11図　第２号竪穴住居跡 …… 24
第12図　第２号竪穴住居跡かまど …… 25
第13図　第２号竪穴住居跡出土遺物 …… 26
第14図　第３号竪穴住居跡 …… 28
第15図　第３号竪穴住居跡かまど …… 29
第16図　第３号竪穴住居跡出土遺物(1) …… 31
第17図　第３号竪穴住居跡出土遺物(2) …… 32
第18図　第４号竪穴住居跡およびかまど …… 36
第19図　第４号竪穴住居跡出土遺物(1) …… 37
第20図　第４号竪穴住居跡出土遺物(2) …… 38
第21図　第５号竪穴住居跡およびかまど …… 41
第22図　第５号竪穴住居跡出土遺物 …… 43
第23図　溝状遺構 …… 46
第24図　溝状遺構断面、溝内検出焼土粒範囲および
　　遺物集中地区拡大図 …… 47
第25図　溝状遺構出土遺物(1) …… 48
第26図　溝状遺構出土遺物(2) …… 49
第27図　溝状遺構出土遺物(3) …… 50
第28図　焼土(1) …… 54
第29図　焼土(2)・焼土粒範囲(1) …… 55
第30図　焼土粒範囲(2)・第１号土壙土器
　　出土状況 …… 56
第31図　第１号土壙・発掘区出土遺物(1) …… 59
第32図　発掘区出土遺物(2) …… 60
第33図　発掘区出土遺物(3) …… 61
第34図　発掘区出土遺物(4) …… 62
第35図　遺物接合図 …… 67

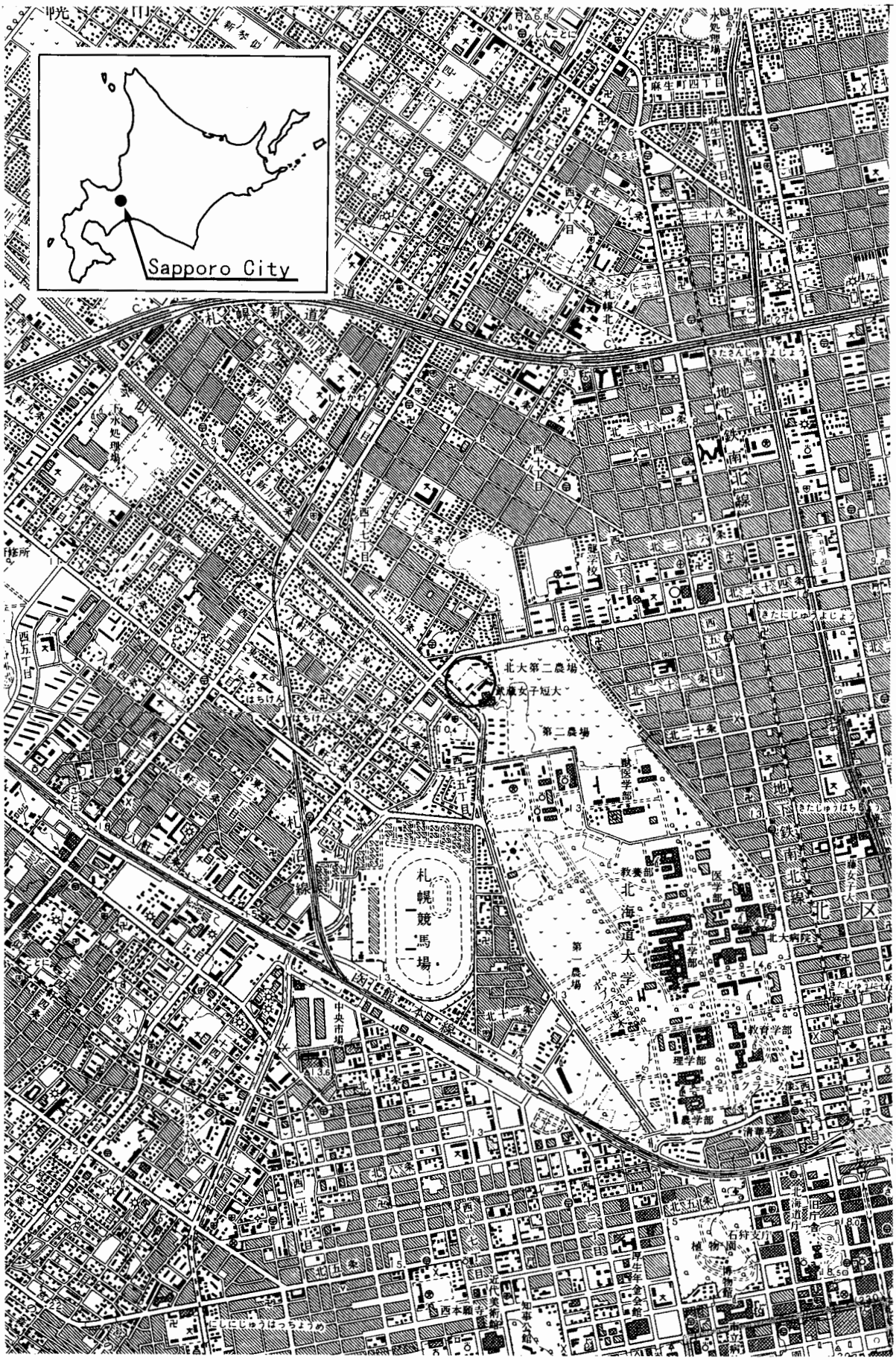
挿表目次

第１表　基本層序土層注記表 …… 12

第２表　第１号竪穴住居跡覆土土層注記表 …… 18
第３表　第１号竪穴住居跡柱穴一覧表 …… 18
第４表　第１号竪穴住居跡出土土器属性表 …… 22
第５表　第２号竪穴住居跡覆土土層注記表 …… 23
第６表　第２号竪穴住居跡柱穴一覧表 …… 25
第７表　第２号竪穴住居跡出土土器属性表 …… 26
第８表　第３号竪穴住居跡覆土土層注記表 …… 29
第９表　第３号竪穴住居跡柱穴一覧表 …… 30
第10表　第３号竪穴住居跡出土土器属性表 …… 33
第11表　第４号竪穴住居跡覆土土層注記表 …… 35
第12表　第４号竪穴住居跡柱穴一覧表 …… 35
第13表　第４号竪穴住居跡出土土器属性表 …… 39
第14表　第５号竪穴住居跡覆土土層注記表 …… 42
第15表　第５号竪穴住居跡柱穴一覧表 …… 43
第16表　第５号竪穴住居跡出土土器属性表 …… 43
第17表　溝状遺構覆土土層注記表 …… 45
第18表　溝状遺構出土土器属性表 …… 51
第19表　焼土、焼土粒集中土層注記表 …… 53
第20表　第１号土壙覆土土層注記表 …… 56
第21表　発掘区出土土器属性表 …… 63
第22表　出土動物遺存体種名表 …… 69
第23表　魚類遺存体層位別出土量 …… 72
第24表　出土動物遺存体種名表 …… 73
第25表　Ｋ36遺跡タカノ地点炭化種子集計表 …… 75
第26表　Ｋ36遺跡（昭和61年調査地点）
　　炭化種子集計表 …… 75
第27表　報告書抄録 …… 110

図版目次

図版１Ａ　発掘区遠景(1) …… 81
図版１Ｂ　発掘区遠景(2) …… 81
図版２Ａ　発掘区断面（北西壁）(1) …… 82
図版２Ｂ　発掘区断面（北西壁）(2) …… 82
図版３Ａ　第１号竪穴住居跡確認面 …… 83
図版３Ｂ　第１号竪穴住居跡完掘状況 …… 83
図版４Ａ　第１号竪穴住居跡かまど完掘状況 …… 84
図版４Ｂ　第１号竪穴住居跡断面Ａ－Ｂ …… 84
図版５Ａ　錫製環状装飾品出土状況(1) …… 85
図版５Ｂ　錫製環状装飾品出土状況(2) …… 85
図版５Ｃ　漆器椀出土状況(1) …… 85
図版５Ｄ　漆器椀出土状況(2) …… 85
図版６Ａ　第２号竪穴住居跡確認面 …… 86
図版６Ｂ　第２号竪穴住居跡完掘状況 …… 86
図版７Ａ　第２号竪穴住居跡かまど完掘状況 …… 87
図版７Ｂ　第３号竪穴住居跡確認面 …… 87
図版８Ａ　第３号竪穴住居跡完掘状況 …… 88
図版８Ｂ　第３号竪穴住居跡かまど完掘状況 …… 88
図版９Ａ　第４号竪穴住居跡確認面 …… 89
図版９Ｂ　第４号竪穴住居跡完掘状況 …… 89
図版10Ａ　第４号竪穴住居跡かまど完掘状況 …… 90
図版10Ｂ　第５号竪穴住居跡確認面 …… 90
図版11Ａ　第５号竪穴住居跡完掘状況 …… 91
図版11Ｂ　第５号竪穴住居跡かまど完掘状況 …… 91
図版12Ａ　溝状遺構検出状況(1) …… 92
図版12Ｂ　溝状遺構検出状況(2) …… 92
図版13Ａ　溝状遺構完掘状況(1) …… 93
図版13Ｂ　溝状遺構完掘状況(2) …… 93
図版14Ａ　溝状遺構断面Ａ－Ｂ（北西壁）…… 94
図版14Ｂ　溝状遺構断面Ｉ－Ｊ（南東壁）…… 94
図版15Ａ　溝状遺構テラス部分遺物出土状況 …… 95
図版15Ｂ　溝状遺構内一括土器出土状況 …… 95
図版16Ａ　第１号焼土検出状況 …… 96
図版16Ｂ　第８号焼土粒検出状況 …… 96
図版16Ｃ　第６号焼土断面 …… 96
図版16Ｄ　第５号焼土粒断面 …… 96
図版17Ａ　02－08区付近遺物出土状況 …… 97
図版17Ｂ　第１号土壙土器出土状況 …… 97
図版18　第１、３号竪穴住居跡出土土器 …… 98
図版19　第４、５号竪穴住居跡出土土器 …… 99
図版20　溝状遺構出土土器 …… 100
図版21　第１号土壙・発掘区出土土器、
　　竪穴出土遺物 …… 101
図版22　第１～４号竪穴住居跡出土土器 …… 102
図版23　第４・５号竪穴住居跡、溝状遺構
　　出土土器 …… 103
図版24　溝状遺構、発掘区出土土器 …… 104
図版25　発掘区出土土器 …… 105
図版26　第１～４号竪穴住居跡出土礫石器 …… 106
図版27　第５号竪穴住居跡、溝状遺構、発掘区
　　出土礫石器および第３号竪穴住居跡、
　　発掘区出土剝片石器 …… 107
図版28　炭化植物種子 …… 108
図版29　漆器塗膜層断面 …… 109



第１図　Ｋ36遺跡タカノ地点付近地形図(1)（１：25,000；○印遺跡）

第１章　発掘調査に至る経過

今回の発掘調査は、株式会社タカノによる北区北23条西14丁目地区におけるマンション建設工事に伴なって実施したものである。なお以下の経過をもって発掘調査の運びとなった。

平成８年６月、本地区の周知の埋蔵文化財包蔵地の取扱いに関して数件の問い合わせがあった。その後、株式会社タカノによる開発計画が具体化し、その取扱いについての協議が開始された。札幌市文化財課は本地区が札幌市埋蔵文化財台帳のＫ36遺跡に該当すること、昭和61年度に北西側隣接地において発掘調査を実施して擦文時代の集落を発見している（上野・羽賀編　札幌市文化財調査報告書XXXⅢ　Ｋ36遺跡　昭和62年）ことから、包含層・遺構の残存する可能性が極めて高いことが予想されたため、試掘調査を行い範囲・規模等の詳細を確認する必要があると判断し、試掘調査依頼書を平成８年７月５日付で受理し、同年７月15日より試掘調査を実施した。

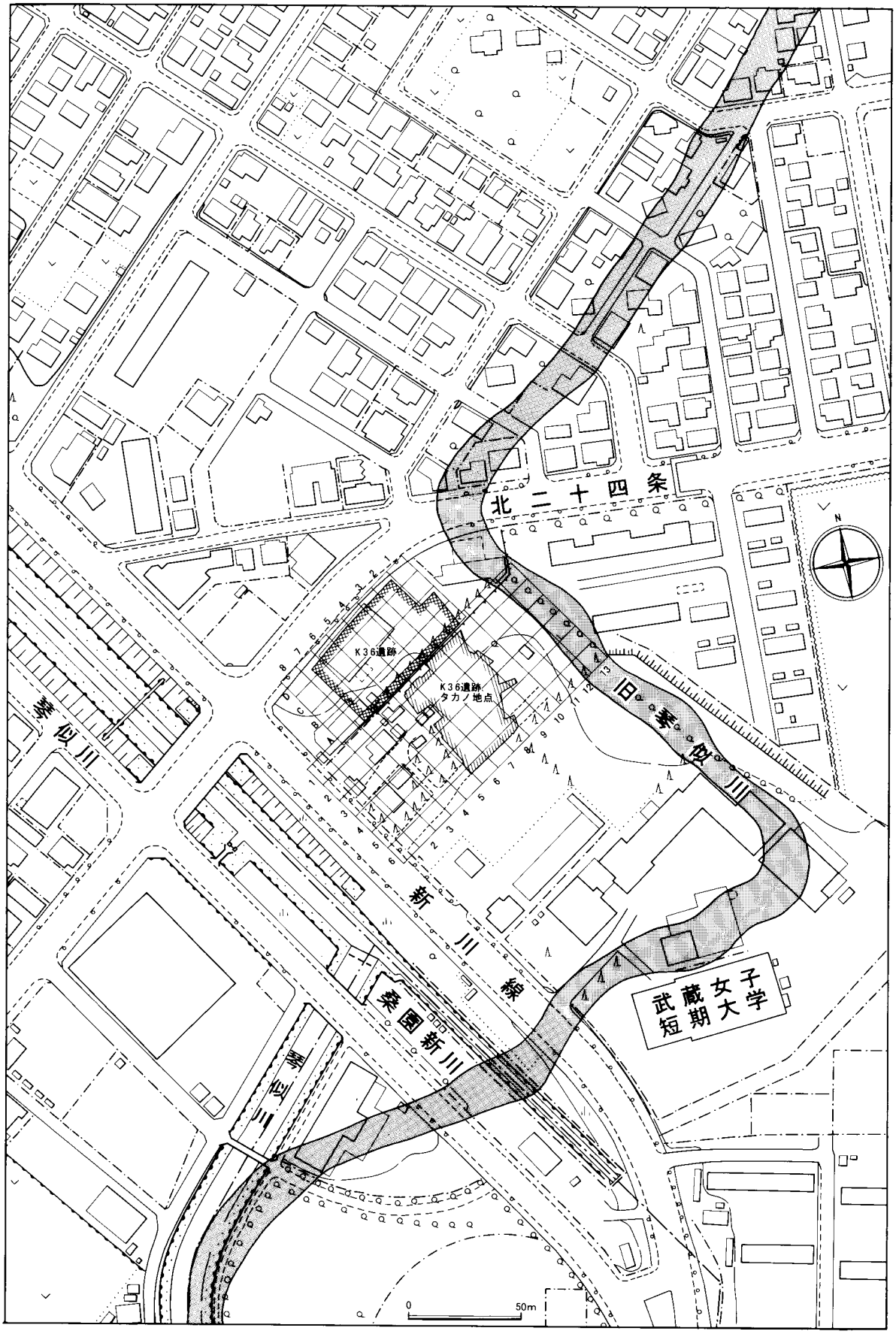
その結果、竪穴住居跡並びに擦文土器片が発見されたことから、文化財課は株式会社タカノと遺跡の取扱いについて協議した。しかし、土地の広さに制約があり工事計画の変更による現状保存は困難であるとの結論に至り、記録保存を目的とした発掘調査を実施することで合意した。

文化財課では、昭和61年度の発掘調査結果、そして今回の試掘調査結果から本地区において極めて良好な形で擦文時代の竪穴住居跡群が検出される可能性があると捉えており、発掘調査には準備期間を含め約２ヵ月の期間が必要であること、平成８年度はすでに６ヶ所で発掘調査を実施しており、調査職員や発掘作業員の手当が困難なことなどから、発掘調査は平成９年度事業として行いたい旨を提示した。しかし株式会社タカノからは、工事の一部を平成８年12月１日より着手すべく計画しており、少なくとも本年度中に発掘調査業務を終了して欲しい旨の強い要望が出された。

数次にわたる協議の結果、文化財課の日程調整を行うとともに、調査費の軽減と迅速化をはかるため、現場プレハブ、盛土・表土層除去の重機を株式会社タカノが措置することとし、平成８年10月１日から11月15日まで現場の調査を行い、現場終了後から平成９年３月31日までにすべての報告書作成業務を行うことで協議がまとまった。

第２章　遺跡の位置と環境

本遺跡は、札幌市北区北23条西14丁目に位置する。本地区は、古くから市街化してきた北側、西側の住宅街と、東側、南側の北海道大学第二農場等の大学用地に囲まれており、当地そのものは昭和28年より畑地として利用されていることが、旧土地所有者により明らかにされている。周囲の河川は、本地区の南西側で琴似川と桑園新川が合流し、琴似川が新川線に沿って北上して流れる現況であるが、古文献や昭和61年の調査等から、本遺跡の東側に南北に走る旧琴似川が存在したと思われ（図２）、遺跡形成時はこの河川の影響を強く受けていたとみられる。ちなみに図中の河川跡は札幌市埋蔵文化財分布地図より転写したものである。また前掲書の中で、本遺跡が旧琴似川流域の遺跡群の一つとして古くから知られていることが詳述されているが、調査の結果や文献資料などから流域の遺跡群の中では比較的新しい時期にあたる「擦文時代後期・晩期」のものとして注目されている。試掘調査の結果、昭和61年度の調査地区と遺物や層位関係はほぼ一致しており、同時期に形成された遺跡として捉え、調査を進めた。なお、包含層より深く掘り込まれた大型の撹乱は、第４号竪穴住居跡にかかる部分にのみ確認された。



第２図　Ｋ36遺跡タカノ地点付近地形図(2)（１：2,500）

第３章　発掘調査の方法と層序

第１節　発掘調査の方法

１　発掘範囲について

試掘調査の結果、開発用地の中央部分であり、かつ昭和61年度に行われた発掘調査の南東側隣接地にあたる所から遺構・遺物が発見され、この地区約1,500㎡を発掘調査対象地区とした。なおその東側地区は現地表面から1.5ｍ近く掘下げた段階でも、旧表土が確認できなかったことから旧河道であるとし、一方反対の南西側地区では、遺構・遺物の発見がなかったため包含層の広がりはないと判断した。また発掘調査対象地区において、畑地利用に伴なう地均しや耕作、後の構造物建築による撹乱等により、遺物包含層のかなりの部分が乱されていることも確認されている。

２　発掘区の設定

発掘区の設定は、Ｘ－Ｙの座標を用い行った。本地区は構造物や樹木が密集していることから、比較的見通しのよい開発予定地とその南側のアパートとの敷地境界を基線に、それをＹ軸とした。またその軸と直行し開発予定地北西隅にある基準杭とを結んだ線をＸ軸とし、北西側隅を原点に、Ｘ軸60×Ｙ軸130ｍの範囲内で一辺が10ｍの方眼を設定した。なお各発掘区は原点からの遠位点の杭番号で呼称した。Ｘ軸の方位は、磁北でＮ323°Ｅである。

３　発掘調査の手順

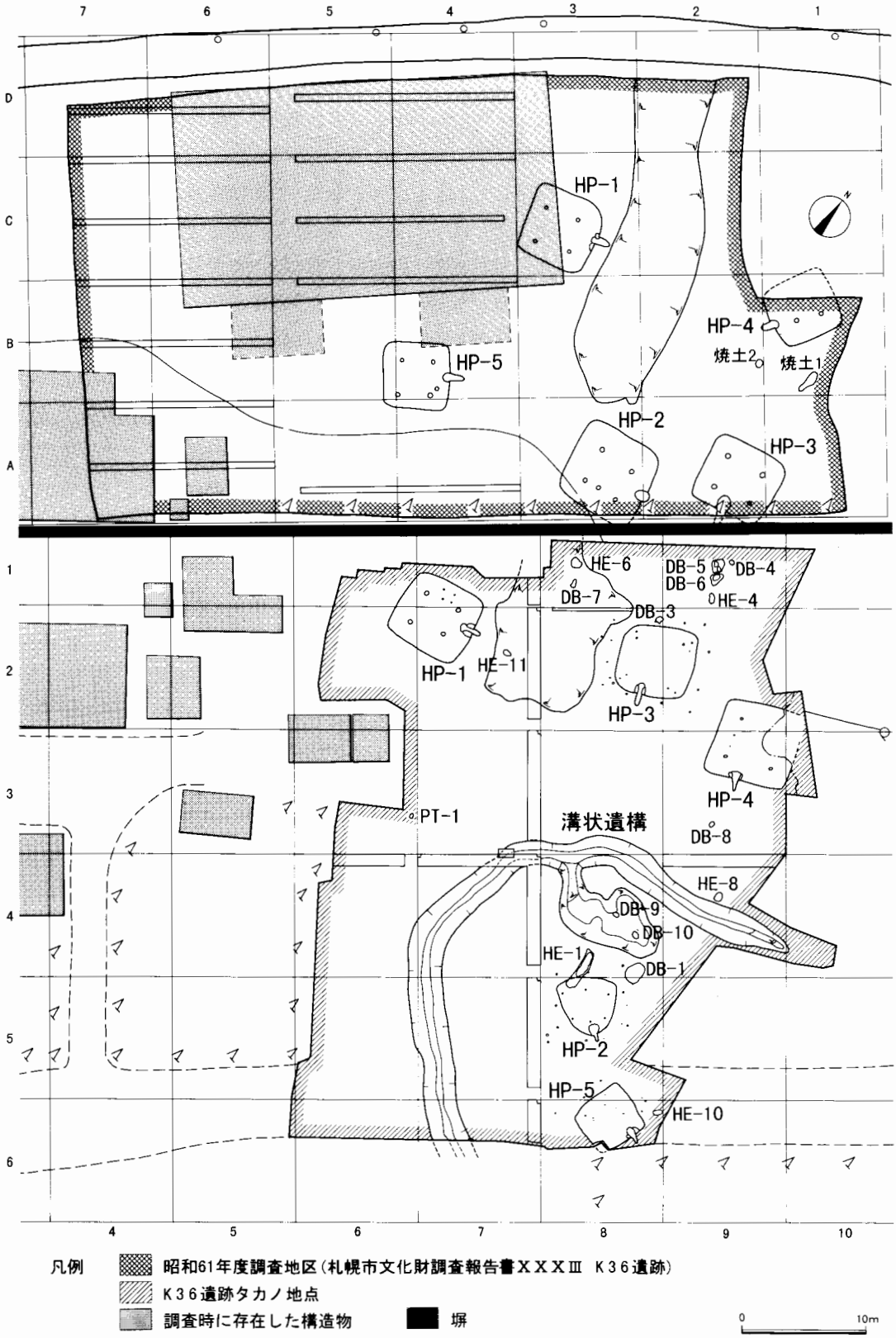
試掘調査の結果に基づいて、遺物包含量の少ない耕作土を重機で排土した後、手掘りで遺構の確認を先行して行った。遺構確認終了後、土層観察用にグリッドラインに沿って幅１ｍ、深さ約１ｍのトレンチを開け、基本層序の確認をした。その後、遺構調査と層位的な包含層調査を行いながら、各種記録・遺物取上げ作業を適宜実施した。遺構は竪穴住居跡、溝状遺構、焼土遺構、土壙が検出されており、竪穴住居跡(HP)、焼土遺構(HE、DB)、土壙(PT)についてはそれぞれ略号を与え検出順に番号を付け、作業を簡便化した。特に焼土遺構は、被熱層をもつ焼土層をHE、炭化物や焼土粒、灰層の広がる範囲をDBと分類し、検出位置が竪穴内であるか外であるかに拘わらず全て通し番号で処理した。なお灰層、被熱土壌、かまどの火床についてをサンプル対象とし、フローテーション作業により微細遺物を回収した。排土は開発用地北東側地区の旧河道と判断した場所に集積した。また発掘区外に広がる遺構については開発用地の範囲内においては発掘区を一部拡張して遺構全体の調査を実施することとした。調査の上での遺構・遺物の記録方法については、基本的にＨ317遺跡の調査で行った方法を(Ｈ317遺跡　仙庭編　1995)踏襲しているが、時間的な制約の多い発掘調査であったため、一部簡略化した部分がある。

４　発掘調査の概況

重機による排土後は、基本層序２層とした黒褐色土層が広がっており、遺構は基本層序１層の黒色土が落込んでいることから明確に確認することが出来た。この段階では、竪穴住居跡３軒と発掘区の北東から南西に延び、そこから大きく湾曲して南東へ伸びる溝状遺構が確認されているが、後の発掘調査の進展に伴ない、南東隅と北東部に見られる黒色土の落込みが竪穴住居跡であることが確認され、合計５軒の竪穴住居跡が存在することが判明した。遺物は溝状遺構のテラス部分やＨＰ－１とＨＰ－３との間にみられた窪み状の落ち込みから多量に出土した。

第２節　層序

本遺跡は札幌扇状地の中にあり、東側にほぼ南北に走る旧琴似川によって運ばれた褐色のシルト系の土壌により形成されたと考えられる。発掘区の東側が、西側よりも標高が高いことを見てもそれは



第3図　発掘区配置図および遺構関連図（1：500）

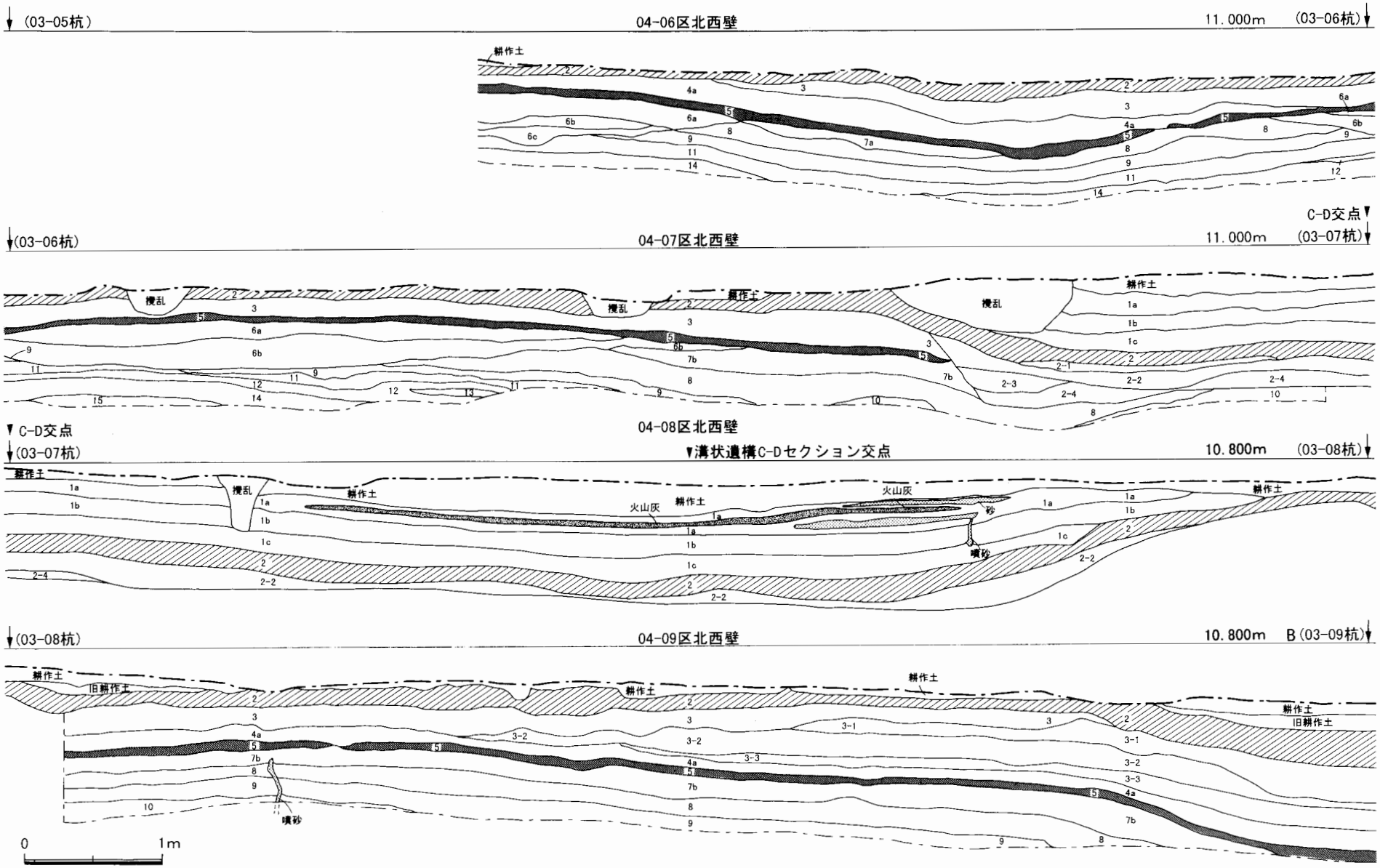
推測できるところである。調査に際しX軸の04列（A－B）、Y軸の07列（C－D）に設定した幅1m×深さ約1mのトレンチの断面を観察し、河川の流路や河川微高地の形成に関わる堆積過程や遺物、炭化物出土層などを考慮しながら、色調、土性、含有物などを基準に分層を行った。基本層の分層の結果は第1表に記した。なお色調の判別については「新版標準土色帳」（小山・竹原1973）を用いている。

層名は堆積の新しい順にアラビア数字を付けて行ったが、新たな層が現れた場合にはそれにアルファベットを付け、区別して表記した。従って、1a、1b、1cなど、数字とアルファベットで表記されているが、一方でこれらの層の間には、堆積根拠や土壌起源に基づく関係は基本的にはない。ただし、溝内や旧河川の落込みに堆積した中には、起源が同じ土壌が時期を変えて堆積していると考えられるものもあり、それについては層名－枝番号の形で表記した（例：2－1など）。

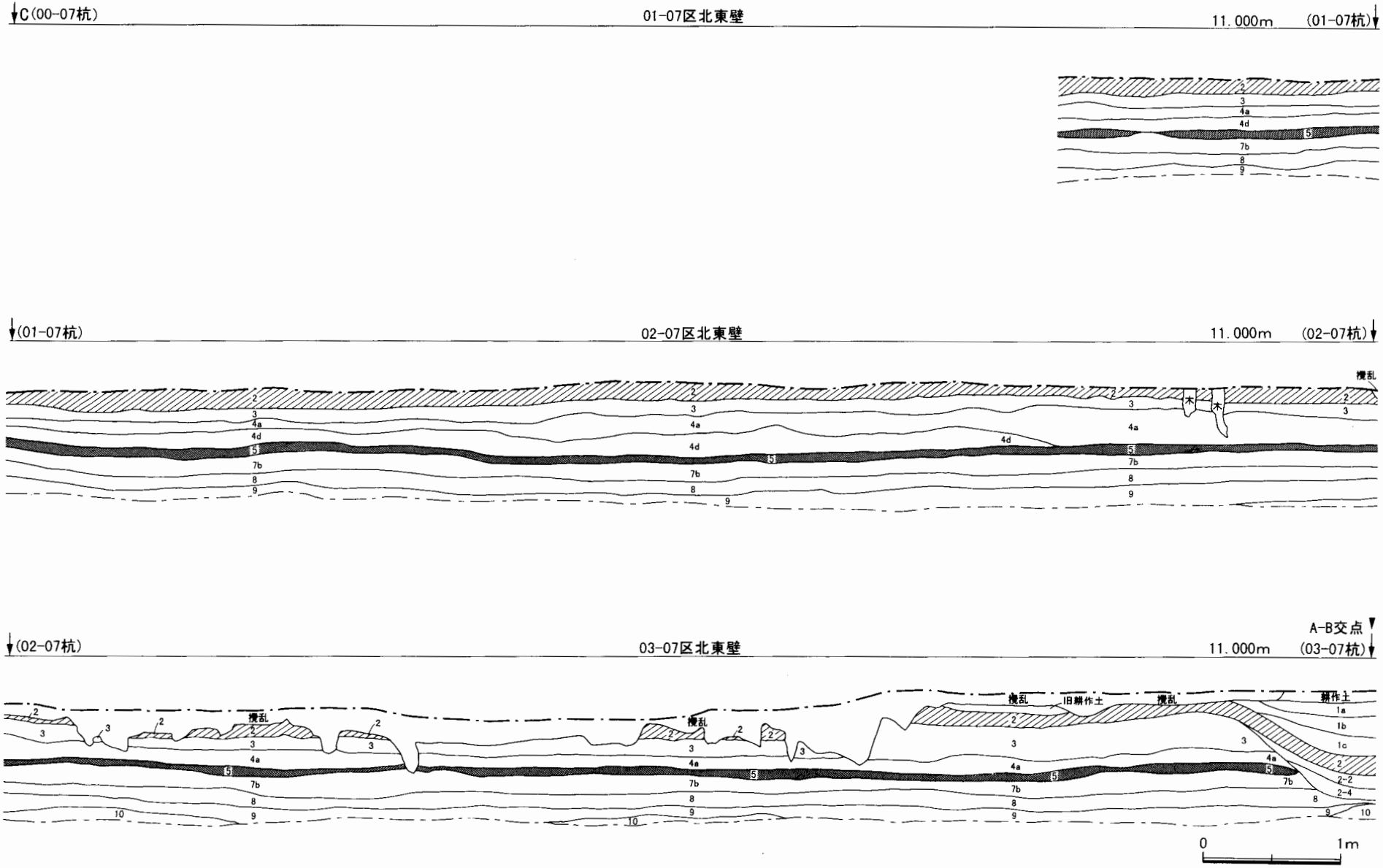
基本層の状況であるが、後の畑地のための土の移動や耕作により、1a、1b、1c層は遺構内に落込んだ部分にのみ確認された。これらには樽前a火山灰の二次堆積と思われる灰白色火山灰層や地震による液状化痕、その際に生じた噴砂に伴うものと思われる褐色砂が部分的にみられた。ちなみに樽前a火山灰の上下に褐色砂が確認されており、液状化を発生させる程の規模の地震がその前後に2度発生している可能性がある。遺物は3層上面からと2層中から出土しているが、3層中からの遺物の出土はなかった。そのため最も古い生活面は3層上面と思われる。また2層は肉眼ではこれ以上分層出来なかった。遺物はこの層分類に基づき、2層と3層とに分けて認識して取り上げた。遺構も同様に3層上面から2層中のいずれかで構築されており、どの遺構にも2層起源と見られる堆積物とその上層の1a、1b、1c層に相当する黒色土が落込んでいた。

第1表　基本層序土層注記表

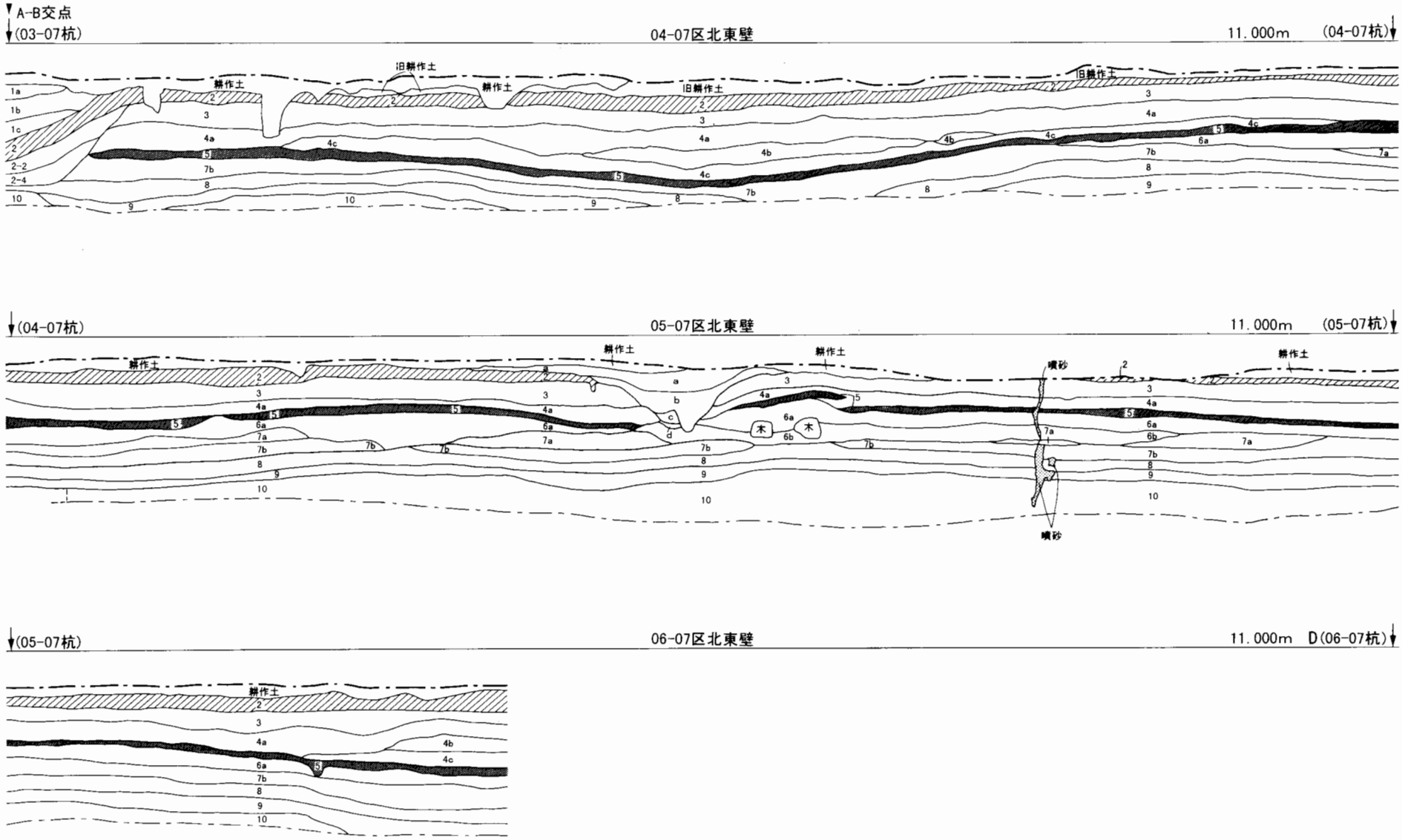
層名	色相	土色	土性	粘性	しまり	混入物など
耕作土	10YR2/1	黒色	シルト	やや弱	強	近年まで利用されていた土。
旧耕作土	10YR4/4	褐色	シルト	やや強	中	畑の造成に伴い削土され移動した土。
1a	10YR1.7/1	黒色	シルト	中	中	火山灰Ta-aと褐色砂が間層に入る。
1b	2.5Y2/1	黒色	シルト	やや強	中	
1c	7.5YR1.7/1	黒色	粘土質シルト	強	やや弱	腐植土層。
2	10YR2/3	黒褐色	シルト	やや弱	やや強	
2－1	10YR5/3	にぶい黄褐色	シルト	やや弱	やや弱	溝内に堆積した基本層2層の分層
2－2	10YR5/2	灰黄褐色	シルト	やや弱	中	溝内に堆積した基本層2層の分層
2－3	10YR4/1	褐灰色	シルト	やや強	中	溝内に堆積した基本層2層の分層
2－4	10YR5/3	にぶい黄褐色	シルト	やや弱	やや弱	溝内に堆積した基本層2層の分層
3	10YR4/2	灰黄褐色	シルト	やや弱	やや強	リモナイトが多い。
3－1	10YR5/3	にぶい黄褐色	シルト	やや弱	中	旧河川内に堆積した基本層3層の分層
3－2	10YR6/2	灰黄褐色	シルト	中	中	旧河川内に堆積した基本層3層の分層
3－3	10YR7/2	にぶい黄橙色	シルト	中	中	旧河川内に堆積した基本層3層の分層
4a	10YR5/4	にぶい黄褐色	シルト	やや弱	やや強	リモナイトが多い。
4b	10YR6/4	にぶい黄橙色	シルト	やや弱	やや強	
4c	10YR5/2	灰黄褐色	シルト	やや弱	やや弱	砂質分がやや多い。
4d	10YR6/2	灰黄褐色	シルト	やや強	中	
5	10YR5/2	灰黄褐色	シルト	中	やや強	炭化物が混じる。
6a	10YR6/3	にぶい黄橙色	シルト	中	中	
6b	10YR5/3	にぶい黄褐色	シルト	やや弱	中	
6c	10YR6/4	にぶい黄橙色	シルト	やや弱	やや弱	リモナイトが多い。
7a	10YR6/2	灰黄褐色	シルト	中	中	
7b	10YR5/6	黄褐色	砂質シルト	中	やや強	リモナイトが多い。
8	10YR5/3	にぶい黄褐色	シルト	中	中	やや砂質分を含む。
9	10YR6/3	にぶい黄橙色	シルト	中	中	
10	10YR5/4	にぶい黄褐色	シルト	中	中	砂質分が多く、部分的に砂シルトの互層もみられる。
11	7.5YR5/8	明褐色	砂	弱	やや弱	河川堆積物とみられる砂層。
12	10YR5/3	にぶい黄褐色	シルト	中	中	褐色砂層が間層（厚さ2～3㎜）としてはさまる。
13	10YR5/6	黄褐色	砂	弱	弱	2～3㎜の軽石が混じる。11層より径の大きい砂。
14	10YR4/6	褐色	砂質シルト	やや強	中	砂質分がやや多い。
15	10YR6/3	にぶい黄橙色	シルト	やや強	中	
a	10YR3/3	暗褐色	シルト	中	中	風倒木による2層のおちこみ。
b	10YR4/2	灰黄褐色	シルト	中	中	風倒木による2層3層の混じり。
c	10YR5/4	にぶい黄褐色	シルト	やや弱	やや強	風倒木による3層の混じり。
d	10YR5/1	褐灰色	シルト	やや弱	強	風倒木による4層の混じり。



第4図　発掘区セクション図(1)（1：40）



第５図　発掘区セクション図(2)（１：40）



第6図　発掘区セクション図(3)（1：40）

第４章　遺構および遺物

第１節　竪穴住居跡

１　第１号竪穴住居跡（口絵１Ａ・Ｂ、第７～10・35図、第２～４表、図版１Ａ～５Ｄ、18・21・22・26）

検出状況　耕作土を重機で排土した段階で、01－06杭を中心に黒色土の落込みがみられたことから、手掘りで上面を精査したところ、一辺が５ｍ前後の方形のプランが確認された。黒色土には火山灰の薄い間層がみられ、プランの上ではリング状に広がっていた。掘り込み面は基本層序の２層中であると思われるが、耕作が及んでおり、確認は出来ていない。

覆土堆積状況　はじめにⅫ層としたにぶい黄橙色のシルト質土が堆積しているが、北側壁にはそれが確認できなかったため、掘り過ぎていた事が、残したセクションベルトにより確認された。また床面より焼土粒範囲、焼土、炭化材が検出されており、その上にⅨ層が堆積している。このことからⅨ層を床面直上の層位とし、それより上位の層を覆土と認定した。Ⅰ、Ⅱ、Ⅳ層は基本層の１ａ～ｃ層にそれぞれ対応する黒色系シルトであり、Ⅲ層は火山灰である。Ⅶ層は溝状遺構の２-１～２-４層の間にみられる腐植の堆積物に対応するものと思われる。

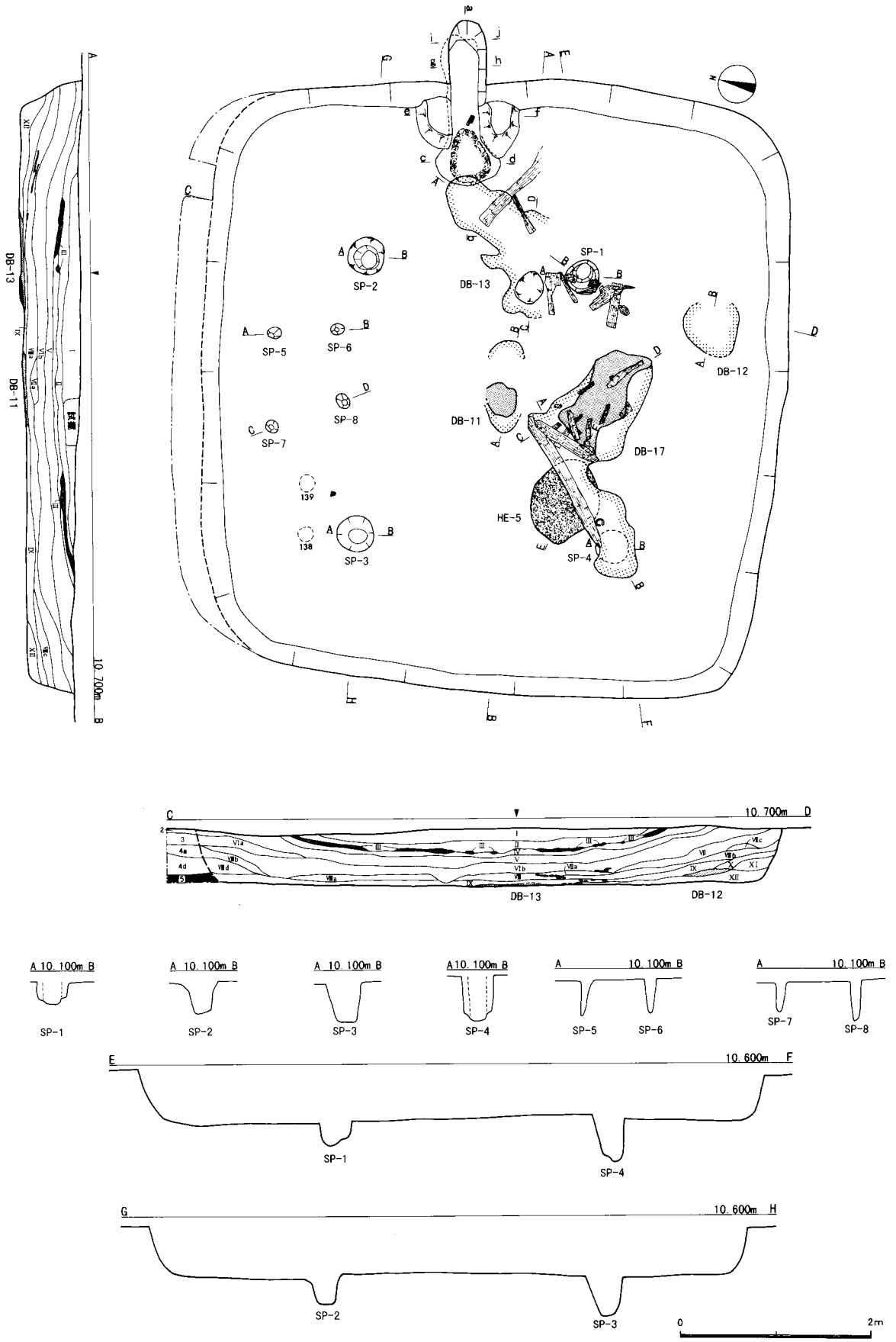
完掘状況　西側壁中央やや北寄りに煙道付きかまどを持つ、規模が6.5×(6.0)ｍのやや縦長の隅丸方形をした竪穴住居跡である。

遺物出土状況　床面直上の層としたⅨ層以下の出土遺物には漆製品や錫製環状装飾品といった稀少遺物があるが、主体はかまどに向って左側からまとまって出土した棒状礫である。土器は覆土から出土した破片資料が多く、一括性を欠いており、これらの出土状況から廃棄行為に伴うものではないことが予想された。図１の実測土器についても全体の４分の１程度が復元されているに過ぎない。この事から土器については流れ込みなどの不確定要素を持つ出土状態であると思われ、発掘調査の段階で竪穴と確実に伴うと判断できた遺物は、かまどに向って左側からまとまって出土した棒状礫や漆製品、錫製環状装飾品である。漆製品はＳＰ－３の北側のⅨ層より２個体出土しており、状況から床面のものと判断した。双方とも木胎の腐食が著しく、ほとんど漆の被膜だけの検出であったが、内一つは椀の形を残したまま、口縁部が上を向いた状態であると予想されたため、形状を崩さぬよう周囲の土ごと取り上げた。一方はすでに乱れており、形状は不明瞭であったが同様に土ごと取り上げた。錫製環状装飾品は、床面より検出されたＤＢ－17上面から出土しており、熱を受けて白く変質していたが環の形を保ったままであった。取上げには慎重を期したが、被熱による崩壊が著しく形状を保つことは困難であった。遺物の接合関係は覆土遺物と北東側の発掘区遺物との間に見られる。

柱穴　主柱穴が四隅に４基検出された他に、北側壁中央付近に径約12㎝、深さ約35㎝の柱穴が４ヶ所確認された。ＳＰ－１とＳＰ－４は、柱穴を掘り柱を立てた後、柱と掘り方の間に土を詰めることで隙間を塞いでいたと思われる。第７図の破線部分が柱の推定線であり、実線は掘り方である。

かまど構造　東側壁中央やや北よりに確認され、いわゆるトンネル型の煙道を持つかまどであった。火床側からの掘削が北側寄りになっており、煙出し口側からの掘削と接合点で若干ずれていた。かまどの袖も確認され、袖の部分の火床側は被熱により一部赤味がかっていた。なお火床西側に広がるＤＢ－13は、火床の灰層を掻き出した範囲と思われる。

焼土・焼土粒範囲　床面中央やや南西よりにＨＥ－５、他にＤＢ－11、12、13、17が東・南壁側に集中して検出された。ＨＥ－５、ＤＢ－12、13には焼骨が混じることが、肉眼レベルで確認されている。



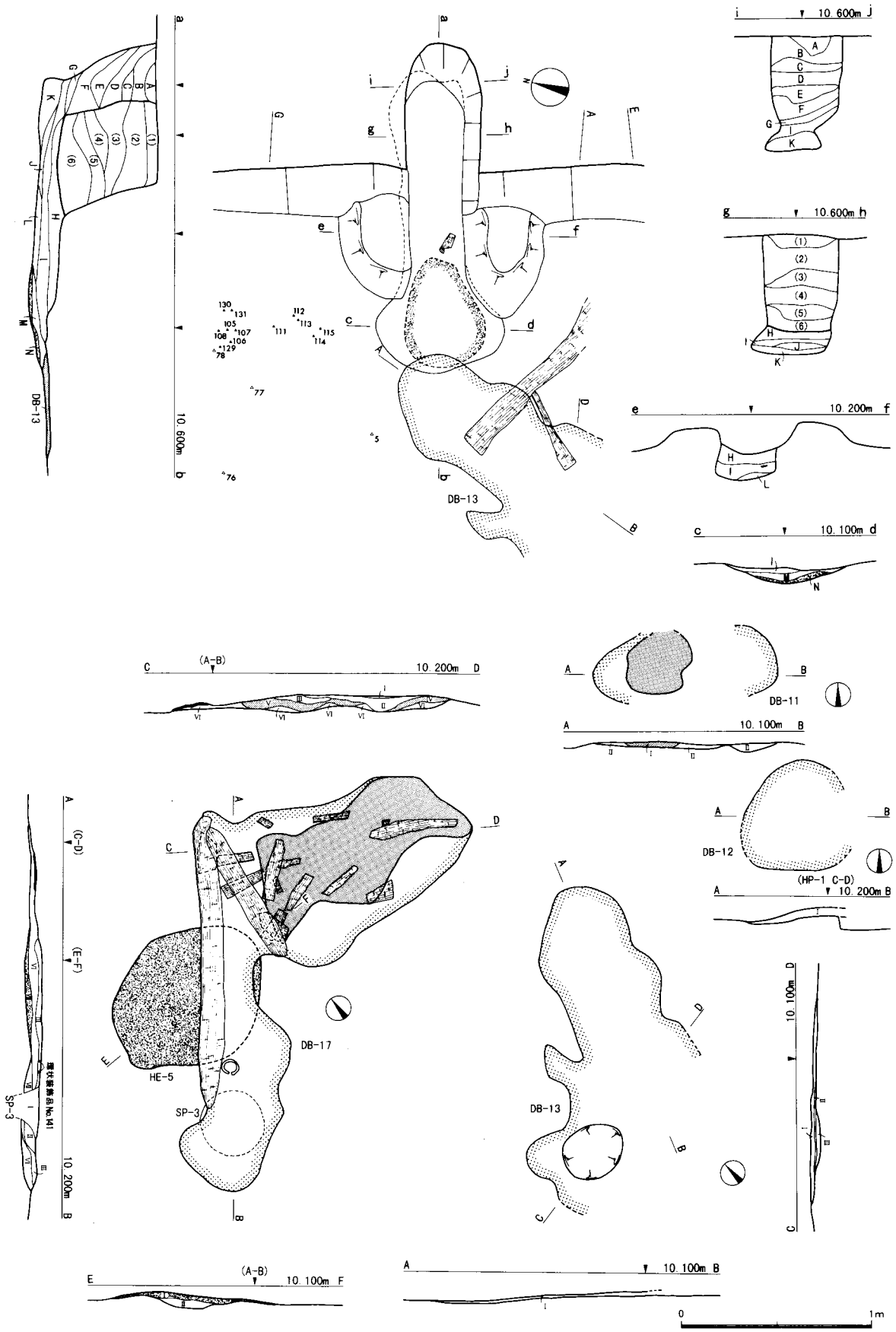
第７図　第１号竪穴住居跡（１：60）

第２表　第１号竪穴住居跡覆土土層注記表

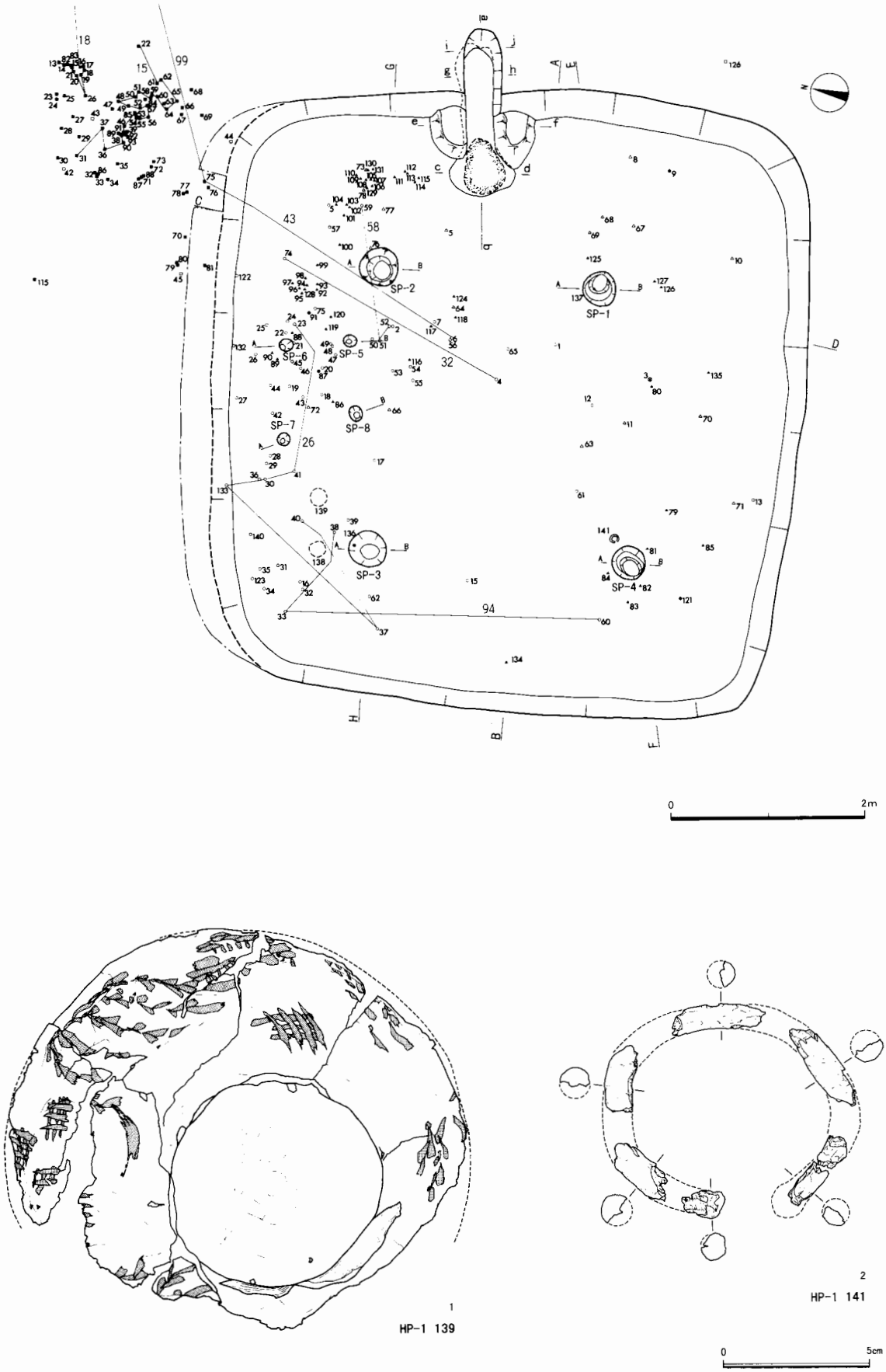
遺構名	層名	色相	土色	土性	粘性	しまり	混入物など
竪穴覆土	Ⅰ	7.5YR2/1	黒色	シルト	やや弱	やや弱	旧耕作土に褐色土粒が混じる。
	Ⅱ	7.5YR1.7/1	黒色	シルト	やや弱	弱	基本層1層の黒色土。
	Ⅲ	7.5YR7/4	にぶい橙色	シルト	弱	弱	径１～２㎜の乳白色火山灰堆積物。Ta-aとみられる。
	Ⅳ	7.5YR1.7/1	黒色	シルト	やや弱	弱	基本層１層の黒色土。
	Ⅴ	10YR3/1	黒褐色	粘土質シルト	やや強	やや強	基本層２層に炭が混じる。Ⅵaに比べて粒子が粗い。
	Ⅵa	10YR4/1	褐灰色	シルト	弱	強	基本層２層と同質のシルト。
	Ⅵb	2.5Y3/1	黒褐色	粘土質シルト	やや強	やや強	基本層２層に炭が混じる。Ⅴに比べて粒子が細かい。
	Ⅶa	7.5YR1.7/1	黒色	シルト	やや強	中	炭化物の堆積層。
	Ⅶb	10YR5/2	灰黄褐色	シルト	やや弱	強	基本層３層の流れ込み。
	Ⅶc	10YR4/2	灰黄褐色	シルト	やや弱	中	Ⅶb層に腐植土がまじる。
	Ⅷa	10YR6/1	褐灰色	シルト	やや弱	やや強	炭化物が混じる。
	Ⅷb	10YR5/4	にぶい黄褐色	シルト	やや強	中	リモナイトが多い。
	Ⅷc	10YR3/1	黒褐色	シルト	やや強	やや強	炭化物が混じる。
	Ⅷd	10YR5/4	にぶい黄褐色	粘土質シルト	中	中	
	Ⅸ	10YR4/1	褐灰色	シルト	やや強	中	Ⅷa層より腐植分が多い。
	Ⅹ	10YR5/3	にぶい黄褐色	シルト	やや強	中	
	Ⅺ	10YR5/3	にぶい黄褐色	粘土質シルト	中	やや強	
	Ⅻ	10YR6/3	にぶい黄橙色	シルト	やや強	中	
カマド覆土	A	10YR1.7/1	黒色	シルト	やや弱	中	炭化物が混じる。
	B	10YR5/3	にぶい黄褐色	シルト	やや弱	中	炭化物が微量に混じる。鉄分が多い。
	C	10YR4/2	灰黄褐色	シルト	中	中	炭化物が混じる。
	D	10YR4/3	にぶい黄褐色	粘土質シルト	やや強	中	炭化物が混じる。鉄分が多い。
	E	10YR4/2	灰黄褐色	粘土質シルト	やや強	中	焼土粒・炭化物が混じる。
	F	10YR5/4	にぶい黄褐色	粘土質シルト	やや強	中	鉄分が多い。
	G	10YR5/2	灰黄褐色	粘土質シルト	やや強	中	炭化物が混じる。
	H	5YR7/3	にぶい橙色	粘土質シルト	やや強	中	被熱により部分的に赤色化する。
	I	5YR4/1	褐灰色	シルト	強	中	炭・骨・焼土粒が混じる灰層。
	J	10YR6/2	灰黄褐色	粘土質シルト	やや強	中	
	K	5YR1.7/1	黒色	粘土質シルト	強	やや弱	炭化物・骨が混じる。
	L	10YR5/4	にぶい黄褐色	粘土質シルト	やや強	中	骨・炭が多量に混じる。
	M	5YR6/3	にぶい橙色	粘土質シルト	強	やや弱	骨を多量に含む灰層。
	N	5YR3/6	暗赤褐色	シルト	中	中	焼土層。
	(1)	10YR3/2	黒褐色	シルト	やや弱	やや強	
	(2)	10YR4/6	褐色	粘土質シルト	やや強	中	
	(3)	10YR4/1	褐灰色	粘土質シルト	中	中	
	(4)	10YR5/3	にぶい黄褐色	粘土質シルト	やや強	やや強	炭化物が混じる。
	(5)	10YR6/3	にぶい黄橙色	粘土質シルト	やや強	やや強	
	(6)	10YR6/2	灰黄褐色	粘土質シルト	やや強	中	
HE-5	Ⅰ	7.5YR4/2	灰褐色	シルト	強	中	焼土層で炭・骨が多い。
	Ⅱ	5YR2/1	黒褐色	粘土質シルト	やや強	中	腐植土層・炭が混じる。
DB-11	Ⅰ	5YR3/6	暗赤褐色	粘土質シルト	やや弱	中	炭が混じる焼土層。
	Ⅱ	5YR4/2	灰褐色	粘土質シルト	やや弱	中	炭化物が混じる灰層。
DB-12	Ⅰ	5YR3/1	黒褐色	粘土質シルト	強	やや弱	炭・骨・焼土粒が混じる灰層。
DB-13	Ⅰ	5YR4/1	褐灰色	粘土質シルト	やや強	中	炭・骨・焼土粒が混じる灰層。
	Ⅱ	7.5YR5/1	褐灰色	粘土質シルト	やや強	中	
	Ⅲ	7.5YR4/2	灰褐色	シルト	やや強	中	
DB-17	Ⅰ	10YR2/2	黒褐色	粘土質シルト	やや強	やや弱	
	Ⅱ	10YR5/4	にぶい黄褐色	シルト	中	中	
	Ⅲ	10YR5/2	灰黄褐色	シルト	やや強	中	焼土・炭化材を含む灰層（環状装飾品出土）。
	Ⅳ	5YR4/4	にぶい赤褐色	シルト	中	中	焼土・炭化材を含む灰層。
	Ⅴ	5YR4/1	褐灰色	シルト	中	中	炭化材を含む灰層。
	Ⅵ	10YR5/3	にぶい黄褐色	シルト	中	やや強	
	Ⅶ	5YR4/1	褐灰色	シルト	中	中	竪穴床面の焼土層（HE-5）の焼土粒の広がり。
	Ⅷ	5YR4/1	褐灰色	シルト	中	中	竪穴床面の焼土層（HE-5）。

第３表　第１号竪穴住居跡柱穴一覧表

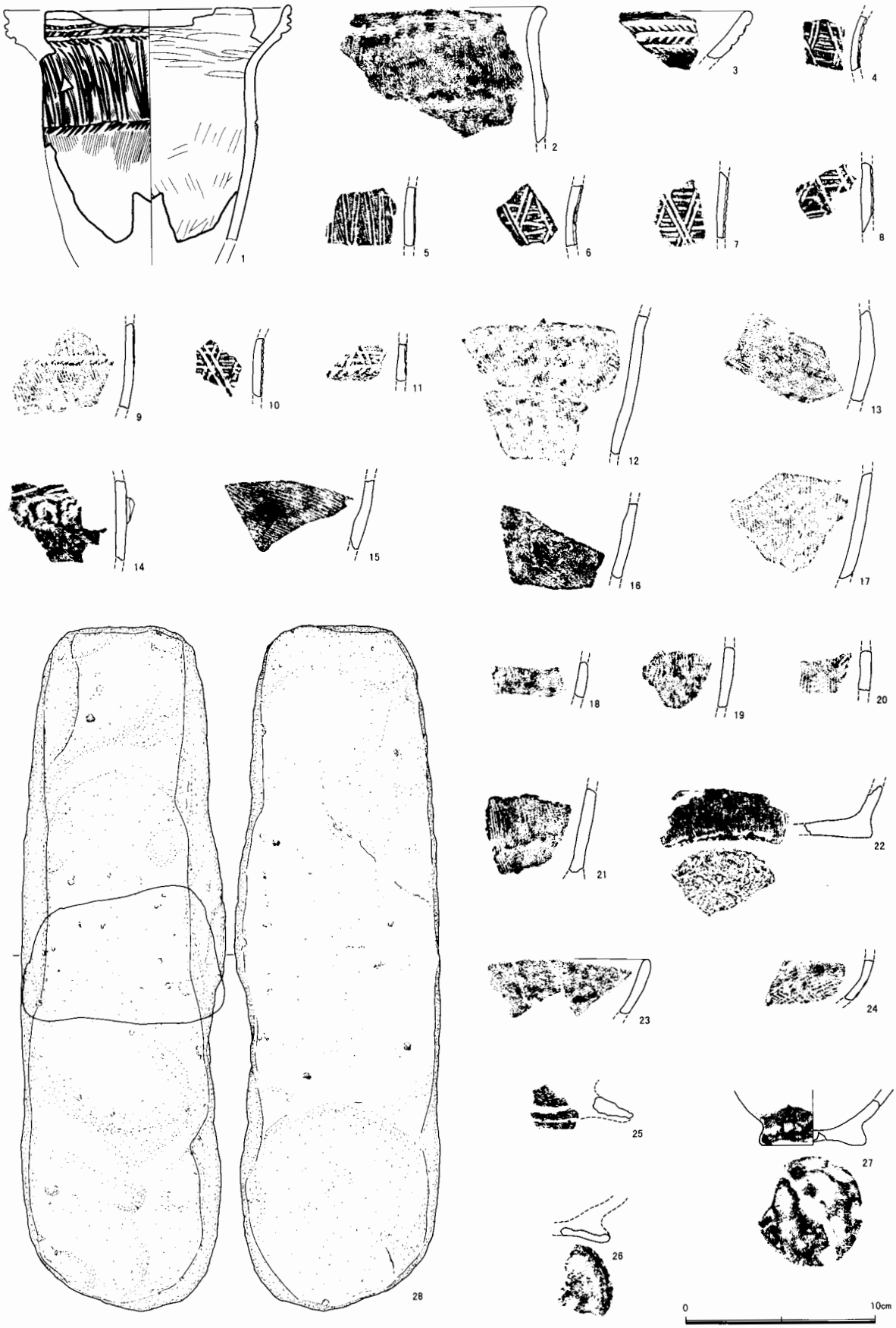
柱穴番号	平面形	標高（m）	長軸（m）	短軸（m）	深さ（m）	備　考
SP 1	不整円形	9.980	0.36	0.34	0.24	
SP 2	不整円形	9.980	0.40	0.38	0.35	
SP 3	不整円形	9.970	0.38	0.37	0.43	
SP 4	不整円形	10.050	0.37	0.37	0.49	
SP 5	不整円形	10.000	0.14	0.12	0.36	
SP 6	不整円形	9.980	0.14	0.13	0.39	
SP 7	不整円形	9.950	0.14	0.14	0.31	
SP 8	不整楕円形	9.980	0.16	0.13	0.44	



第８図　第１号竪穴住居跡かまどおよび床面検出焼土、焼土粒範囲（１：30）



第９図　第１号竪穴住居跡遺物出土状況（１：60）および漆器椀、環状装飾品実測図（１：２）



第10図　第１号竪穴住居跡出土遺物（１：３）

第４表　第１号竪穴住居跡出土土器属性表

挿図番号	個体番号	拓本番号	種類	部位	器面調整 外面	器面調整 内面	文様 口縁部	文様 胴部文様帯	文様 胴下部	底部形状	色調 外面	色調 内面	区名	層位	遺物番号	図版番号	備考
10-1	26		小甕	口唇部 ～胴下部文様	横ナデ 縦ハケメ	横ナデ 横ミガキ 横ミガキ 縦ミガキ 黒色処理	横走沈線３条 -斜刺突３段	鋸歯文	斜刺突		10YR7/3 にぶい黄橙	10YR3/1 黒褐	HP-1	Ⅴ Ⅶ	23,30,133 37,40,41	18-1	
10-2		46	甕	口唇部～胴部	横ナデ 縦ハケメ	横ハケメ 黒色処理					10YR7/2 にぶい黄橙	10YR4/1 褐灰	HP-1	Ⅴ	36	22-1	
10-3		59	甕	口唇部 ～口縁部	横ナデ	横ミガキ 黒色処理	横走沈線３条 -斜刺突３列				10YR5/1 褐灰	10YR2/1 黒	HP-1	Ⅴ	31	22-2	
10-4		89	甕	胴部文様帯	縦ハケメ	横ミガキ 黒色処理		横走沈線 -斜交叉文			10YR5/3 にぶい黄橙	10YR4/1 褐灰	HP-1	Ⅴ	29	22-3	
10-5		1	甕	胴部文様帯	縦ハケメ	縦ミガキ 黒色処理		鋸歯文			10YR8/3 浅黄橙	10YR3/1 黒褐	HP-1	Ⅴ	27	22-4	
10-6		98	甕	胴部文様帯	縦ハケメ	横ミガキ		横走沈線 -鋸歯文			10YR5/1 褐灰	10YR7/1 灰白	HP-1	Ⅴ	21	22-5	
10-7		91	甕	胴部文様帯	縦ハケメ	横ミガキ		横走沈線 -斜交叉文			10YR6/3 にぶい黄橙	10YR7/1 灰白	HP-1	Ⅶ	42	22-6	
10-8		96	甕	胴部文様帯	横ハケメ	横ナデ 黒色処理		斜交叉文 -横走沈線			10YR6/2 灰黄褐	10YR6/1 褐灰	HP-1	Ⅻ	136	22-7	
10-9	32	2	甕	胴部文様帯 ～胴部	縦ハケメ	横ナデ 黒色処理		鋸歯文	斜刺突		10YR6/3 にぶい黄橙	10YR2/1 黒	HP-1	Ⅱ Ⅵ	4 74	22-8	
10-10		102	甕	胴部文様帯	縦ハケメ	横ミガキ		横走沈線 -斜交叉文			10YR4/2 灰黄褐	10YR6/1 褐灰	HP-1	Ⅰ	1	22-9	
10-11		108	甕	胴部文様帯 ～胴下部文様帯	縦ハケメ	横ミガキ		横走沈線 -鋸歯文	斜刺突		10YR6/2 灰黄褐	10YR6/1 褐灰	HP-1	Ⅻ	87	22-10	
10-12	94	215	甕	胴部	縦ハケメ	縦ミガキ 黒色処理					10YR7/2 にぶい黄橙	10YR1.7/1 黒	HP-1	Ⅴ Ⅶ	33 38,60	22-11	
10-13		251	甕	胴部	斜ハケメ	横ハケメ 縦ミガキ 黒色処理					10YR6/4 にぶい黄橙	10YR3/1 黒褐	HP-1	Ⅰ	9	22-12	
10-14		239	甕	胴下部文様帯 ～胴部	横ナデ	縦ミガキ 黒色処理			貼付囲繞帯		7.5YR5/4 にぶい褐	7.5YR1.7/1 黒	HP-1	Ⅴ	26	22-13	
10-15		238	甕	胴部	斜ハケメ	横ミガキ 黒色処理					10YR6/3 にぶい黄橙	10YR2/2 黒褐	HP-1	Ⅶ	43	22-14	
10-16		216	甕	胴部	斜ハケメ	横ナデ 黒色処理					10YR8/2 灰白	10YR3/1 黒褐	HP-1	Ⅵ	65	22-15	
10-17		3	甕	胴部	縦ハケメ	縦ミガキ 黒色処理					10YR7/2 にぶい黄橙	10YR1.7/1 黒	HP-1	Ⅱ	140	22-16	
10-18		217	甕	胴部	縦ハケメ	縦ミガキ 黒色処理					10YR7/2 にぶい黄橙	10YR1.7/1 黒	HP-1	Ⅴ	32	22-17	
10-19		221	甕	胴部	縦ハケメ	縦ミガキ 黒色処理					10YR6/2 灰黄褐	10YR1.7/1 黒	HP-1	Ⅶ	75	22-18	
10-20		225	甕	胴部	縦ハケメ	縦ミガキ 黒色処理					10YR6/3 にぶい黄橙	10YR4/1 褐灰	HP-1	Ⅰ	2	22-19	
10-21		218	甕	胴部	縦ハケメ	横ハケメ -横ナデ 黒色処理					10YR4/3 にぶい黄褐	10YR1.7/1 黒	HP-1	Ⅴ	34	22-20	
10-22		31	甕	底部	縦ハケメ	横ナデ 黒色処理				擦痕	10YR6/4 にぶい黄橙	10YR7/2 にぶい黄橙	HP-1	Ⅴ	17	22-21	
10-23	58	78	坏	口唇部～体部	横ナデ -斜ハケメ	横ナデ 縦ミガキ 黒色処理					10YR6/2 灰黄褐	10YR3/2 黒褐	HP-1	Ⅶ	51,52,59	22-22	
10-24		219	坏	体部	横ナデ	横ミガキ 黒色処理		斜行沈線			10YR7/2 にぶい黄褐	10YR1.7/1 黒	HP-1	Ⅸ	91	22-23	磨滅
10-25		43	高坏	底部	横ナデ					沈線	10YR6/3 にぶい黄橙		HP-1	Ⅰ	13	22-24	
10-26		44	高坏	底部						揚げ底	10YR6/3 にぶい黄褐		HP-1	Ⅻ	121	22-25	
10-27	43	28	坏	底部	縦ハケメ -横ナデ	縦ミガキ 黒色処理				揚げ底	10YR7/2 にぶい黄橙	10YR7/2 灰黄褐	HP-1 01-07	Ⅴ 2	6 75(1)	22-26	

出土遺物（口絵１Ａ・Ｂ、第９・10図、第４表、図版18・21・22・26）

第10図－１は口縁部をやや立ち気味で成形されている小型の甕である。鋸歯文が胴部文様帯に展開している。５、９は同一個体片である。２は無文の口縁部片で広がりが無い。３は中型甕の口縁部片であり矢羽根状刺突列がみられる。４、６～８、10、11は胴部片で横走沈線と斜交差文の組み合わせである。14は胴下部文様帯片であり貼付けの上から馬蹄形の囲繞帯が押圧される。12、13、15～20は胴部片である。21、22は底部片。23～27までは坏であり、高台坏もしくは高坏に近いものと思われる。24は綾杉文が施文されたと思われるが摩滅が著しく不明瞭である。28は遺物番号66であり、ＳＰ－８の南側で覆土Ⅷ層から出土した大型の角礫である。使用した痕跡は認められなかった。

第９図－１は、床面出土の漆器椀である。木胎部は腐植しほとんど肉眼では確認できない状態であったが、漆の被膜だけである程度の形状を保持しており、文様などが観察できる状態であった。土圧により潰れているが、現状で最大幅約15.4cm、高さ約7.2cmであり、残存する高台の高さは約1.2cmである。底面には轆轤で加工された痕跡が明瞭であり、木胎の柾目の方向も観察できる。図中の底部に記

した、右上から左下へ走る斜線はそれである。下地に黒漆を２度塗りし、その後ベンガラ漆で文様をつけている。下地塗りは丁寧であるが、底部の塗りは薄いため前述の加工痕や柾目が観察できたと思われる。文様の付け方は粗雑で、筆の掃いが諸処に確認されており、塗りも薄い。文様のモチーフから「藤」、「松」、「目籠」、「その他の掃いや点」に分類できると思われる。

また、図には示していないが、図版21－６も同様に出土した漆製品である。形状は不明瞭であるが、下地に黒漆を１度だけ塗り、文様にベンガラ漆を用いて、「葉」の文様を塗りこんでいる。第９図－１とは逆に下地塗りは、それ程丁寧ではなく、文様の付け方は丁寧である。このことから、今回出土した２体の漆製品は異なる内容を持っており、少なくとも工人は明らかに違っている。また、それが製作地及び製作時期の差によるかは、今後の課題といえる。

第９図－２は、同じく床面出土の錫製環状装飾品である。被熱のため大型破片７つと微細片多数とに分離しており、大型破片についても裏面は崩壊し、表面は風化している。図は写真等により復元した出土状況における配置であるが、太さが径約１㎝で大きさが直径約９㎝のものであったと推定され、一部繋がらない部分をもつ環状の装飾品と思われる。大型片の総重量は17.89ｇである。材質の鑑定は、北海道開拓記念館小林幸雄氏にお願いし、お忙しい中、貴重な時間を割いて分析いただいた。記して感謝いたします。分析はEDSを用い、微細片の断面を軽く研磨して行っており、結果としてSn＝92.61％、Al＝4.79％、Si＝2.15％、Ca＝0.45％という値が得られている。ただし、Al、Si、Caについては不純物的存在ということで、材質的には純錫系のものであろうという結論をいただいた。

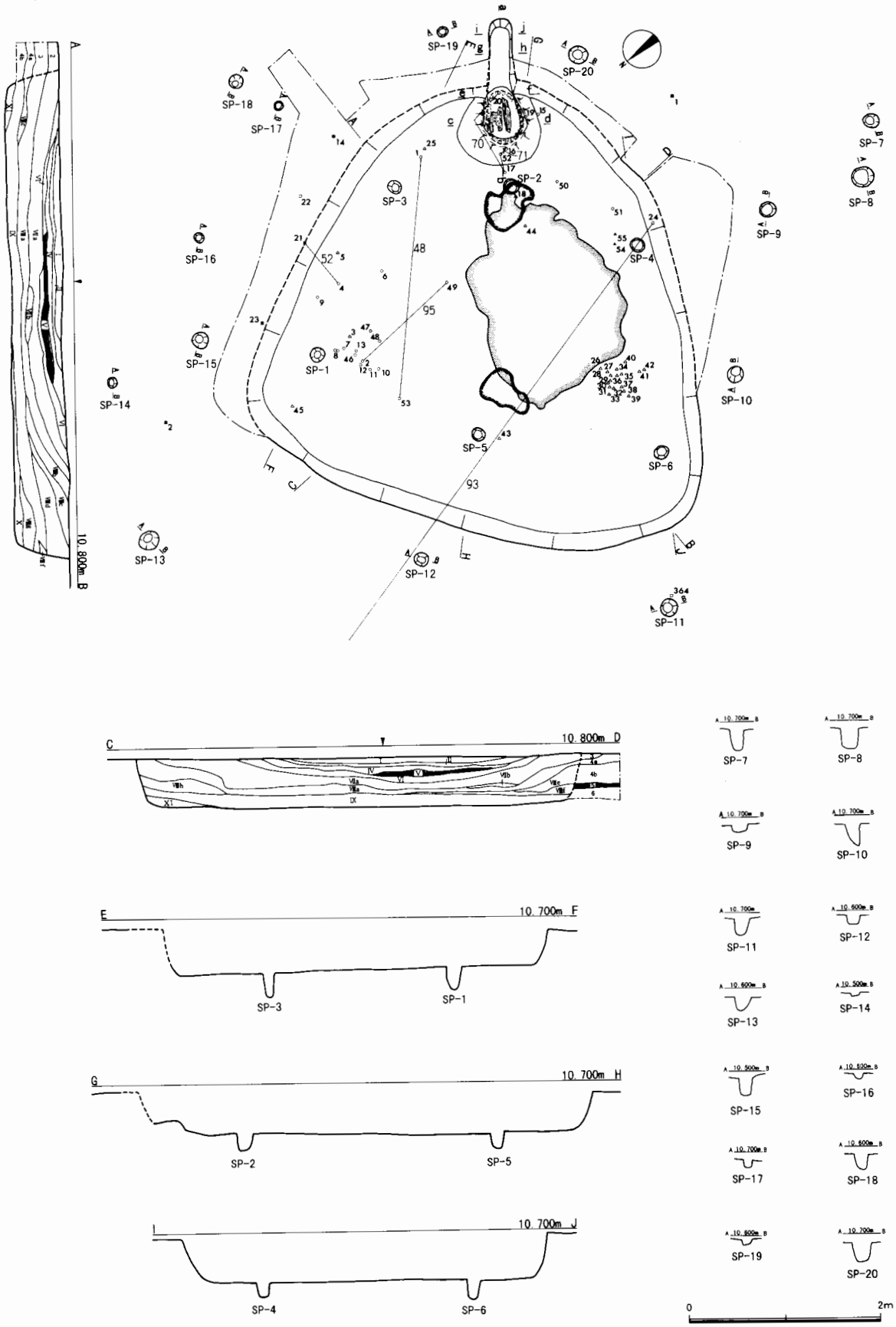
２　第２号竪穴住居跡（第11～13・35図、第５～７表、図版６Ａ～７Ａ・22・26）

検出状況　耕作土を重機で排土した段階で、05－08区に黒色土の落込みがみられたことから、手掘りで上面を精査したところ、直径４ｍ前後の楕円形のプランが確認された。黒色土には火山灰や液状化痕により噴出した褐色砂の二次堆積が間層としてみられたが、この時点では確認されていない。掘り込み面は基本層序の２層中であると思われるが、耕作が及んでおり、明らかではない。

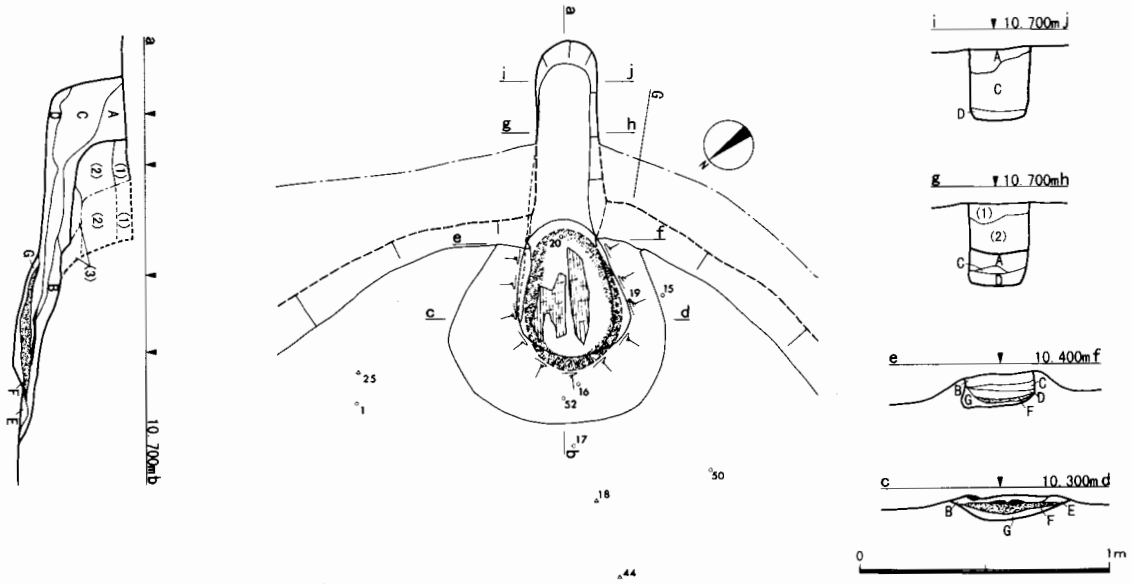
覆土堆積状況　覆土は、炭化物の混じるⅪ層としたシルト質土が最初に堆積した後、Ⅸ層が堆積している。壁際に小さな堆積があり、南側壁にはそれが確認できなかったため、壁面を全体的に掘り過

第５表　第２号竪穴住居跡覆土土層注記表

遺構名	層名	色相	土色	土性	粘性	しまり	混入物など
竪穴覆土	Ⅰ	7.5YR2/1	黒色	シルト	やや弱	中	旧耕作土。
	Ⅱ	7.5YR1.7/1	黒色	シルト	中	やや弱	基本層の１層。
	Ⅲ	7.5YR7/4	にぶい橙色	シルト	弱	弱	径１～２㎜の乳白色火山灰堆積物。Ta-aとみられる。
	Ⅳ	7.5YR1.7/1	黒色	シルト	中	やや弱	基本層の１層。
	Ⅴ	7.5YR5/6	明褐色	砂	やや弱	やや弱	噴砂により噴き上がった砂の二次堆積。
	Ⅵ	7.5YR1.7/1	黒色	シルト	中	やや弱	基本層の１層。
	Ⅶa	10YR3/1	黒褐色	シルト	強	やや強	基本層の２層。
	Ⅶb	10YR4/6	褐色	砂質シルト	弱	中	
	Ⅷa	10YR6/4	にぶい黄橙色	シルト	中	中	砂質分が多い。リモナイトが多い。
	Ⅷb	10YR3/2	黒褐色	シルト	中	中	焼土粒・炭が混じる。
	Ⅷc	10YR5/4	にぶい黄褐色	シルト	やや弱	中	砂質分が多い。
	Ⅷd	10YR5/3	にぶい黄褐色	シルト	中	中	
	Ⅷe	10YR5/3	にぶい黄褐色	シルト	やや弱	中	
	Ⅷf	10YR4/1	褐灰色	シルト	中	中	炭化物が混じる。
	Ⅷg	10YR4/2	灰黄褐色	シルト	やや弱	中	
	Ⅸ	10YR6/3	にぶい黄橙色	シルト	中	中	
	Ⅹ	10YR6/2	灰黄褐色	砂質シルト	やや弱	中	
	Ⅺ	10YR5/4	にぶい黄褐色	シルト	やや弱	中	リモナイトが多く、黒色土粒が混じる。
カマド覆土	A	10YR4/3	にぶい黄褐色	シルト	中	中	炭が混じる。
	B	5YR3/4	暗赤褐色	シルト	強	中	炭・焼土粒が混じる層。
	C	7.5YR5/3	にぶい褐色	シルト	中	中	焼土粒・炭が混じる。
	D	5YR5/1	褐灰色	粘土質シルト	強	中	骨・灰・焼土粒が混じる灰層。
	E	5YR3/4	暗赤褐色	シルト	強	中	炭・焼土粒が混じる層。
	F	5YR4/6	赤褐色	粘土質シルト	やや強	中	焼土層。
	G	5YR5/8	明褐色	粘土質シルト	強	中	鉄分を含んだ焼土の影響層。
	(1)	10YR4/2	灰黄褐色	シルト	やや弱	やや強	
	(2)	10YR4/4	褐色	粘土質シルト	中	中	
	(3)	5YR4/2	灰褐色	シルト	中	中	



第11図　第２号竪穴住居跡（１：60）



第12図　第２号竪穴住居跡かまど（１：30）

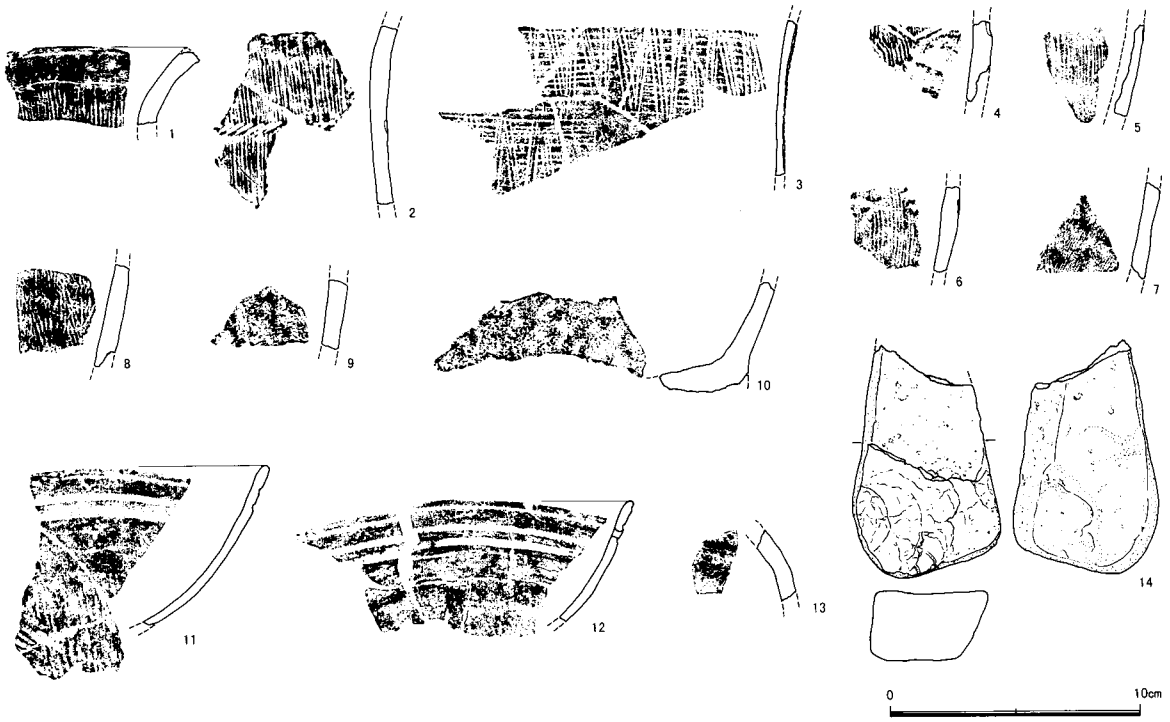
第６表　第２号竪穴住居跡柱穴一覧表

柱穴番号	平面形	標高（m）	長軸（m）	短軸（m）	深さ（m）	備　考
SP１	不整円形	10.180	0.16	0.14	0.26	
SP２	不整円形	10.180	0.16	0.15	0.19	
SP３	不整円形	10.120	0.15	0.14	0.26	
SP４	不整円形	10.170	0.14	0.13	0.16	
SP５	不整円形	10.170	0.15	0.13	0.18	
SP６	不整円形	10.180	0.16	0.14	0.20	
SP７	不整円形	10.630	0.17	0.14	0.23	
SP８	不整円形	10.620	0.23	0.20	0.22	
SP９	不整円形	10.630	0.16	0.15	0.09	
SP10	不整円形	10.610	0.18	0.16	0.24	
SP11	不整円形	10.650	0.19	0.17	0.19	
SP12	不整円形	10.550	0.15	0.13	0.10	
SP13	不整円形	10.500	0.22	0.19	0.15	
SP14	不整円形	10.430	0.11	0.09	0.05	
SP15	不整円形	10.450	0.17	0.15	0.22	
SP16	不整円形	10.460	0.11	0.09	0.06	
SP17	不整円形	10.520	0.10	0.09	0.09	
SP18	不整円形	10.520	0.15	0.13	0.17	
SP19	不整円形	10.570	0.12	0.10	0.06	
SP20	不整円形	10.600	0.20	0.18	0.21	

ぎていた事が、残したベルトのセクションにより確認された。また床面が東側に微妙に傾斜していたことから、東側壁におけるⅪ層の確認が遅れ、東側壁についても大きく掘り過ぎている。ただし下場のラインは残った状況から確認された。堆積状況からⅨ層のにぶい黄橙色シルトを床面・床直と認定し、それより上位の層を覆土とした。Ⅱ、Ⅳ、Ⅵ層は基本層の１ａ～ｃ層にそれぞれ対応する黒色系シルトであり、Ⅲ層には火山灰、Ⅴ層に褐色砂が間層としてみられた。それぞれスクリーントーンで範囲を図示している。

完掘状況　南東側壁中央に煙道付きかまどを持つ、規模が(4.8)×(4.3)ｍのかまどに向って窄まる隅丸三角形をした竪穴住居跡と思われる。

遺物出土状況　本号の遺物は全て覆土出土のものである。西側壁付近に棒状礫がまとまって出土したが、土器は破片資料であった。溝状遺構のテラス部分から出土した遺物との接合関係もあるが一括性を欠いており、流れ込みなどの不確定要素を持つ状態である。これらの出土状況から、本遺構と確実に伴うと思われる遺物は、発掘調査の段階では特定出来なかった。



第13図　第２号竪穴住居跡出土遺物（１：３）

第７表　第２号竪穴住居跡出土土器属性表

挿図番号	個体番号	拓本番号	種類	部位	器面調整 外面	器面調整 内面	文様 口縁部	文様 胴部文様帯	文様 胴下部	底部形状	色調 外面	色調 内面	区名	層位	遺物番号	図版番号	備考
13-1	52	50	甕	口縁部	横ナデ 縦ハケメ	横ナデ 横ミガキ 黒色処理					10YR5/1 褐灰	10YR1.7/1 黒	HP-2	Ⅵ	4，21	22-27	
13-2	95	220	甕	胴部文様帯	横ナデ 縦ハケメ	横ミガキ 黒色処理		斜刺突			10YR3/1 黒褐	10YR1.7/1 黒	HP-2	Ⅵ Ⅶ	2 49	22-28	
13-3	93	214	甕	胴部文様帯	縦ハケメ	横ミガキ 黒色処理		横走沈線 -鋸歯文 ２段			10YR6/3 にぶい黄橙	10YR1.7/1 黒	04-08 HP-2	1ｃ Ⅶ	349(2)，355(1)，360，362 24	22-29	
13-4		227	甕	胴下部文様帯	縦ハケメ	縦ミガキ 黒色処理			鋸歯文		10YR2/1 黒	10YR6/1 褐灰	HP-2	Ⅶ	46	22-30	
13-5		226	甕	胴部	縦ハケメ						10YR3/1 黒褐		HP-2	Ⅶ	8(1)	22-31	
13-6		240	甕	胴部	縦ハケメ	横ナデ 黒色処理					10YR5/2 灰黄褐	10YR1.7/1 黒	HP-2	Ⅶ	50	22-32	
13-7		224	甕	胴部	縦ハケメ	横ハケメ -縦ミガキ					10YR3/1 黒褐	10YR6/3 にぶい黄橙	HP-2	Ⅶ	51	22-34	
13-8		222	甕	胴部	縦ハケメ	縦ミガキ 黒色処理					10YR6/3 にぶい黄橙	10YR4/1 褐灰	HP-2	Ⅶ	9	22-35	
13-9		223	甕	胴部	横ナデ	縦ミガキ 黒色処理					10YR5/2 灰黄褐	10YR4/1 褐灰	HP-2	Ⅶ	48	22-33	
13-10	48	40	甕	胴部～底部	縦ハケメ	縦ミガキ 黒色処理					10YR6/2 灰黄褐	10YR4/1 褐灰	HP-2	Ⅶ Ⅰ	53 1(1)	22-36	
13-11	70	166	坏	口唇部～体部	横ナデ 縦ハケメ -横ナデ	横ナデ 横ミガキ 縦ミガキ 黒色処理	横走沈線３条				7.5YR5/6 明褐	7.5YR1.7/1 黒	HP-2	Ⅶ	17(1)，20	22-37	
13-12	71	167	坏	口唇部～体部	横ナデ 縦ハケメ -横ナデ	横ナデ 横ミガキ 縦ミガキ 黒色処理	横走沈線３条				10YR6/3 にぶい黄橙	10YR1.7/1 黒	HP-2	Ⅶ Ⅶ	16，17(2) 52	22-38	補修孔あり
13-13		255	須恵器壺	壺？	ロクロナデ	ロクロナデ					5 B4/1 暗青灰	5 B4/1 暗青灰	HP-2	Ⅶ	5	22-39	断面の色調 10R5/6赤

柱穴　床面を精査している段階で、灰褐色の直径10cm前後の円形プランが６基確認され全て柱穴とした。それらは壁際と竪穴中心線に沿って２基ずつ検出されているが、その内一つはかまど火床付近にも設置されている。他に竪穴外において黒褐色の円形プランが14基見られた。配列をみるとSP－７、８、14、16、17を除くと、かまどの煙道を基準にしてほぼ左右対称に列をなしている。またSP－14、16、17はそれらだけで直線的に配列しているようにもみられる。ただし竪穴との共存関係は掘

り込み面が明らかでないため、柱穴としての機能を果たしていたかという事を含め確認できていない。

かまど構造　南東側壁にトンネル型の煙道を持つかまどが検出され、火床より骨・炭化材が確認されている。

焼土、焼土粒範囲　棒状礫が出土した付近からDB－15が検出されたほか、HE－1に伴う焼土粒範囲の広がりが竪穴内に落込んでいた。

出土遺物（第13図、第7表、図版22・26）

第13図1～9は表面に縦方向のハケメ調整をした甕の破片であり、2、5には刺突列が、4には鋸歯文が施文される。3は器圧が薄く4㎜前後の胴部文様帯の破片であるが、多条の横走沈線の上に鋸歯文を2段で施文されており、溝状遺構テラス部分の1c層出土遺物と接合関係にある。10は甕の底部片である。11、12は坏で同一個体の口縁部片であり、口縁部付近に沈線が3条巡る。12には径3㎜の補修孔がみられる。13は須恵器の壷の肩部の破片である。外面には轆轤痕が残っており、裏面はナデである。色調は内外面とも暗青灰色（Hue 5 B 4/1）であったが、断面観察によれば断面中に薄く挟まれた状態で赤色（Hue 10 R 5/6）の部分が確認された。14は遺物番号55であり、SP－4の東側で覆土Ⅸ層から出土した敲石である。半分は欠損しているが、正面の図の左側に敲打による剝離痕がみられる。

3　第3号竪穴住居跡（第14～17・35図、第8～10表、図版7B～8B・18・22・26）

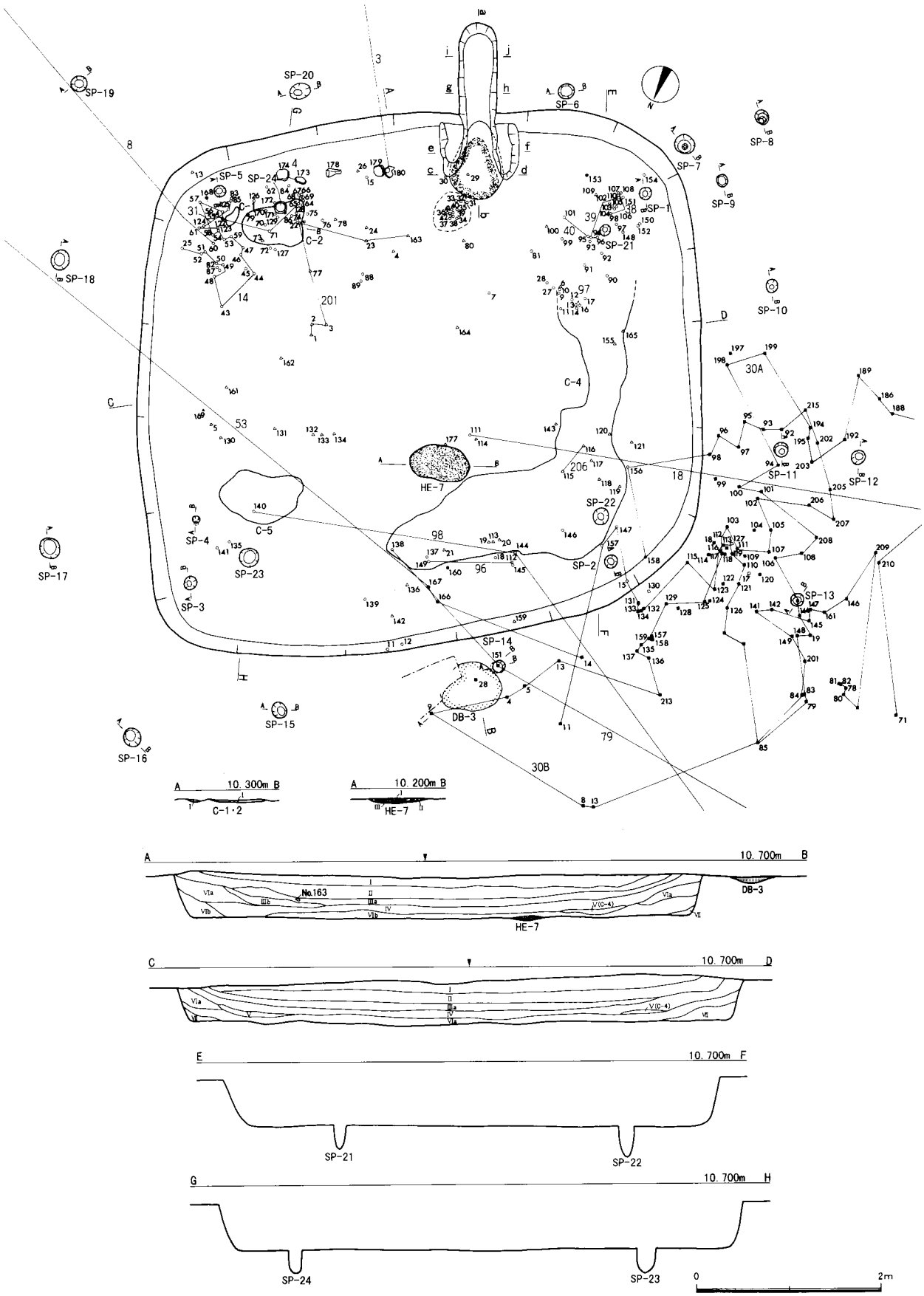
検出状況　耕作土を重機で排土した段階で、02－08区から02－09区にかけて黒色土の落込みがみられたことから、手掘りで上面を精査したところ、一辺が5m前後の隅丸方形のプランが確認された。掘り込み面は基本層3層の上面であると思われるが、このグリッドは標高が高く、基本層2層は耕作によりほとんど失われており、確実には明らかに出来なかった。

覆土堆積状況　はじめにⅦ層としたシルト質土が堆積しているが、かまど周辺の南東壁にはそれは確認されなかった。床面中央やや北西よりにHE－7が検出されており、その上にⅥb層が堆積し、壁際にはⅥa層がみられる。このことからⅥa・Ⅵb層以下を床面直上の層位とし、それより上位の層を覆土と認定した。またⅤ層は炭化物混じりの腐植土層とみられ、覆土内に部分的に堆積していた。

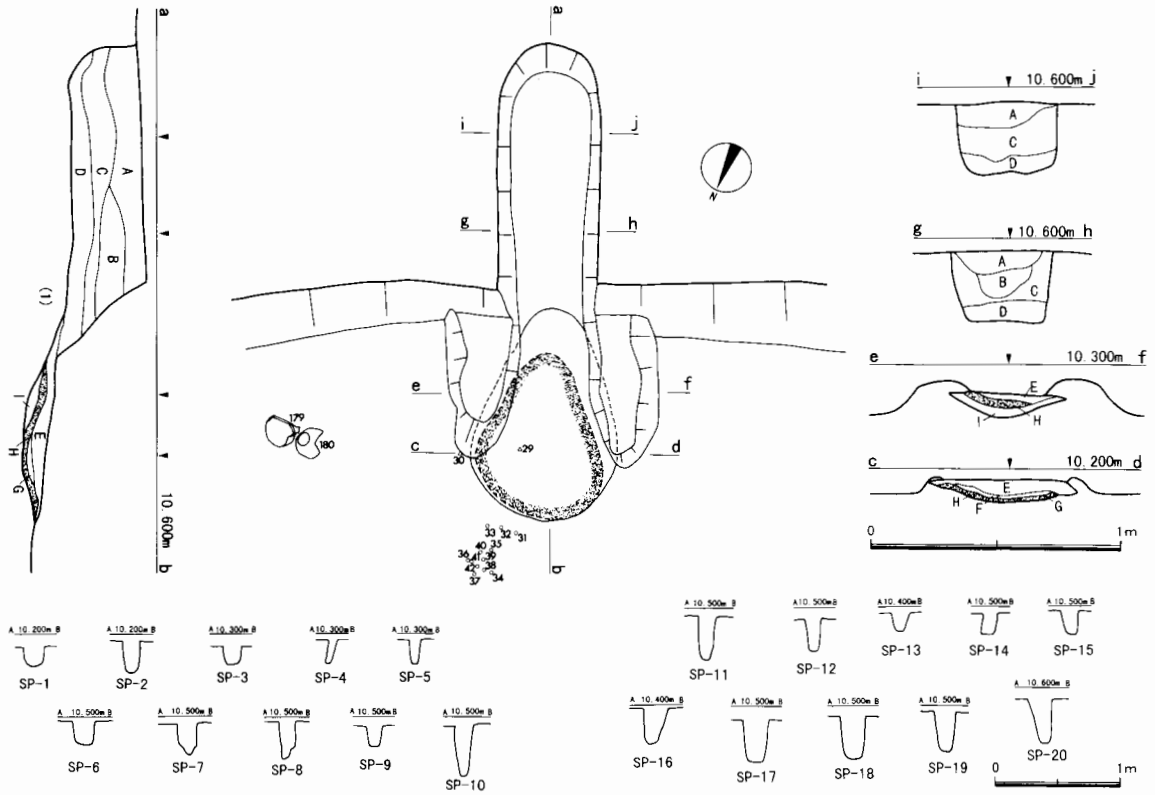
完掘状況　南東側壁中央やや北寄りに煙道付きかまどを持つ、規模が5.8×6.1mのやや横長の隅丸方形をした竪穴住居跡である。

遺物出土状況　遺物は南東壁や南西壁隅、かまど火床北西側から集中して出土している。遺物は土器が多く、層位により覆土と床面直上のグループに分けて理解できた。覆土出土の土器は、破片資料と一括出土のものに分類でき、本遺構の西側にみられる落込みや第4号竪穴住居跡の床面直上の遺物と接合関係を持つものも確認された。一括出土の土器は、廃棄行為によるものと思われる。また西側の落込みの遺物と接合関係にある遺物は、覆土がⅣ層で基本層の3層上面であるものが多い。床面直上としたⅦ層では、かまどに向って左側から坏3個体が一括で出土しており、発掘調査段階では遺物の出土状況から本遺構と伴う遺物と考えた。なお、その内第16図－8に示した坏は、溝状遺構の覆土2層との接合関係が確認されている。

柱穴　床面を精査している段階で、灰褐色の円形プランが9基確認され全て柱穴とした。竪穴床面の北側隅に3基みられ、残りはそれぞれの隅に2基ずつみられた。他に竪穴外においても直径10㎝前後の黒褐色の円形プランが16基見られた。これらは竪穴を取り囲むようにほぼ等間隔で検出されている。ただし竪穴との共存関係は掘り込み面が明らかでないため、柱穴の機能を果たしていたかという事を含め確認できていない。



第14図　第３号竪穴住居跡（１：60）



第15図　第３号竪穴住居跡かまど（１：30）

第８表　第３号竪穴住居跡覆土土層注記表

遺構名	層名	色相	土色	土性	粘性	しまり	混入物など
竪穴覆土	Ⅰ	10YR1.7/1	黒色	シルト	やや弱	やや弱	
	Ⅱ	10YR3/1	黒褐色	シルト	やや弱	中	微量の炭が混じる。
	Ⅲa	7.5YR1.7/1	黒色	粘土質シルト	強	中	炭・にぶい黄橙色（10YR6/4）シルト混じり。
	Ⅲb	10YR3/2	黒褐色	シルト	やや弱	やや強	炭が混じる。
	Ⅳ	10YR4/2	灰黄褐色	シルト	やや強	やや強	
	Ⅴ	2.5Y4/1	黄灰色	シルト	やや強	中	炭が混じる。
	Ⅵa	10YR5/3	にぶい黄褐色	シルト	中	中	砂質分を含む。
	Ⅵb	10YR5/2	灰黄褐色	粘土質シルト	やや強	やや強	
	Ⅶ	10YR4/1	褐灰色	シルト	強	中	炭が混じる。基本層５層起源。
カマド覆土	A	10YR4/4	褐色	シルト	やや強	中	
	B	10YR5/4	にぶい黄褐色	シルト	やや強	中	
	C	10YR4/2	灰黄褐色	シルト	やや強	中	
	D	10YR6/4	にぶい黄橙色	粘土質シルト	やや強	やや強	鉄分多い。
	E	5 YR3/4	暗赤褐色	シルト	中	中	灰層・炭・骨・焼土粒が混じる。
	F	5 YR3/6	暗赤褐色	粘土質シルト	やや強	中	灰層。
	G	7.5YR6/2	灰褐色	粘土質シルト	やや強	やや弱	多量の骨が混じる灰層。
	H	5 YR4/6	赤褐色	粘土質シルト	中	中	焼土層。
	I	10YR4/2	灰黄褐色	シルト	やや強	中	
	(1)	10YR5/3	にぶい黄褐色	シルト	中	中	
HE-7	Ⅰ	5 YR3/4	暗赤褐色	シルト	やや強	中	炭・骨が混じる焼土層。
	Ⅱ	5 YR4/1	褐灰色	シルト	中	中	炭・骨・焼土粒が混じる灰層。
	Ⅲ	10YR5/2	灰黄褐色	シルト	中	やや強	焼土の影響層。
C-1・2	Ⅰ	10YR3/2	黒褐色	粘土質シルト	やや強	やや強	HP-３のⅢ層・炭層の範囲。

第9表　第3号竪穴住居跡柱穴一覧表

柱穴番号	平面形	標高（m）	長軸（m）	短軸（m）	深さ（m）	備　考
SP 1	不整円形	10.000	0.13	0.12	0.17	
SP 2	不整円形	10.000	0.14	0.13	0.26	
SP 3	不整円形	10.000	0.15	0.12	0.16	
SP 4	不整円形	10.000	0.08	0.07	0.19	
SP 5	不整円形	10.000	0.12	0.11	0.19	
SP 6	不整楕円形	10.470	0.17	0.15	0.20	
SP 7	不整円形	10.450	0.22	0.20	0.26	
SP 8	不整円形	10.460	0.16	0.13	0.30	
SP 9	不整楕円形	10.430	0.14	0.12	0.17	
SP10	不整円形	10.390	0.15	0.12	0.42	
SP11	不整円形	10.470	0.16	0.14	0.37	
SP12	不整円形	10.410	0.16	0.15	0.27	
SP13	不整円形	10.360	0.16	0.14	0.16	
SP14	不整円形	10.450	0.14	0.13	0.17	
SP15	不整円形	10.460	0.18	0.15	0.20	
SP16	不整円形	10.380	0.20	0.18	0.29	
SP17	不整楕円形	10.390	0.24	0.21	0.35	
SP18	不整円形	10.420	0.22	0.18	0.36	
SP19	不整円形	10.450	0.19	0.17	0.33	
SP20	不整楕円形	10.500	0.22	0.17	0.36	
SP21	不整円形	10.000	0.13	0.11	0.26	
SP22	不整円形	9.990	0.19	0.18	0.34	
SP23	不整円形	10.000	0.22	0.20	0.28	
SP24	不整円形	10.000	0.14	0.12	0.26	

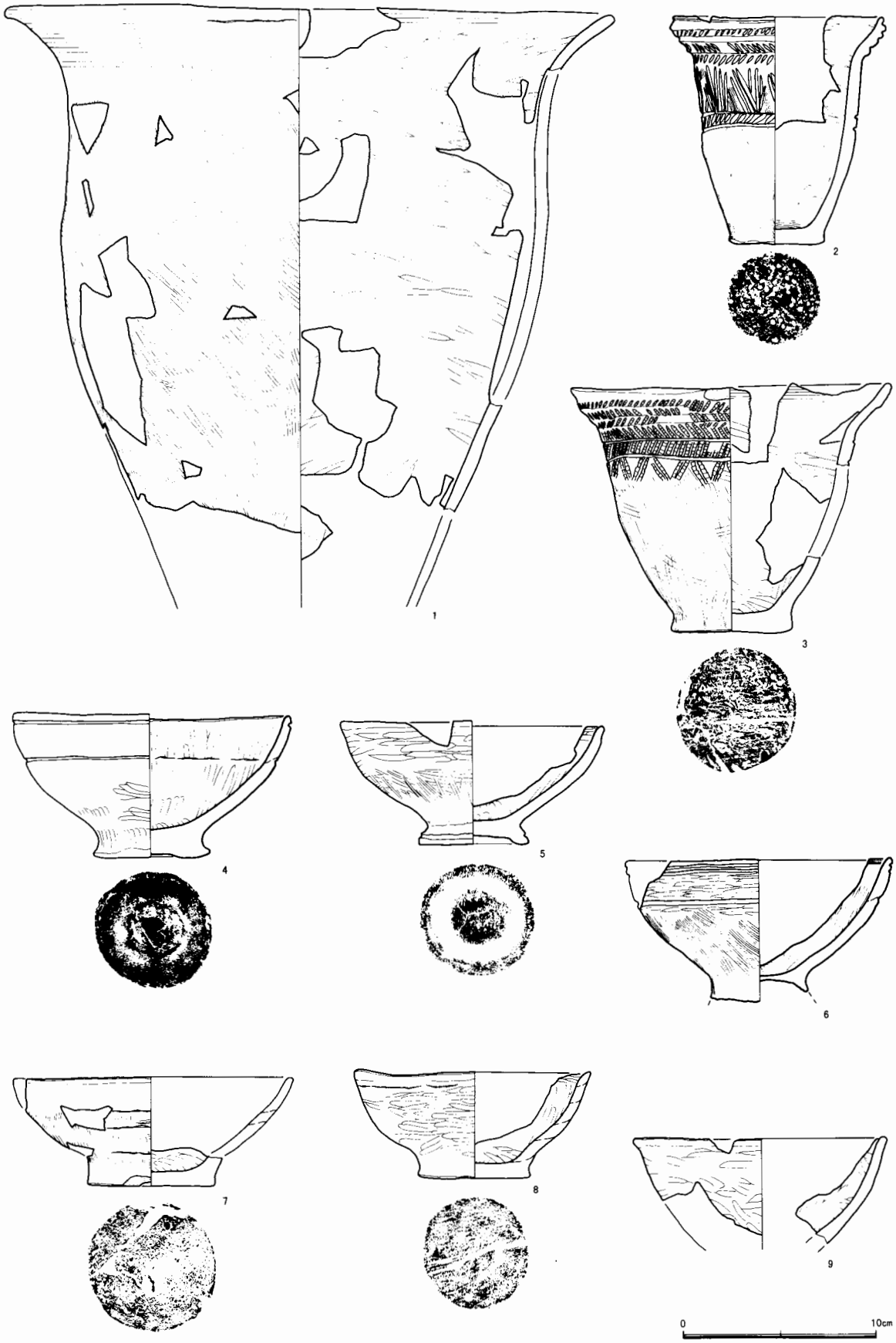
かまど構造　南東側壁に煙道つきのかまどが検出された。またかまどの袖も確認され、袖の部分は被熱により一部赤味がかっていた。火床には炭混じりの骨層が確認されている。

焼土、焼土粒範囲　竪穴の床面中央やや北西よりにHE－7が検出された。

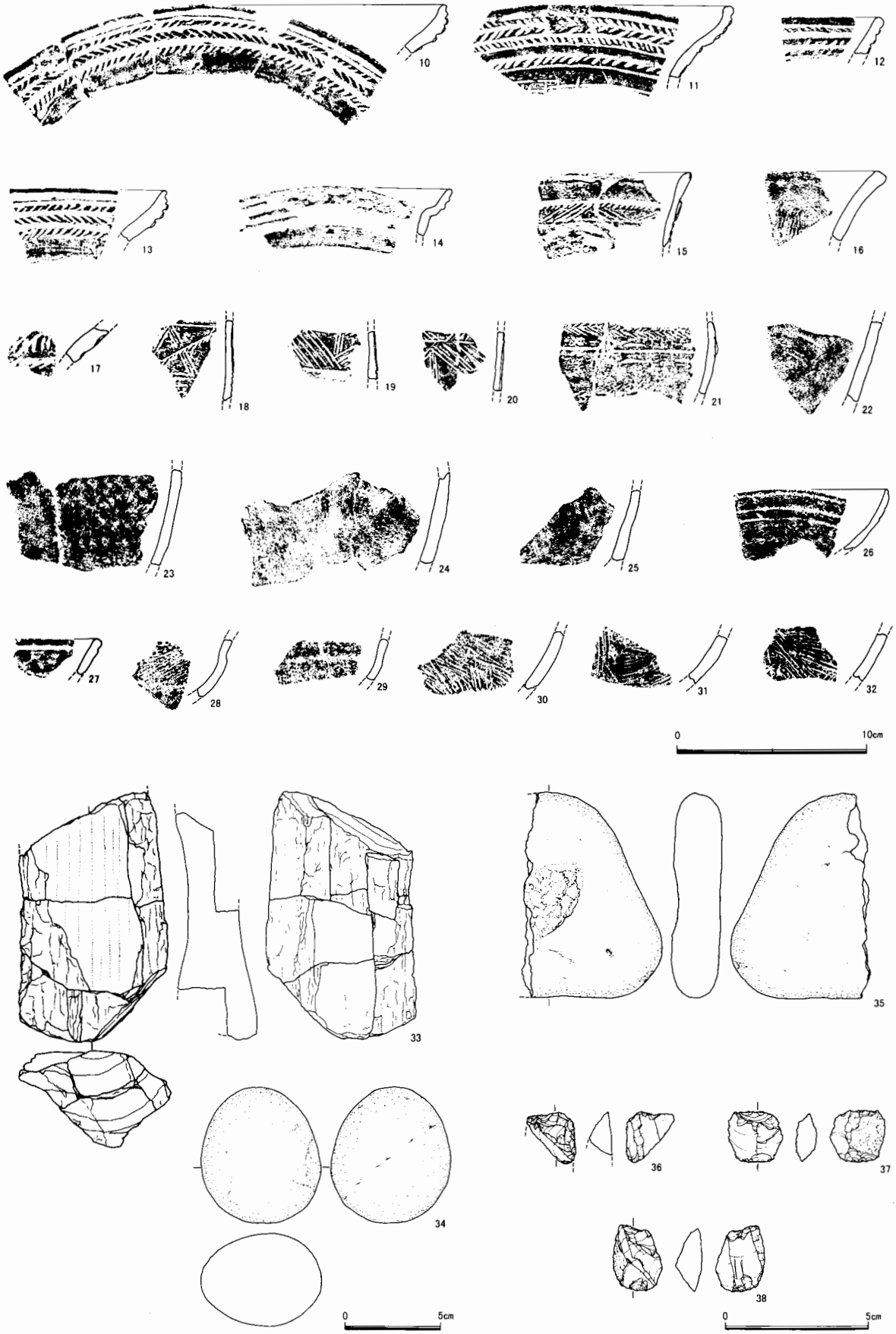
出土遺物（第16・17図、第10表、図版18・22・26）

第16図－1は口縁部が開いている甕である。文様はなく、調整痕のみである。2は口唇部付近でやや内傾気味に成形された小型の甕であり、胴部文様帯に横走沈線を持たず、多条の斜沈線を鋸歯状に展開した文様が施文されている。底部には直径2㎜程度の丸い窪みが無数にみられた。3も口縁部の状態は似ているが、胴部は張り出しており、全体的に丸型の器形である。文様はハケメ工具を斜めに押圧した刺突列で構成されており、上から斜めの向きを互い違いにした刺突列が5段、それと2列ずつ鋸歯状に展開した刺突列が1段、合計6段の刺突列が施文される。また上から3段までとそれ以下では、工具の幅が異なっており、5段目の上下の境界に沈線を1条ずつ巡らせている。第17図－10～13は矢羽根状刺突列を持つ口縁部片である。14は口縁部付近で段状に屈曲しており、横走沈線が3条巡らされる。15は貼付帯上に沈線を鋸歯状展開させた小型の甕である。16は無文の甕の口縁部片である。17は口唇部は欠損しているが、刺突列が施文される口縁部片である。18～20は胴部文様帯の破片であり、横走沈線を持たず交叉文や斜沈線の組み合わせで施文される。21は胴下部文様帯の破片であり、矢羽根状刺突列とその下部に貼付けがみられる。22～24は胴部片であり、25は底部片である。

第16図－4～9は復元された坏である。4～8までは高台坏であり、9は欠損のため不明である。4、6は口縁部に、5には底部側縁に沈線が巡っている。4、5は揚げ底であり、7、8は平底である。第17図－26～27は坏の口縁部片であり、沈線が巡る。28～32は坏の体部片であり、28は途中に段を持つ。33は覆土出土の硅化木の接合資料である。点線部は砥面の可能性もある。34は覆土出土の円礫であり、表面の最頂部の平滑さを見る限り、磨石である可能性もある。35は半分欠損しているが凹石である。36～38はピエス・エスキーユである。原石面の角度から直径5㎝以下の黒曜石の円礫を用いたものと推定される。



第16図　第３号竪穴住居跡出土遺物(1)（１：３）



第17図　第３号竪穴住居跡出土遺物(2)（１：３、１：２）

第10表　第３号竪穴住居跡出土土器属性表(1)

挿図番号	個体番号	拓本番号	種類	部位	器面調整 外面	器面調整 内面	文様 口縁部	文様 胴部文様帯	文様 胴下部	底部形状	色調 外面	色調 内面	区名	層位	遺物番号	図版番号	備考
16-1	30A		甕	口唇部～胴部	横ナデ 縦ハケメ 斜ハケメ 縦ハケメ	横ミガキ 横ハケメ -縦ハケメ					10YR3/2 黒褐	10YR2/1 黒	02-08	2	11,15 19,47, 48,49,	18-4	
														3	94,100, 101,106, 108,110, 112,115, 117,119, 121,123, 126,131 (1,2),132, 133,134, 143,144, 148,149, 173,186, 188,189, 192,194, 195,198, 199,203, 208,210, 211,212		
													02-09	3	11,12		
													01-08	2	71,83, 85(2)		
														3	79		
													HP-3	Ⅳ	147,157		
16-1	30B		甕	口唇部～胴部	横ナデ 縦ハケメ 斜ハケメ 黒色処理	横ミガキ 黒色処理 横ハケメ -縦ハケメ					10YR3/2 黒褐	10YR2/1 黒	01-08	2	84,85(1)	18-4	
														3	8,13,77, 78,80,81, 82		
														耕作土	(3)		
													02-08	2	4,5,13		
														3	92,93,95, 96,97,98 102,103, 105,107, 111,118, 125,129, 135,136, 137,141, 142,145, 146,147, 157,158, 159,161, 201,202, 205,206, 207,209, 213,215, 不明(3)		
														耕作土	(6)		
														不明	(2)		
													02-09	3	9		
													HP-3	Ⅳ	156,158		
16-2	8		小甕	口唇部～底部	横ナデ 縦ハケメ	横ミガキ 縦ミガキ 黒色処理	横走沈線３条 -斜刺突２列	上端斜刺突 -鋸歯文	横走沈線２条 -間斜刺突	砂底？	10YR3/2 黒褐	10YR4/1 褐灰	HP-3	Ⅱ	60	18-2	
													HP-4	Ⅳ	131		
16-3	14		小甕	口唇部～ 胴下部文様帯	横ナデ 縦ハケメ 一部 横ハケメ	横ミガキ 縦ミガキ 黒色処理	刷毛目工具 による 斜刺突３段	横走沈線２条 -間刷毛目工 具による斜刺 突２段	刷毛目工具 の押圧による 鋸歯状文	笹痕	10YR6/3 にぶい黄橙	10YR2/1 黒	HP-3	Ⅱ	43,44,45, 47,48,49, 50,51,52, 53,54,55, 56,57,58, 59(1),63, 65,67,68, 69	18-3	
														Ⅲ	71,不明(1)		
														Ⅳ	25		
16-4	4		高台坏	口唇部～底部	横ナデ 横ミガキ	横ミガキ 縦ミガキ 黒色処理	横走沈線２条			揚げ底 擦痕	10YR7/3 にぶい黄橙	10YR6/1 褐灰	HP-3	Ⅵ	174	18-9	
														Ⅴ	173		
16-5	18		高台坏	口唇部～底部	横ハケメ -横ミガキ 横ハケメ -縦ハケメ -横ミガキ	横ナデ -横ミガキ 縦ミガキ 黒色処理				揚げ底 側線に 横走 沈線	10YR6/4 にぶい黄橙	10YR1.7/1 黒	01-07	2	13,14,15, 16,17,18, 19,20,21, 26,82,83	18-10	
													HP-3	Ⅱ	111		
16-6	2		高台坏	口唇部～底部	横ナデ 縦ハケメ 横ナデ	横ミガキ 縦ミガキ 黒色処理	横走沈線３条				2.5Y8/3 淡黄	10YR1.7/1 黒	HP-3	Ⅵ	179	18-8	
16-7	9		高台坏	口唇部～底部	横ナデ 縦ハケメ	横ミガキ 縦ミガキ 黒色処理				擦痕	7.5YR6/6 橙	2.5Y3/1 黒褐	HP-3	Ⅱ	32,33,34, 36,37,39, 40,41(1)	18-5	
16-8	3		高台坏	口唇部～底部	横ナデ 横ミガキ 横ナデ	横ミガキ 縦ミガキ 黒色処理				笹痕	10YR7/4 にぶい黄橙	10YR5/2 灰黄褐	HP-3	Ⅵ	180	18-7	
													04-08	2	160		
16-9	31		坏	口唇部～体部	横ナデ -横ミガキ	横ナデ -横ミガキ 縦ミガキ 黒色処理					10YR5/2 灰黄褐	10YR4/1 褐灰	HP-3	Ⅱ	61	18-6	
														Ⅳ	83,123, 124,125		
17-10	79	181	甕	口唇部 ～口縁部	横ナデ	横ナデ 横ミガキ 黒色処理	横走沈線４条 -斜刺突３列				7.5YR5/4 にぶい褐	7.5YR1.7/1 黒	01-08	2	3	22-40	
														3	26		
													02-08	3	151		
													HP-3	Ⅳ	138		
17-11	53	52	甕	口唇部 ～口縁部	横ナデ	横ミガキ 黒色処理	横走沈線６条 -斜刺突４列	横走沈線 -鋸歯文			10YR2/2 黒褐	10YR1.7/1 黒	HP-3	Ⅵ	166,167	22-41	
													HP-4	Ⅵ	91		
													02-08	2	14		
17-12		67	甕	口唇部 ～口縁部	横ナデ	横ミガキ 黒色処理	横走沈線４条 -斜刺突３列				10YR5/2 灰黄褐	10YR4/2 灰黄褐	HP-3	Ⅳ	126	22-42	
17-13		182	甕	口唇部 ～口縁部	横ナデ	横ナデ 横ミガキ 黒色処理	横走沈線４条 -斜刺突３列				7.5YR5/4 にぶい褐	7.5YR1.7/1 黒	HP-3	Ⅳ	146	22-43	
17-14		18	甕	口唇部 ～口縁部	横ナデ	横ナデ 黒色処理	横走沈線３条				10YR5/4 にぶい黄褐	10YR3/3 暗褐	HP-3	Ⅳ	90	22-44	
17-15	39	21	甕	口縁部～ 胴部文様帯	横ナデ	横ミガキ 黒色処理		鋸歯文			10YR4/2 灰黄褐	10YR2/2 黒褐	HP-3	Ⅳ	94,96,105	22-45	被熱による剥離あり

第10表　第３号竪穴住居跡出土土器属性表(2)

挿図番号	個体番号	拓本番号	種類	部位	器面調整 外面	器面調整 内面	文様 口縁部	文様 胴部文様帯	文様 胴下部	底部形状	色調 外面	色調 内面	区名	層位	遺物番号	図版番号	備考
17-16		56	甕	口唇部～口縁部	横ナデ 縦ハケメ	横ナデ 横ミガキ 黒色処理					10YR2/1 黒	10YR2/1 黒	HP-3	Ⅳ	15	22-46	
17-17		109	甕	口縁部	横ナデ	横ミガキ 黒色処理	横走沈線１条 -斜刺突	縦沈線 -斜沈線			10YR2/3 黒褐	10YR1.7/1 黒	HP-3	Ⅲ	86	22-47	
17-18		23	甕	胴部文様帯	横ナデ	横ミガキ 黒色処理		鋸歯文 -側刺突列			10YR4/3 にぶい黄褐	10YR3/4 暗褐	HP-3	Ⅳ	154	22-48	
17-19		22	甕	胴部文様帯	横ナデ	横ミガキ 黒色処理		斜行沈線	矢羽根状刺突		10YR5/3 黄褐	10YR2/2 黒褐	HP-3	Ⅳ	148	22-49	
17-20	40	24	甕	胴部文様帯	縦ハケメ	横ミガキ 黒色処理		鋸歯文２段			10YR2/1 黒	10YR1.7/1 黒	HP-3	Ⅳ	95.101	22-50	
17-21	38	20	甕	胴下部文様帯～胴部	横ナデ	横ミガキ 黒色処理			矢羽根状刺突 横走沈線		10YR5/4 にぶい黄褐	10YR3/1 黒褐	HP-3	Ⅳ	98.107	22-51	
17-22		228	甕	胴部	斜ハケメ	縦ミガキ 黒色処理					7.5YR5/4 にぶい褐	7.5YR2/1 黒	HP-3	Ⅳ	89	22-52	
17-23	96	230	甕	胴部	縦ハケメ 横ハケメ	縦ミガキ 黒色処理					10YR8/2 灰白	10YR1.7/1 黒	HP-3	Ⅱ Ⅳ	112 149	22-53	
17-24	98	236	甕	胴部	横ナデ	縦ミガキ					7.5YR4/6 褐	2.5Y7/2 灰黄	HP-3 01-08	Ⅳ 2	140.144 88	22-54	
17-25		237	甕	胴部	縦ハケメ	縦ミガキ 黒色処理					10YR3/1 黒褐	10YR4/1 褐灰	HP-3	Ⅳ	84	22-55	
17-26		68	坏	口唇部～体部	横ナデ	横ナデ 縦ミガキ	横走沈線３条				10YR7/3 にぶい黄橙	10YR8/3 浅黄橙	HP-3	Ⅳ	91	22-56	
17-27		58	坏	口唇部～体部	横ナデ	横ミガキ 黒色処理	横走沈線１条				10YR1.7/1 黒	10YR1.7/1 黒	HP-3	Ⅳ	82	22-57	
17-28		232	坏	体部	斜ハケメ	横ミガキ 黒色処理					10YR5/4 にぶい黄褐	10YR5/2 灰黄褐	HP-3	Ⅳ	7	22-58	
17-29	97	235	坏	体部	横ナデ?	横ミガキ 黒色処理					10YR7/3 にぶい黄橙	10YR1.7/1 黒	HP-3	Ⅳ	13.16	22-59	磨滅
17-30		229	坏	体部	斜ハケメ	横ミガキ 黒色処理					10YR6/4 にぶい黄橙	10YR6/1 褐灰	HP-3	Ⅳ	9	22-60	
17-31		233	甕	体部	斜ハケメ	縦ミガキ 黒色処理					10YR6/3 にぶい黄橙	10YR4/1 褐灰	HP-3	Ⅳ	12	22-61	
17-32		234	甕	体部	斜ハケメ	横ミガキ 黒色処理					10YR5/4 にぶい黄褐	10YR2/1 黒	HP-3	Ⅳ	10	22-62	

4　第４号竪穴住居跡（第18～20・35図、第11～13表、図版９Ａ～10Ａ・19・21～23・26）

検出状況　包含層３層上面の調査中、02－09区と03－09区にかけて黒色土の落込みがみられた。はじめは旧河道跡と認識していたが、グリッドラインに沿って調査を進めていた所、掘り込みのある遺構である事が確認された。また東側の一部が発掘区外であった事から、発掘区を拡張して遺構全体を調査したが、この部分には撹乱が及んでいた。掘り込み面は基本層序３層の上面であると思われる。遺構は旧河道に向かって斜めに傾斜した場所に構築されているため、西側壁に比べて東側壁は低くなっていると思われるが、東側に大きな撹乱を受けている事や、堆積状況が判別しにくかったことから、その付近のセクションについても不明瞭であり、実際の壁高については明らかに出来なかった。

覆土堆積状況　堆積は壁際にⅪ層とした炭化物の混じった灰黄褐色のシルト質の土が堆積し、その後も西壁側から土壌が入り込み、河川の影響を受け、東側に引きずられる形で順に堆積したと思われる。Ⅶ層、Ⅸ層はともに炭化物の混じる褐灰色の粘土質シルトであったが、壁際に灰黄褐色のシルトが堆積していた事から分層して認識した。ただし土質が非常に近い事から、同じ流れの中で堆積したものと捉え、Ⅶ層以下を床面直上の層とした。

完掘状況　北側隅に大きな撹乱を受けていたため全体の４分の３程度の検出であるが、南西壁中央やや西寄りに煙道付きかまどを持つ、規模が6.4×(6.7)ｍの隅丸の平行四辺形をした竪穴住居跡と思われる。

遺物出土状況　遺物は床面直上の層からの出土が多く、中央やや東よりのＤＢ－14上面、かまど火床付近、かまどに向って左側の南西壁側に遺物のまとまりがみられた。遺物は土器が多く、層位により覆土と床面直上のグループに分けて理解できた。覆土出土の土器は、破片資料のものであり、廃棄行為によるものではないと思われる。床面直上としたⅦ層からは、坏や甕が一括状態で出土した他、破損品ではあるが須恵器の短頸壷が床面で出土し、同じく破損品で紡錘車がＤＢ－14の上面から出

土しており、これらの遺物は発掘調査段階における出土状況から本遺構と伴う遺物と考えている。

柱穴　主柱穴が3基確認された他に、東側壁中央付近に2ヶ所、直径10cm以下の柱穴が検出されている。主柱穴の配列状況から、本来は4基あったと考えられるが、後の撹乱のために失われている。

かまど構造　南東壁中央やや西よりに確認された煙道つきのかまどである。火床には厚さ最大で約3cmの骨層が確認されている。

焼土、焼土粒範囲　床面中央やや北西よりに焼土が1基検出され、それに伴うと思われる焼土粒の範囲がその南側に広がっている。

出土遺物（第19・20図、第13表、図版19・21～23・26）

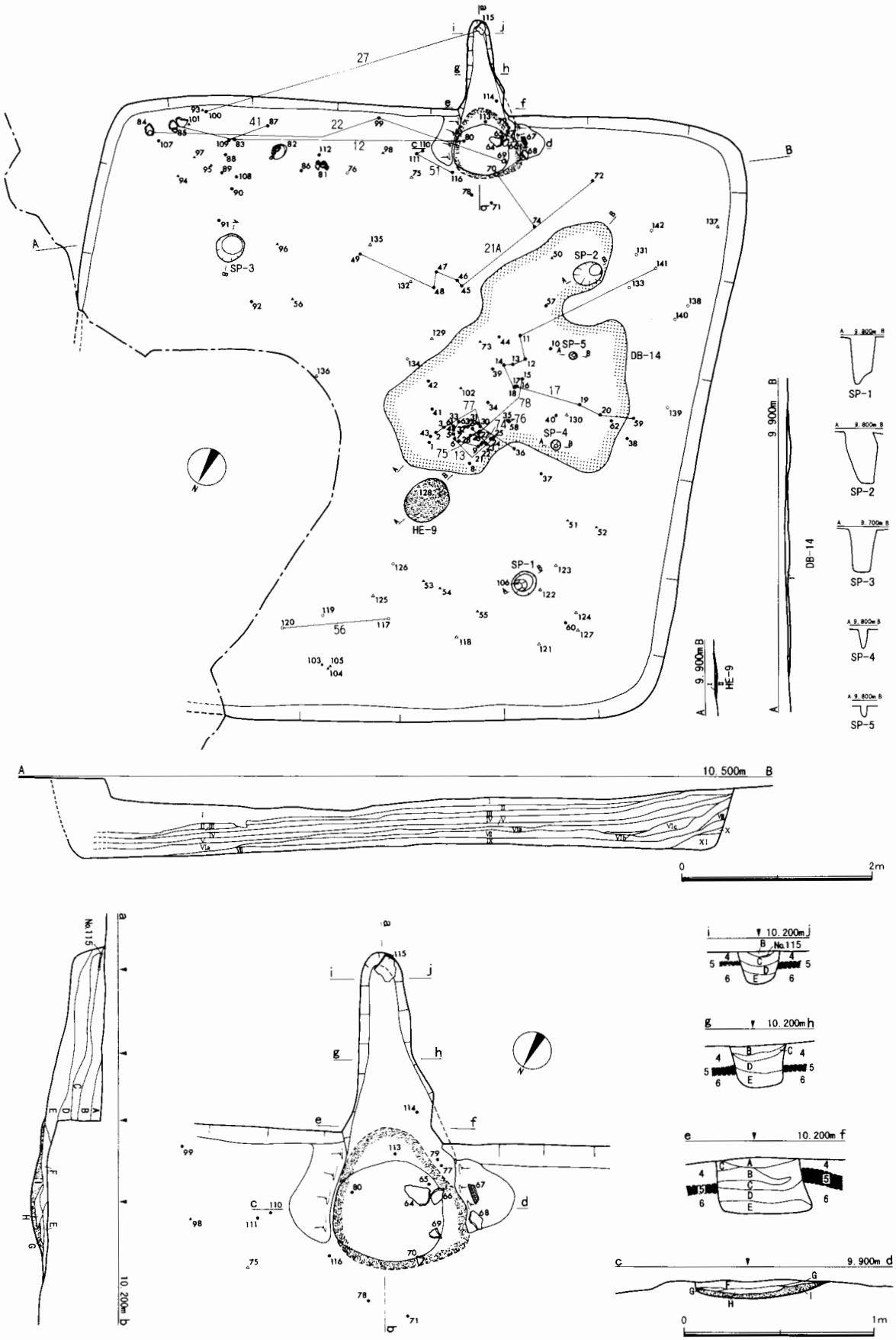
第19図－1は大型の甕である。口縁部は開いており、横走沈線の上から矢羽根状刺突列が施文され、胴部文様帯は多条横走沈線の上から鋸歯文を2段施文し、間に左下がりの斜刺突列が押圧されている。内面の黒色処理は丹念であるが、成形時の輪積み痕が所々に確認でき、粘土紐の幅は1cm～2cmである。2は下半部のみ復元された小型の甕であり、第20図－18は同一個体である。現状で、やや歪んだ器形になっている。胴部文様帯に多条の斜め沈線による鋸歯文が施文されており、胴下部文様帯には2条単位の斜め沈線による鋸歯文が展開する。3、4は甕の胴部～底部片である。第20図－12～13は甕の口縁部片であり、全て口端部付近で内傾する器形である。13は馬蹄形の囲繞帯が押圧される。14・17は甕の胴部文様帯の破片である。15・16・18～21は胴部、底部片である。

第11表　第4号竪穴住居跡覆土土層注記表

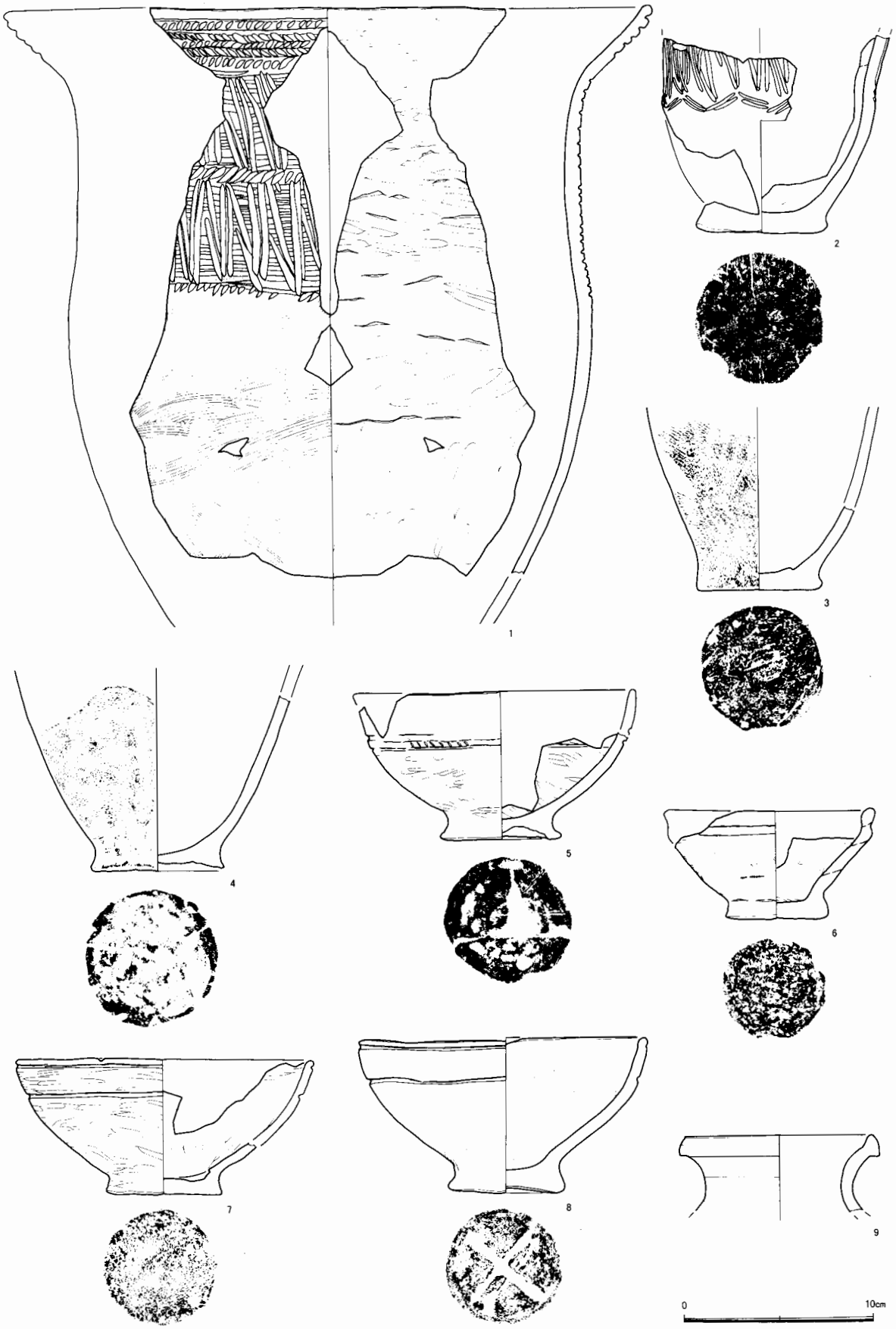
遺構名	層名	色相	土色	土性	粘性	しまり	混入物など
竪穴覆土	Ⅰ	10YR3/1	黒褐色	粘土質シルト	やや弱	強	現代の撹乱層で、砂利・礫が含まれる。
	Ⅱ	10YR4/1	褐灰色	シルト	やや弱	やや強	黒色土粒が混じる。
	Ⅲ	10YR4/6	褐色	粘土質シルト	中	中	炭化物が混じる。
	Ⅳ	7.5YR1.7/1	黒色	粘土質シルト	中	中	黒色の腐植土層。
	Ⅴ	10YR4/1	褐灰色	シルト	やや弱	中	
	Ⅵa	10YR5/3	にぶい黄褐色	粘土質シルト	やや強	中	
	Ⅵb	10YR5/2	灰黄褐色	シルト	中	中	炭化物が混じる。
	Ⅵc	10YR6/2	灰黄褐色	粘土質シルト	やや弱	やや弱	
	Ⅶ	10YR4/1	褐灰色	粘土質シルト	やや強	中	炭化物が混じる。
	Ⅷ	10YR5/2	灰黄褐色	シルト	やや弱	強	
	Ⅸ	10YR4/1	褐灰色	粘土質シルト	やや強	中	炭化物が混じる。
	Ⅹ	10YR4/4	褐色	シルト	やや弱	やや弱	砂質分が多い。
	Ⅺ	10YR4/2	灰黄褐色	シルト	やや弱	やや強	炭化物が混じる。
カマド覆土	A	10YR6/2	灰黄褐色	シルト	やや弱	中	
	B	10YR5/1	褐灰色	シルト	やや弱	中	
	C	10YR6/4	にぶい黄橙色	シルト	やや弱	中	砂質分が多い。
	D	10YR5/1	褐灰色	シルト	やや弱	中	
	E	10YR5/3	にぶい黄褐色	シルト	やや弱	中	炭化物が混じる。
	F	10YR5/2	灰黄褐色	シルト	中	中	炭化物が混じる。
	G	7.5YR1.7/1	黒色	シルト	やや弱	やや弱	炭層。
	H	10YR8/3	浅黄橙色	粘土質シルト	やや強	やや弱	骨層。
	I	7.5YR4/2	灰褐色	粘土質シルト	弱	やや強	焼土層。
HE-9	Ⅰ	5YR6/1	褐灰色	シルト	中	中	炭が混じる被熱層。
	Ⅱ	10YR5/3	にぶい黄褐色	シルト	やや弱	中	砂質分が多い。
DB-14	Ⅰ	10YR4/1	褐灰色	粘土質シルト	やや強	中	炭化物・骨・焼土粒が混じる灰層。

第12表　第4号竪穴住居跡柱穴一覧表

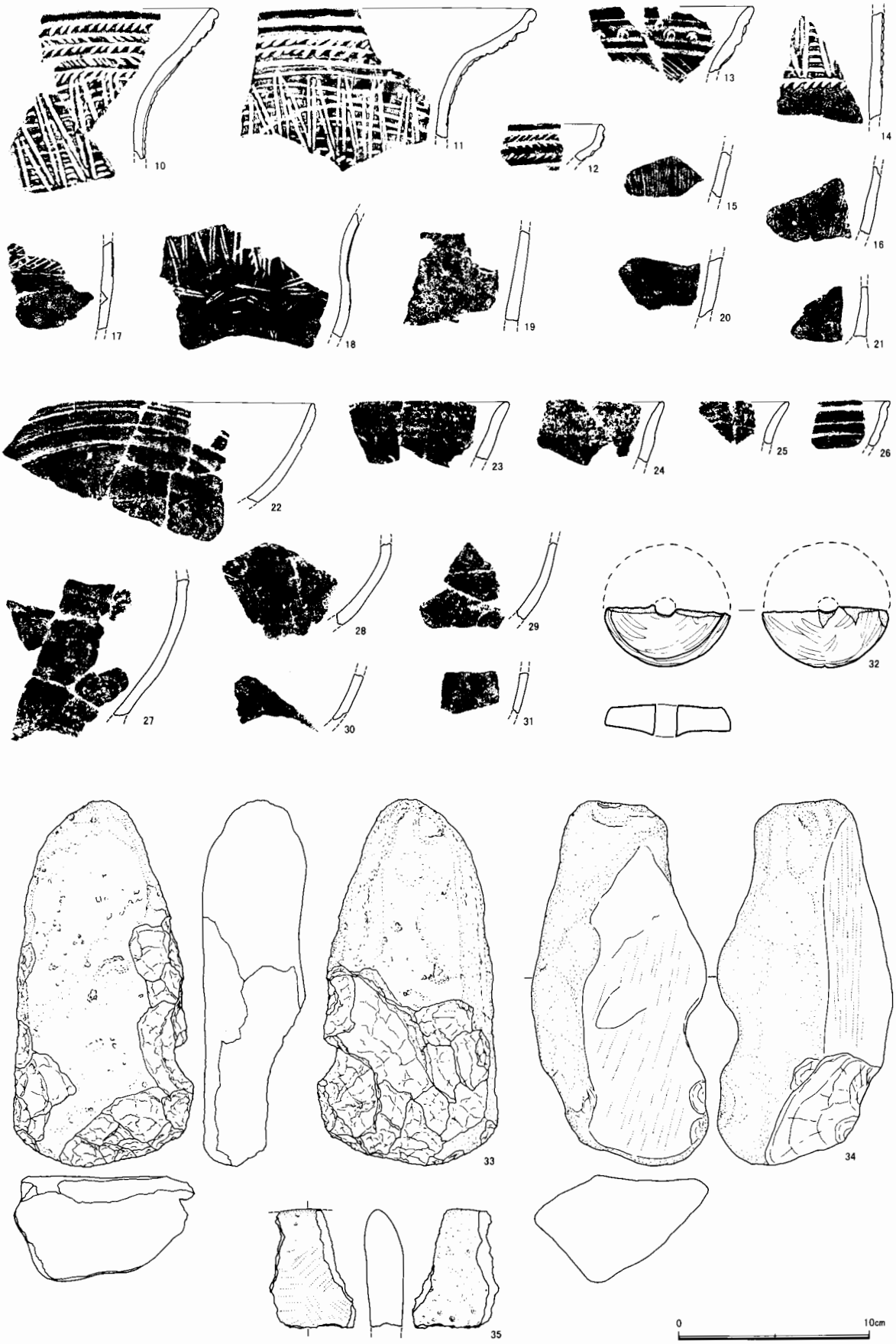
柱穴番号	平面形	標高（m）	長軸（m）	短軸（m）	深さ（m）	備考
SP 1	不整楕円形	9.780	0.27	0.23	0.49	
SP 2	不整楕円形	9.760	0.30	0.23	0.56	
SP 3	不整円形	9.680	0.30	0.28	0.46	
SP 4	不整円形	9.760	0.11	0.09	0.20	
SP 5	不整円形	9.740	0.09	0.07	0.11	



第18図　第４号竪穴住居跡（１：60）およびかまど（１：30）



第19図　第４号竪穴住居跡出土遺物(1)（１：３）



第20図　第４号竪穴住居跡出土遺物(2)（１：３）

第13表　第４号竪穴住居跡出土土器属性表

挿図番号	個体番号	拓本番号	種類	部位	器面調整 外面	器面調整 内面	文様 口縁部	文様 胴部文様帯	文様 胴下部	底部形状	色調 外面	色調 内面	区名	層位	遺物番号	図版番号	備考
19-1	27		甕	口唇部～胴部文様帯	横ナデ 縦ハケメ 横ハケメ 縦ハケメ	横ナデ 横ミガキ 縦ミガキ 黒色処理	横走沈線５条 -斜刺突５列	横走沈線 -鋸歯文２段 間斜刺突	斜刺突		10YR5/3 にぶい黄褐	10YR1.7/1 黒	HP-4	Ⅶ	64,65,66, 67,68,70, 74,77,79, 100	19-2 19-1	
														カマド	115		
													03-09	攪乱	(6)		
19-2	21A		小甕	胴部～底部	縦ハケメ	横ミガキ 縦ミガキ 黒色処理		鋸歯文	鋸歯文	笹痕	10YR4/2 灰黄褐	10YR3/1 黒褐	HP-4	Ⅶ	45,46,47, 48,49,72	19-2	
19-3	22		小甕	胴部～底部	斜ハケメ	縦ミガキ 黒色処理				笹痕	10YR5/1 褐灰	10YR1.7/1 黒	HP-4	Ⅶ	69,84,99	19-3	
19-4	12		甕	胴部～底部	縦ハケメ 縦ミガキ	縦ミガキ 黒色処理					10YR7/4 にぶい黄橙	10YR2/2 黒褐	HP-4	Ⅶ	83,85(2)	19-4	
														カマド	80		
19-5	17		高台坏	口唇部～底部	横ナデ 横ミガキ	横ハケメ -横ミガキ 横ハケメ -縦ミガキ 黒色処理		横走沈線１条 -斜刺突		揚げ底	10YR8/3 浅黄橙	10YR1.7/1 黒	HP-4	Ⅴ,Ⅵ	141	19-8	
														Ⅶ	11,12,13, 14,16,17, 18,19,20, 59		
19-6	11		高台坏	口唇部～底部	横ナデ 縦ハケメ -横ミガキ	横ナデ 横ミガキ 縦ミガキ 黒色処理	横走沈線１条			擦痕	10YR7/4 にぶい黄橙	10YR6/1 褐灰	HP-4	Ⅶ	85	19-7	
19-7	5		高台坏	口唇部～底部	横ナデ 横ハケメ -横ミガキ	横ナデ -横ミガキ 縦ミガキ 黒色処理	横走沈線２条			砂底？	10YR7/4 にぶい黄橙	10YR1.7/1 黒	HP-4	Ⅶ	81(1)	19-5	
19-8	1		高台坏	口唇部～底部	横ナデ 縦ハケメ -横ミガキ	横ナデ 縦ミガキ 黒色処理	横走沈線２条			十字の刻み (焼成後)	10YR7/3 にぶい黄橙	2.5Y3/1 黒褐	HP-4	Ⅶ	82	19-6	
19-9	101		短頸壺	口唇部 ～口縁部	ロクロナデ	ロクロナデ					5PB4/1 暗青灰	5R3/1 暗赤灰	HP-4	Ⅶ	108	22-63	断面の色調 5RP4/1 暗紫灰 自然釉
20-10	33	4	甕	口唇部～ 胴部文様帯	横ナデ 縦ハケメ	横ナデ 横ミガキ 黒色処理	横走沈線５条 -矢羽根状刺突	横走沈線 -鋸歯文			10YR5/3 にぶい黄褐	10YR1.7/1 黒	HP-4	Ⅶ	114	22-64	
													03-09	攪乱	(19)		
20-11	51	49	甕	口唇部～ 胴部文様帯	横ナデ 縦ハケメ	横ナデ 横ミガキ 黒色処理	横走沈線４条 -斜刺突２列	横走沈線 -鋸歯文			10YR3/2 黒褐	10YR1.7/1 黒	HP-4	Ⅶ	110,111, 116	22-65	
20-12		57	甕	口唇部～ 口縁部	横ナデ	横ナデ -横ミガキ 黒色処理	横走沈線４条 -斜刺突３列				10YR6/3 にぶい黄橙	10YR2/1 黒	HP-4	Ⅶ	57	22-66	
20-13	56	76	甕	口唇部～ 口縁部	横ナデ	横ナデ 横ミガキ 黒色処理	横走沈線４条 凹線帯	斜行沈線			10YR7/1 灰白	10YR2/2 黒褐	HP-4	Ⅳ	117,120	22-67	
20-14		5	甕	胴部文様帯 ～胴部	縦ハケメ 横ハケメ	横ミガキ 黒色処理		横走沈線 -鋸歯文	斜刺突		10YR5/3 にぶい黄褐	10YR5/1 褐灰	HP-4	Ⅶ	113	22-68	
20-15		241	甕	胴部	縦ハケメ	縦ミガキ 黒色処理					10YR7/2 にぶい黄橙	10YR1.7/1 黒	HP-4	Ⅶ	107	22-69	
20-16		242	甕	胴部	縦ハケメ	横ハケメ -縦ミガキ 黒色処理					10YR6/2 灰黄褐	10YR4/1 褐灰	HP-4	Ⅶ	89	22-70	
20-17		103	甕	胴部文様帯 ～胴部	横ナデ	横ナデ 黒色処理			横走沈線 -斜刺突		10YR5/2 灰黄褐	10YR3/1 黒褐	HP-4	Ⅳ	126	22-71	
20-18		6	甕	胴部文様帯 ～胴部	縦ハケメ	縦ミガキ 黒色処理		鋸歯文	鋸歯文		10YR4/2 灰黄褐	10YR3/1 黒褐	HP-4	Ⅳ	133	22-72	
20-19		129	甕	胴部	横ナデ	縦ミガキ					7.5YR6/6 橙	7.5YR1.7/1 黒	HP-4	Ⅴ,Ⅵ	142	22-73	
20-20		247	甕	胴部	縦ハケメ	横ハケメ 縦ミガキ					10YR5/3 にぶい黄褐	10YR7/1 灰白	HP-4	Ⅶ	31	22-74	
20-21		246	甕	胴部	横ナデ	縦ミガキ 黒色処理					10YR6/2 灰黄褐	10YR3/1 黒褐	HP-4	Ⅶ	85(3)	22-75	
20-22	41	25	坏	口唇部～体部	横ナデ	横ナデ 縦ミガキ 黒色処理	横走沈線３条				10YR4/1 褐灰	10YR3/1 黒褐	HP-4	Ⅶ	87,109	22-76	
20-23	78	180	坏	口唇部～体部	横ナデ	横ミガキ 黒色処理					10YR1.7/1 黒	10YR1.7/1 黒	HP-4	Ⅶ	15,27,28	23-1	
20-24	75	174	坏	口唇部～体部	横ナデ	横ミガキ 黒色処理					10YR1.7/1 黒	10YR1.7/1 黒	HP-4	Ⅶ	7,9	23-2	
20-25		177	坏	口唇部～体部	横ナデ	横ミガキ 黒色処理					10YR7/2 にぶい黄橙	10YR1.7/1 黒	HP-4	Ⅶ	37	23-3	
20-26		60	坏	口唇部～体部	横ナデ	横ナデ	横走沈線３条				10YR7/4 にぶい黄橙	10YR6/2 灰黄褐	HP-4	Ⅶ	60	23-4	
20-27	74	172	坏	体部	縦ハケメ -横ナデ	縦ミガキ 黒色処理					10YR7/3 にぶい黄橙	10YR1.7/1 黒	HP-4	Ⅶ	2,3,30, 32,34,36	23-5	
20-28		176	坏	体部	縦ハケメ -横ナデ	横ミガキ 縦ミガキ 黒色処理					10YR7/2 にぶい黄橙	10YR1.7/1 黒	HP-4	Ⅶ	1	23-6	
20-29	76	175	坏	体部	横ナデ	縦ミガキ 黒色処理					10YR4/1 褐灰	10YR1.7/1 黒	HP-4	Ⅶ	35,58	23-7	
20-30		178	坏	体部	縦ハケメ -横ナデ	縦ミガキ 黒色処理					10YR7/2 にぶい黄橙	10YR1.7/1 黒	HP-4	Ⅶ	43	23-8	
20-31		243	坏	体部	横ミガキ	縦ミガキ 黒色処理					10YR6/3 にぶい黄橙	10YR2/1 黒	HP-4	Ⅶ	92	23-9	
20-32	13		紡錘車		ミガキ						10YR1.7/1 黒		HP-4	Ⅶ	4,6,25,33	21-7	半分欠損

第19図－５～８は復元された高台坏である。全て口縁部に沈線が巡っており、５は２条の沈線の間に右傾斜の刺突列が施文されている。６は口縁部に太く浅めの沈線がみられる。５、８はやや揚げ底気味であり、８には「×」の刻印が見られ、これは焼成後刻み込まれたものである。他は平底である。第20図－22～26は坏の口縁部片であり、23、24、25はやや外反気味である。22、26には数条の沈線が巡る。27～31は坏の体部片である。

32は半分欠損しているが紡錘車である。大きさは約6.7cmで孔の直径は約1.2cm程度と予想される。孔はほぼ真っ直ぐである。外面は丹念に黒色処理が施されており、両面、側縁ともミガキである。

第19図－９は須恵器の短頸壷の口縁部～頸部の破片である。頸部がきつく湾曲し、口端部で屈曲する器形である。外面の轆轤痕はナデ消されている。外面の色調は暗青灰色（Hue 5 PB 4/1）で、内面は暗赤灰色（Hue 5 R 3/1）であったが、断面の色調は暗紫灰色（Hue 5 RPR 4/1）である。一部自然釉がかかる。

33は床面直上としたⅦ層出土の敲石である。両側下半部と下端とに敲打痕がみられる。34は覆土Ⅳ層出土の砥石である。図の点線部を砥面として使用したものである。裏面の右側に敲打痕がみられる。35は大半欠損しているが砥石である。図の点線部を砥面として使用している。

5　第５号竪穴住居跡（第21・22・35図、第14～16表、図版10Ｂ～11Ｂ・19・23・27）

検出状況　包含層調査中、06－08区の発掘区南東隅に黒色土の落込みがみられた。竪穴住居跡である可能性があったため、発掘区を拡張して上面を精査したところ、直径４ｍ前後の楕円形をした黒色土の落込みが確認された。黒色土には火山灰の薄い間層が挟まっていた。竪穴住居跡の南東隅にあたる敷地境界の石杭にかかるところはそのままの形で残した。掘り込み面は基本層序の２層中であると思われるが、耕作が及んでおり、確認は出来ていない。

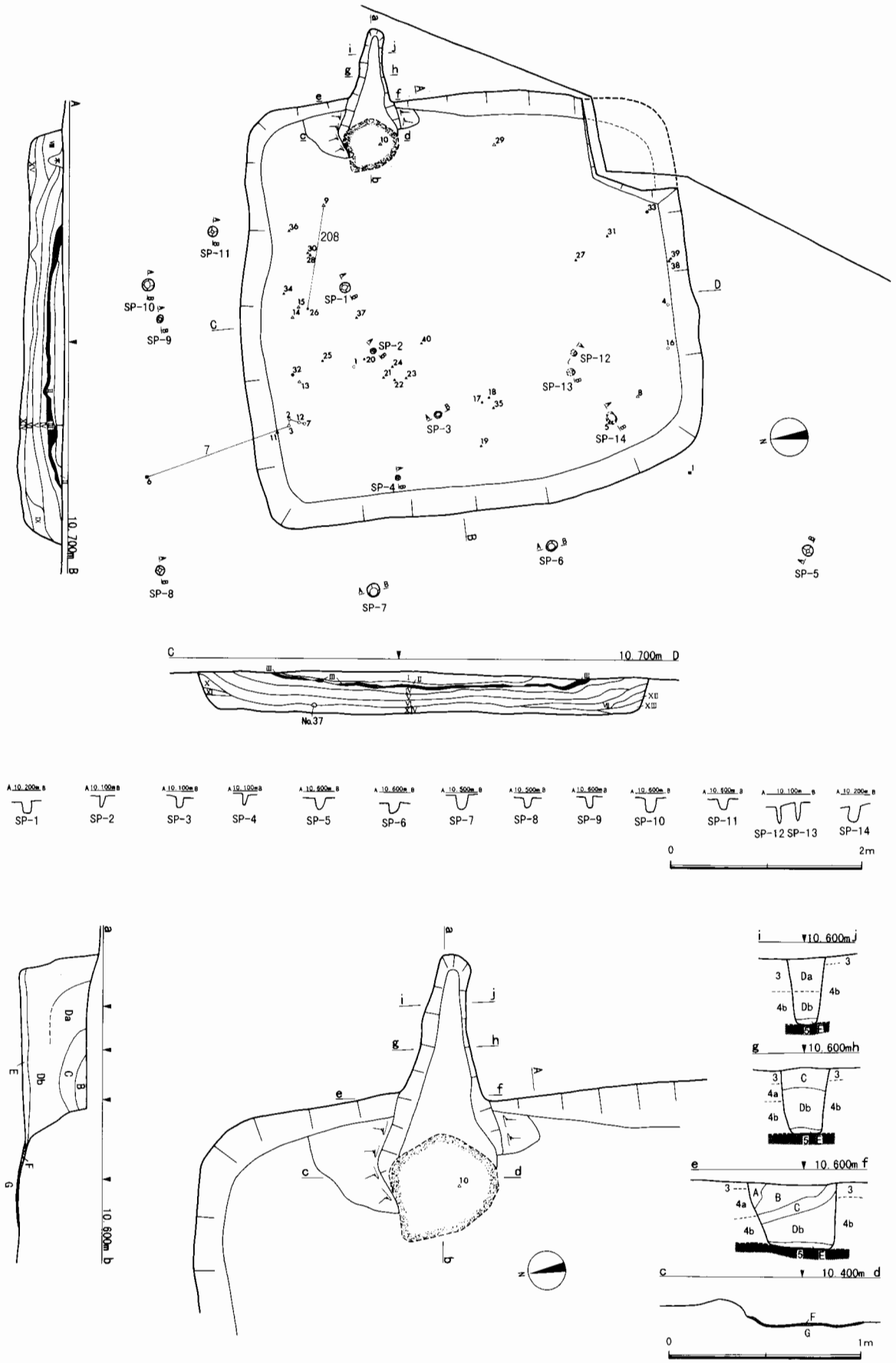
覆土堆積状況　はじめにXV層としたシルト質土がかまど付近に入り込み、その後XIV層が竪穴内に堆積している。その時点で壁際の堆積が進み、Ⅵ層以下は順に全面に堆積している。またこの段階では、覆土の層分類が不明瞭であったため、Ⅰ～Ⅳ層の黒色系シルトからの出土遺物をⅠ、Ⅴ～Ⅶ層の黒褐色系シルトからの出土遺物をⅡ、Ⅷ～XV層のにぶい黄褐色系シルトからの出土遺物をⅢとし、Ⅲについてを床面直上のグループと認識して調査を進めた。

完掘状況　東側壁の中央やや北寄りに煙道付きかまどを持つ、規模が4.4×4.7ｍのやや横長の隅丸方形をした竪穴住居跡である。

遺物出土状況　遺物は上記の分類でⅠとⅢのグループに分類した層位からの出土であり、その多くは中央やや北西側から散在して出土しており、その主体は礫であった。土器は復元土器１個体と破片であったが、復元土器は覆土からの出土であり、床面直上のグループについても一括性を欠いており、流れ込みなどの不確定要素を持つ状態であった。これらの出土状況から、本遺構と確実に伴うと思われる遺物は、発掘調査の段階では特定出来なかった。接合関係については、復元土器が北西側の発掘区の遺物と接合した程度である。

柱穴　竪穴内に７基の柱穴が確認された他に、竪穴外にもほぼ円形のプランをした柱穴が遺構を取り囲むように検出された。ただしこれも同時期のものであるかは不明である。また竪穴内においては床面を精査したにも拘わらず、他の竪穴住居跡でみられたような主柱穴と思われる柱穴は確認出来なかった。

かまど構造　東側壁中央やや北寄りに確認された煙道つきのかまどである。火床の焼土層の厚みは非常に薄かったが、それが掻き出しによるものか、使用頻度によるものかは不明である。また煙道部のDa、Db層は火床付近では判別が困難であった。



第21図　第５号竪穴住居跡（１：60）およびかまど（１：30）

第14表　第５号竪穴住居跡覆土土層注記表

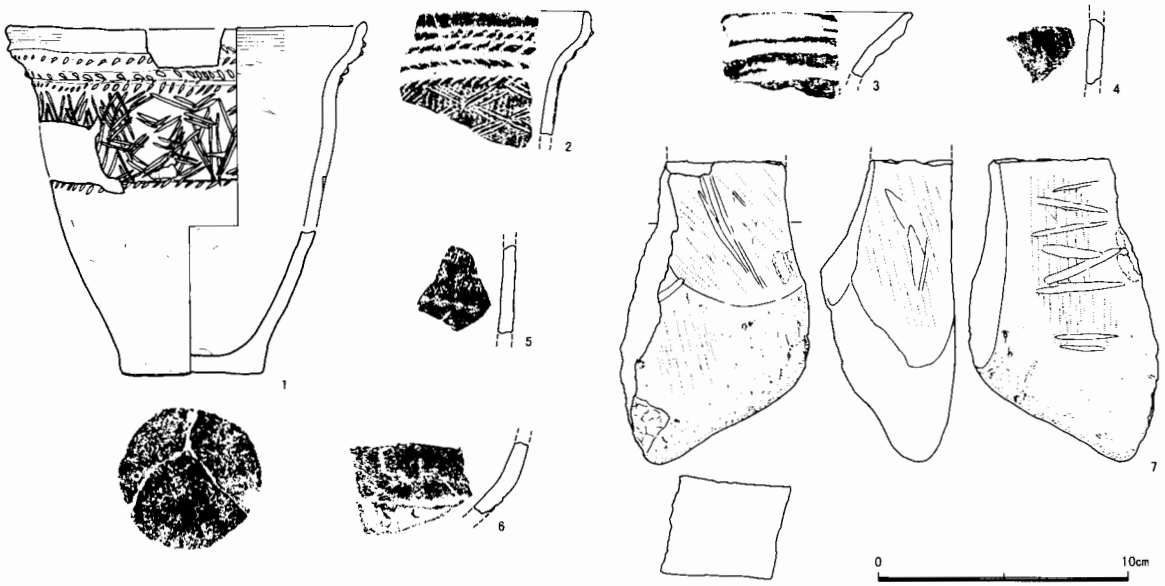
遺構名	層名	色相	土色	土性	粘性	しまり	混入物など
竪穴覆土	Ⅰ	7.5YR2/1	黒色	シルト	やや弱	中	炭化物と褐色土粒が混じる。
	Ⅱ	7.5YR1.7/1	黒色	砂質シルト	やや弱	やや弱	しまりのない腐植土層。
	Ⅲ	7.5YR5/4	にぶい褐色	砂質シルト	弱	中	Ta-a。
	Ⅳ	7.5YR1.7/1	黒色	シルト	やや強	中	腐植土層。
	Ⅴ	10YR3/1	黒褐色	シルト	中	やや強	炭化物が混じる。
	Ⅵ	10YR3/2	黒褐色	粘土質シルト	やや強	中	明褐色土粒が混じり、炭化物が多く混じる。
	Ⅶ	10YR2/1	黒色	粘土質シルト	やや強	中	Ⅵ層より多くの炭化物が混じる。
	Ⅷ	10YR6/4	にぶい黄橙色	シルト	弱	やや強	
	Ⅸ	10YR5/4	にぶい黄褐色	シルト	やや弱	やや弱	砂質分が多い。
	Ⅹ	10YR4/3	にぶい黄褐色	シルト	中	中	リモナイトが多い。
	Ⅺ	10YR5/1	褐灰色	シルト	中	中	リモナイトが多い。
	Ⅻ	10YR5/6	黄褐色	シルト	やや強	中	黒色土粒が混じる。
	XIII	10YR4/1	褐灰色	シルト	やや強	やや強	炭化物・明褐色土粒が混じる。
	XIV	10YR4/3	にぶい黄褐色	シルト	中	中	黒色土粒が混じる。
	XV	10YR6/3	にぶい黄橙色	シルト	中	中	
カマド覆土	A	7.5YR5/3	にぶい褐色	シルト	中	弱	古い時期の撹乱？
	B	10YR7/4	にぶい黄橙色	砂質シルト	弱	弱	
	C	10YR5/3	にぶい黄褐色	シルト	中	弱	リモナイトが多い。
	Da	10YR5/3	にぶい黄褐色	シルト	中	弱	リモナイトが多い。
	Db	10YR7/3	にぶい黄橙色	シルト	中	中	
	E	10YR5/1	褐灰色	シルト	やや強	中	煙道覆土。大粒の炭化物が多い。
	F	5YR6/4	にぶい橙色	焼土層	強	中	若干の灰と、炭化物等を含む。
	G	2.5YR5/6	明赤褐色	焼土層	中	強	
	3	10YR7/4	にぶい黄橙色	砂質シルト	弱	中	ややリモナイトが多い。基本層３層と同じ。
	4a	10YR5/3	にぶい黄褐色	砂質シルト	弱	弱	リモナイトを多く含む。基本層４a層と同じ。
	4b	10YR7/6	明黄褐色	シルト	中	強	
	5	10YR5/2	灰黄褐色	シルト	強	強	炭化物多く含む。基本層５層と同じ。

出土遺物（第22図、第16表、図版19・23・27）

第22図－１は小型の甕であり、２は同一個体片である。口縁部は口端部でやや内傾しており、沈線と刺突列が施文される。胴部文様帯の文様は、はじめに正面に２条の縦沈線を引き、それを菱形に囲むように沈線を施文している。その対局には縦の綾杉文を４列施文し、そこから左右それぞれに90°回転した位置に同様の綾杉文を施文しており、結局１ヵ所は菱形文様、３ヶ所は綾杉文が施文されたことになる。その文様の間に一部重なりながら、右傾斜の２条１組の斜沈線を一定間隔で施文し、その後左傾斜の２条１組の斜沈線をその間に施文しており、結果網目状の文様となっている。３は甕の口縁部片である。口縁部の沈線は幅広く、段状を呈している。４、５は甕の胴部片である。６は坏の体部片である。７は半分欠損しているが覆土出土の砥石であり、全部で３面使用されている。なお、砥面の中に記した線で囲まれた部分は、鋭い工具で切り込んだような跡が観察された。

第15表　第５号竪穴住居跡柱穴一覧表

柱穴番号	平面形	標高（m）	長軸（m）	短軸（m）	深さ（m）	備　考
SP 1	不整円形	10.080	0.12	0.10	0.13	
SP 2	不整円形	10.050	0.06	0.05	0.12	
SP 3	不整円形	10.040	0.08	0.06	0.11	
SP 4	不整円形	10.080	0.05	0.04	0.12	
SP 5	不整円形	10.540	0.12	0.10	0.13	
SP 6	不整楕円形	10.500	0.13	0.09	0.13	
SP 7	不整楕円形	10.480	0.14	0.10	0.16	
SP 8	不整円形	10.450	0.10	0.08	0.11	
SP 9	不整円形	10.550	0.08	0.06	0.12	
SP10	不整円形	10.550	0.13	0.11	0.16	
SP11	不整円形	10.540	0.11	0.10	0.12	
SP12	不整円形	9.980	(0.06)	(0.05)	(0.18)	
SP13	不整円形	10.030	(0.08)	(0.06)	(0.19)	
SP14	不整楕円形	10.090	(0.12)	(0.09)	(0.17)	



第22図　第５号竪穴住居跡出土遺物（１：３）

第16表　第５号竪穴住居跡出土土器属性表

挿図番号	個体番号	拓本番号	種類	部位	器面調整 外面	器面調整 内面	文様 口縁部	文様 胴部文様帯	文様 胴下部	底部形状	色調 外面	色調 内面	区名	層位	遺物番号	図版番号	備考
22-1	7		小甕	口脣部～底部	横ナデ 縦ハケメ -横ミガキ	横ナデ 横ミガキ 縦ミガキ 黒色処画	横走沈線３条 --矢羽根状 刺突２段	一部綾杉文で 残りは格子文	斜刺突	厚底	7.5YR5/6 明褐	10YR1.7/1 黒	HP-5	Ⅰ	2，3，6	19-9	
22-2		7	甕	口脣部 ～胴下部文様帯	横ナデ	横ナデ 横ミガキ 黒色処理	横走沈線２条 一斜刺突	格子状沈線			7.5YR5/6 明褐	7.5YR1.7/1 黒	未注記		2	23-10	
22-3		256	甕	口脣部 ～口縁部	横ナデ	横ミガキ 黒色処理	横走沈線３条				7.5YR3/1 黒褐	7.5YR3/1 黒褐	HP-5	Ⅲ	33-1	23-11	
22-4		249	甕	胴部	縦ハケメ	縦ミガキ					10YR2/1 黒	10YR7/3 にぶい黄橙	HP-5	Ⅲ	32-2	23-12	
22-5		250	甕	胴部	縦ハケメ 横ナデ	縦ミガキ 黒色処理					10YR5/2 灰黄褐	10YR1.7/1 黒	HP-5	Ⅰ	4	23-13	
22-6		248	甕	胴部	横ナデ	横ミガキ 黒色処理					10YR2/1 黒	10YR1.7/1 黒	HP-5	Ⅰ	1	23-14	

第２節　溝状遺構（第23～27・35図、第17・18表、図版12Ａ～15Ｂ・20・23・24・27）

検出状況　耕作土を重機で排土した段階で、04－08区を中心に約８×８ｍの不整形をした黒色土の落込みがあり、さらにここから東側、西側に約３ｍ前後の幅で落込みは続き、西側のものは大きく南東側へカーブし、開発対象地区の外へ伸びていた。東側も同様に幅約２ｍ前後の黒色土の落込みが発掘調査対象地区の外に伸びており、この部分については開発対象地区であったことから調査区を拡張したところ、約５ｍほどで黒色土の落込みは収束しており、ここを遺構の縁と認定した。結局、調査範囲内において、円周の途中に隅丸長方形の張り出し部が付いたような形状で黒色土の落込みが検出され、これが第２号、第５号竪穴住居跡を取り囲むような格好にあることが判明した。なお掘り込み面は基本層序の３層上面と思われるが、２層中である可能性もある。

覆土堆積状況　覆土は、２層起源とみられる２-１～２-４層とした褐色系シルトがはじめに堆積しているが、それらの間には腐植の堆積物が部分的に確認されており、その後に基本層２層、１ａ～１ｃ層の黒色系シルトが安定して順に堆積している。この黒色土は遺跡全体に堆積していたと思われるが、畑地のための地均しにより削平を受け、遺構の落込んだ部分にのみ残ったもので、各遺構の覆土で確認されるものと対応関係にある。黒色土には、竪穴住居跡同様に火山灰や液状化痕により噴出した褐色砂の二次堆積が間層としてみられている。トレンチにおける土層観察の結果、基本層５層とした炭化物の混じる灰黄褐色シルトの堆積層を切っているが、これは全ての住居跡と同じ状況であることが発掘調査段階で確認されている。また、底面の堆積状況は水の作用によるものとは理解できなかったため、旧河道とすることは困難であると共に、構内の堆積状況が今回検出された竪穴住居跡とほとんど変わらなかったことから、同時期に併存した可能性が認められた。上記の事実から、本遺構を溝状遺構として呼称するに至った。

完掘状況　検出範囲は幅３ｍ前後の断面逆台形型の全長約50ｍの周溝状の構造であったが、開発対象区域外にも本遺構は続くものと思われ、全体の形状は明らかには出来ていない。検出された範囲についてみると、西側に検出された収束部分は、断面においても緩やかに傾斜しており、壁部が明確な形で掘り込まれたものではなかった。溝部分は、西側の収束部分から東へ直線的に16ｍ程度いったところで緩やかに西南西へ方向を変え、そこから４ｍ程度いったところに分岐点があり、一方は南側のテラス部分に繋がる。テラス部分としたのは、溝部分の掘り込みが検出面から平均１ｍなのに対し、その半分の0.5ｍ程度しかなく、溝よりも標高が高くなっていたことから便宜的に呼称しており、むしろ掘削深度は竪穴住居跡に近い（第23・24図Ｃ－Ｄセクション）。不整形であり、壁部も一様な形で掘り上げられてはいないが、溝部分と別の遺構として捉えることは、覆土の堆積状況からは不可能に近い。そのことから同一の遺構として捉え調査を進めた。なお図示したように、テラス部分は西側で緩やかに傾斜をはじめ、前述の地点で合流する。溝部分は合流地点から西南西に４ｍ程度のところにある03－07杭の辺りで、西南西から南南西に向きを変え、約10ｍ程いったところでさらに南東へと向きを変えている。あとはそのまま直線的に開発対象地区外へと伸びていた。

遺物出土状況　遺物点の記載は紙面の関係で第35図に行っている。遺物の多くは、覆土の２層中から出土している。平面調査においては２-１～２-４とした層群と基本層２層の判別が難しく、調査の段階ではこれらを全て２層遺物として取り上げた。遺物はテラス部分や溝の底面から検出される例が目立ち、１ａ～１ｃ層とした黒色土層からの出土は僅少である。特にテラス部分の南西側に遺物の集中がみられており、完形土器（図25－５）も１点出土している。この地点からは土器が多く出土しているが、逆に溝の底面からは礫が多く出土する傾向にある。ただし南西側の溝には土器が主体的であり、一括土器も見られた。なお一括出土の土器は、状況から廃棄行為によるものと判断した。接合状

況を見ると、テラス部分で完結しているものが多いが、HP－3の床面出土の坏やHP－2の覆土土器、04－06区出土土器との接合関係もみられ、縦横に大きく発掘区域内に展開している。

焼土、焼土粒範囲　2層を除去した段階で、テラス部分の東側から焼土粒範囲が2基検出された。遺物集中区とは対照的な位置関係である。DB－9では骨片が肉眼レベルで観察されている。

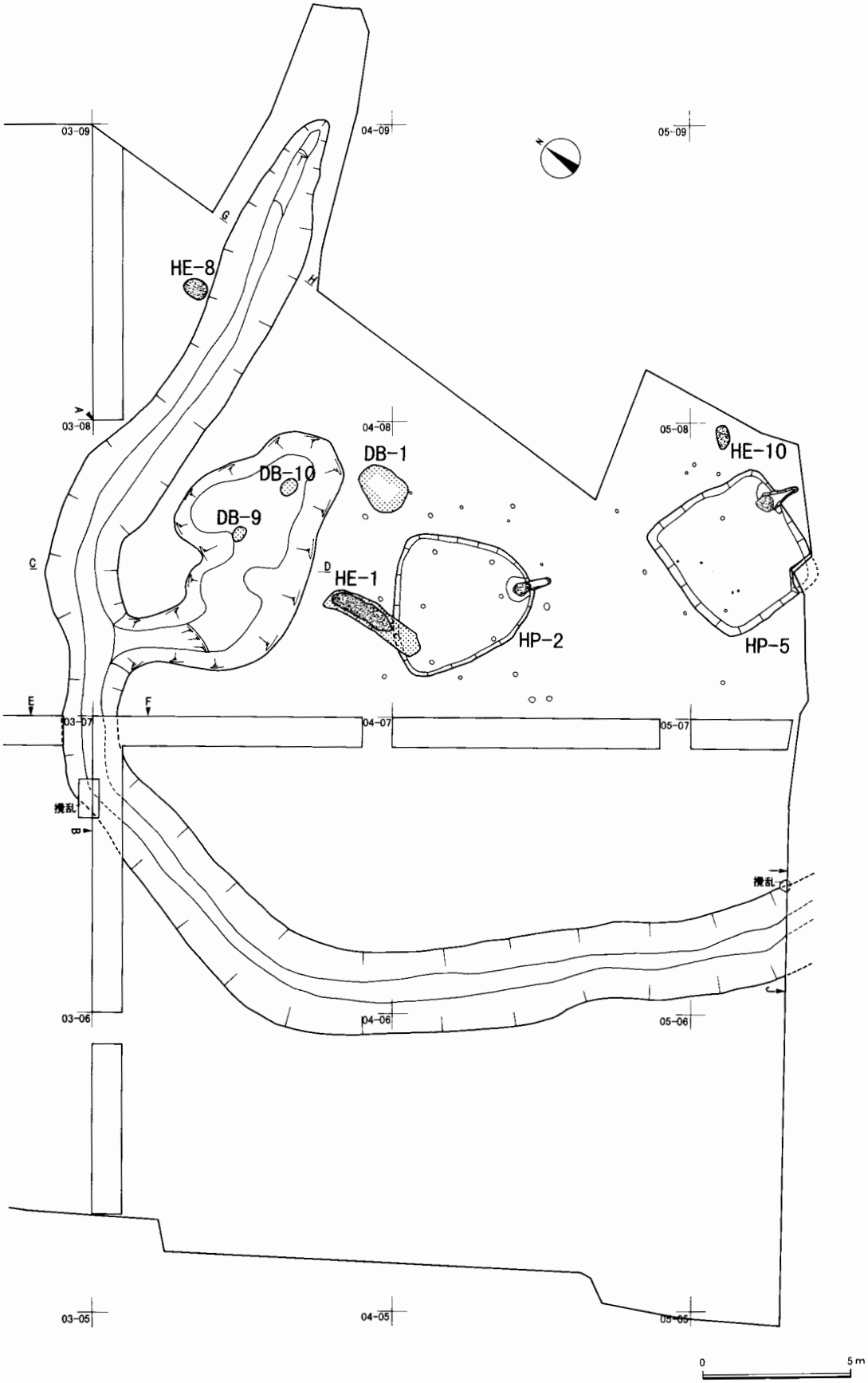
出土遺物（第25～27図、第18表、図版20・23・24・27）

第25図－1、2は大型の甕である。無文であり、外面はハケメ、内面をミガキで調整され、内面には丹念な黒色処理が施される。1の底部には笹痕がみられる。3は06－07区において一括出土した（図版15B）小型の甕であり、口縁部付近でやや内傾気味の器形である。器圧は薄く約5㎜程度であり、内面の黒色処理は丹念である。口縁部は多条の横走沈線の上から、矢羽根状刺突列を施文しており、その下に2条1組の斜沈線を鋸歯状に展開している。縦沈線と横沈線で文様帯を区画して、その中に多条の斜め沈線を交互に傾斜を変えながら上から下に向って施文している。胴下部文様帯には粘土紐を貼り付けており、粘土紐の上に鋸歯文を施文し、その狭間に指頭を押し付け凹ませている。4は小型の甕である。口端部はほぼ垂直に屈曲している。文様は一部磨滅し不明瞭な部分もみられるが、多条の横走沈線と斜刺突で構成される。底部は4ヶ所に刻みがあり、これは焼成前に成形されている。5は04－08区のテラス部分から完形で出土した小型の甕である。口縁部に1条の沈線が巡らされており、焼成前についたとみられる指頭の跡が確認された。図で丸く囲んだ部分がそうである。底部には笹痕がみられる。第26図－7～11は無文の甕の口縁部片である。7には段がみられる。12～21は文様を有する甕の口縁部片である。口縁部付近で内傾する器形であり、多条の横走沈線に矢羽根状刺突列が施文される。なお20は16、19の同一個体片である。22～30、32は胴部文様帯の破片である。22～28は多条の横走沈線の上から、2段の鋸歯文を施文している。29、30は同一個体片であり、横走と縦走の綾杉文が施文される。32は繊弱な2条の縦沈線が施文される。31～38は胴下部文様帯の破片であり、31は粘土紐を貼付け、工具により刻みを入れたものである。32～35は斜刺突列が施文されており、36～38は鋸歯文である。39～44は胴部片である。45～47は底部片であり、45、47には笹痕がみられる。

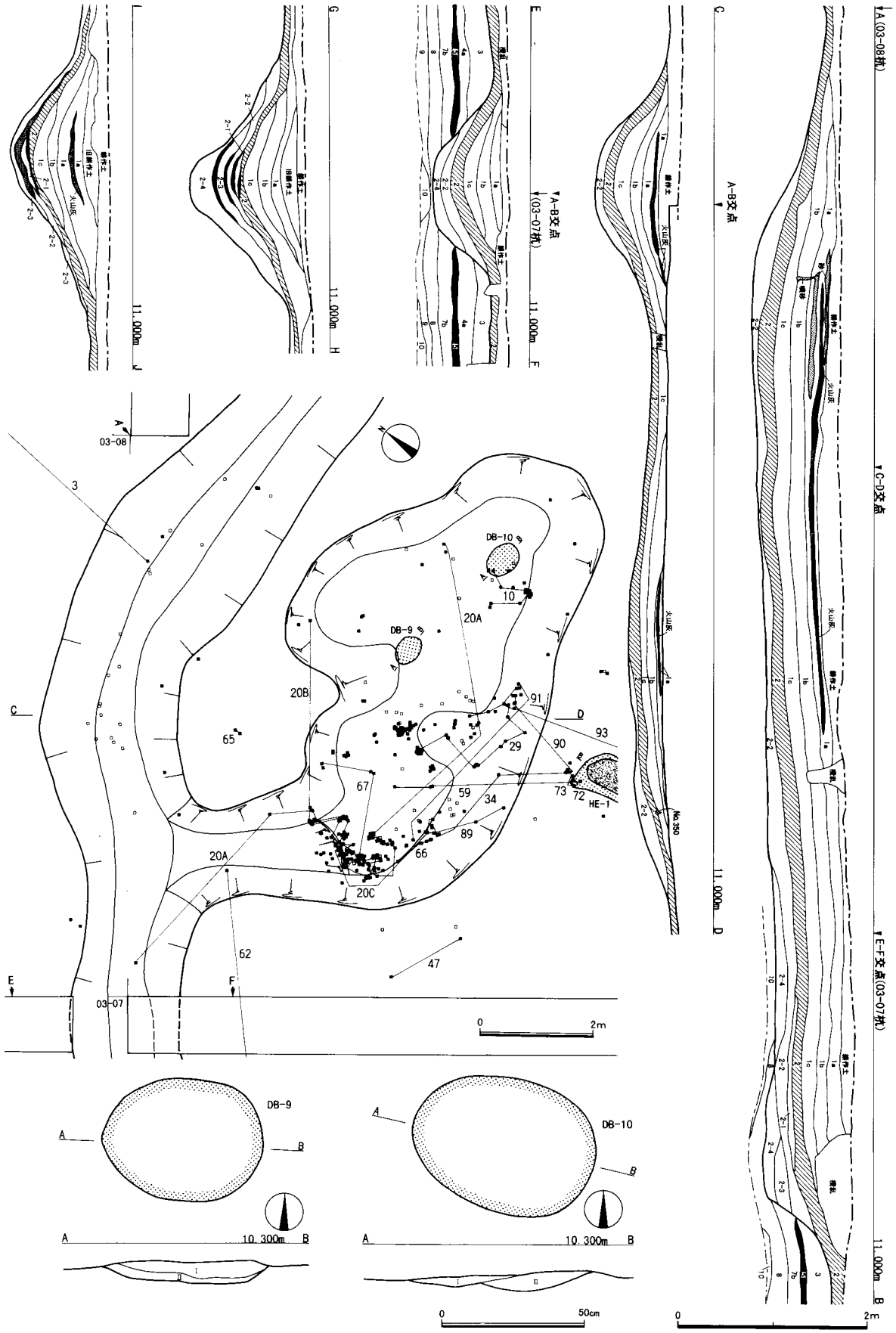
第25図－6は小型の高台坏である。口縁部付近に刺突列が見られる。第27図－48～51は坏の口縁部片である。多条の横走沈線がみられる。52、53は坏の体部片であり、53には斜沈線が見られる。54は坏の底部片であり、やや揚げ底である。

第17表　溝状遺構覆土土層注記表

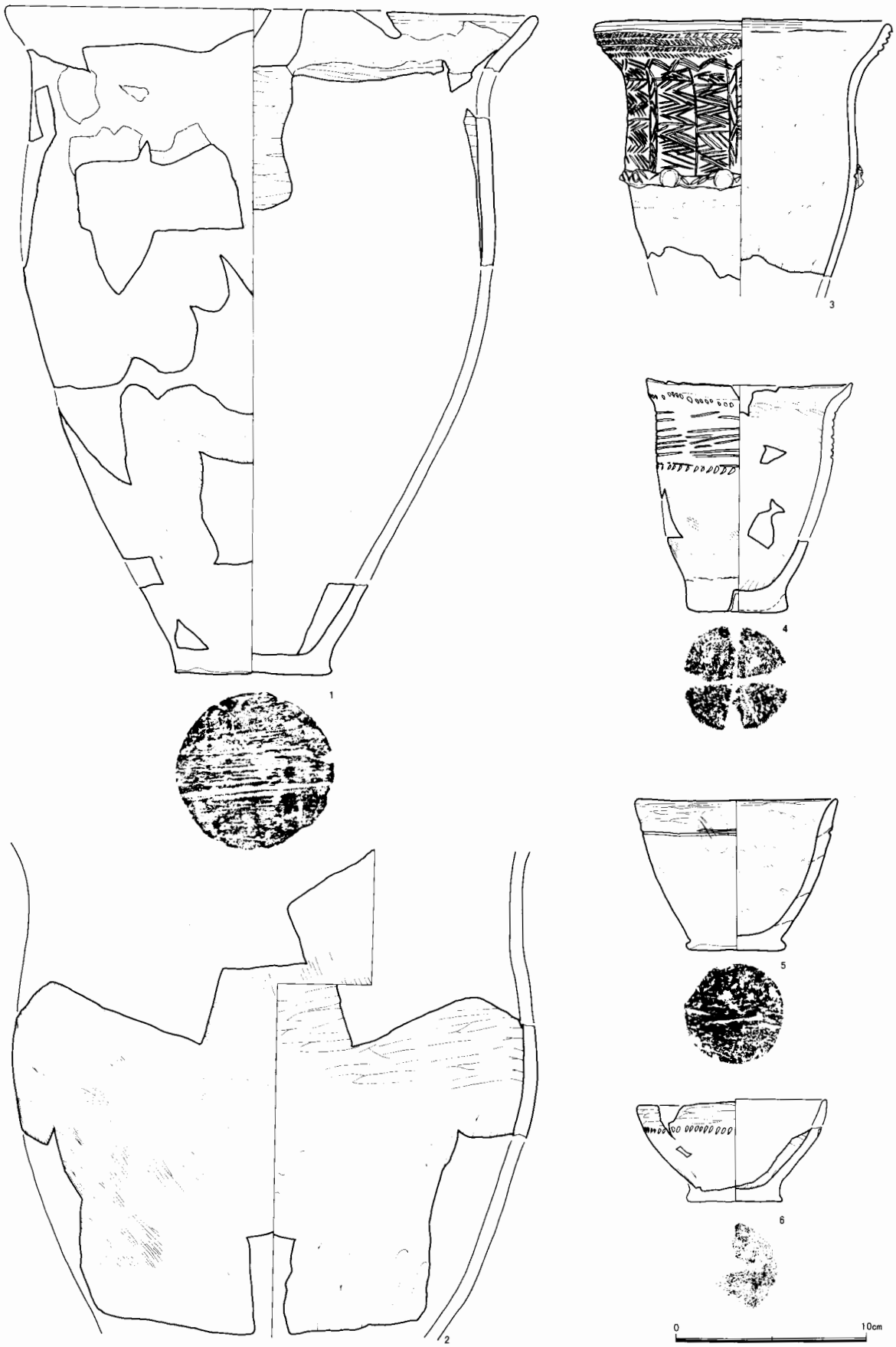
遺構名	層名	色相	土色	土性	粘性	しまり	混入物など
	耕作土	10YR2/1	黒色	シルト	やや弱	強	近年まで利用されていた土。
	旧耕作土	10YR4/4	褐色	シルト	やや強	中	畑の造成に伴い削土され移動した土。
	1a	10YR1.7/1	黒色	シルト	中	中	火山灰Ta-aと褐色砂が間層に入る。
	1b	2.5Y2/1	黒色	シルト	やや強	中	火山灰Ta-aと褐色砂が間層に入る。
	1c	7.5YR1.7/1	黒色	粘土質シルト	強	やや弱	腐植土層。
	2	10YR2/3	黒褐色	シルト	やや弱	やや強	
	2-1	10YR5/3	にぶい黄褐色	シルト	やや弱	やや弱	溝内に堆積した基本層2層の分層
	2-2	10YR5/2	灰黄褐色	シルト	やや弱	中	溝内に堆積した基本層2層の分層
	2-3	10YR4/1	褐灰色	シルト	やや強	中	溝内に堆積した基本層2層の分層
	2-4	10YR5/3	にぶい黄褐色	シルト	やや弱	やや弱	溝内に堆積した基本層2層の分層
	3	10YR4/2	灰黄褐色	シルト	やや弱	やや強	リモナイトが多い。
	4a	10YR5/4	にぶい黄褐色	シルト	やや弱	やや強	リモナイトが多い。
	5	10YR5/2	灰黄褐色	シルト	中	やや強	炭化物が混じる。
	7b	10YR5/6	黄褐色	砂質シルト	中	やや強	リモナイトが多い。
	8	10YR5/3	にぶい黄褐色	シルト	中	中	やや砂質分を含む。
	10	10YR5/4	にぶい黄褐色	シルト	中	中	砂質分が多く、部分的に砂シルトの互層もみられる。
	火山灰	7.5YR7/4	にぶい褐色	シルト	弱	弱	径1～2㎜の乳白色火山灰堆積物。Ta-aとみられる。
	褐色砂	7.5YR5/6	明褐色	砂	やや弱	やや弱	噴砂により噴き上がった砂の二次堆積。
DB-9	Ⅰ	5YR3/6	暗赤褐色	シルト	やや弱	中	炭・焼土粒・骨混じり。
	Ⅱ	5YR4/3	にぶい赤褐色	シルト	中	中	焼土粒が混じる灰層。
DB-10	Ⅰ	10YR4/1	褐灰色	粘土質シルト	やや強	中	炭・焼土粒が混じる灰層。
	Ⅱ	10YR3/2	黒褐色	粘土質シルト	やや強	中	炭・焼土粒が混じる(焼土粒がⅠ層より多い)灰層。



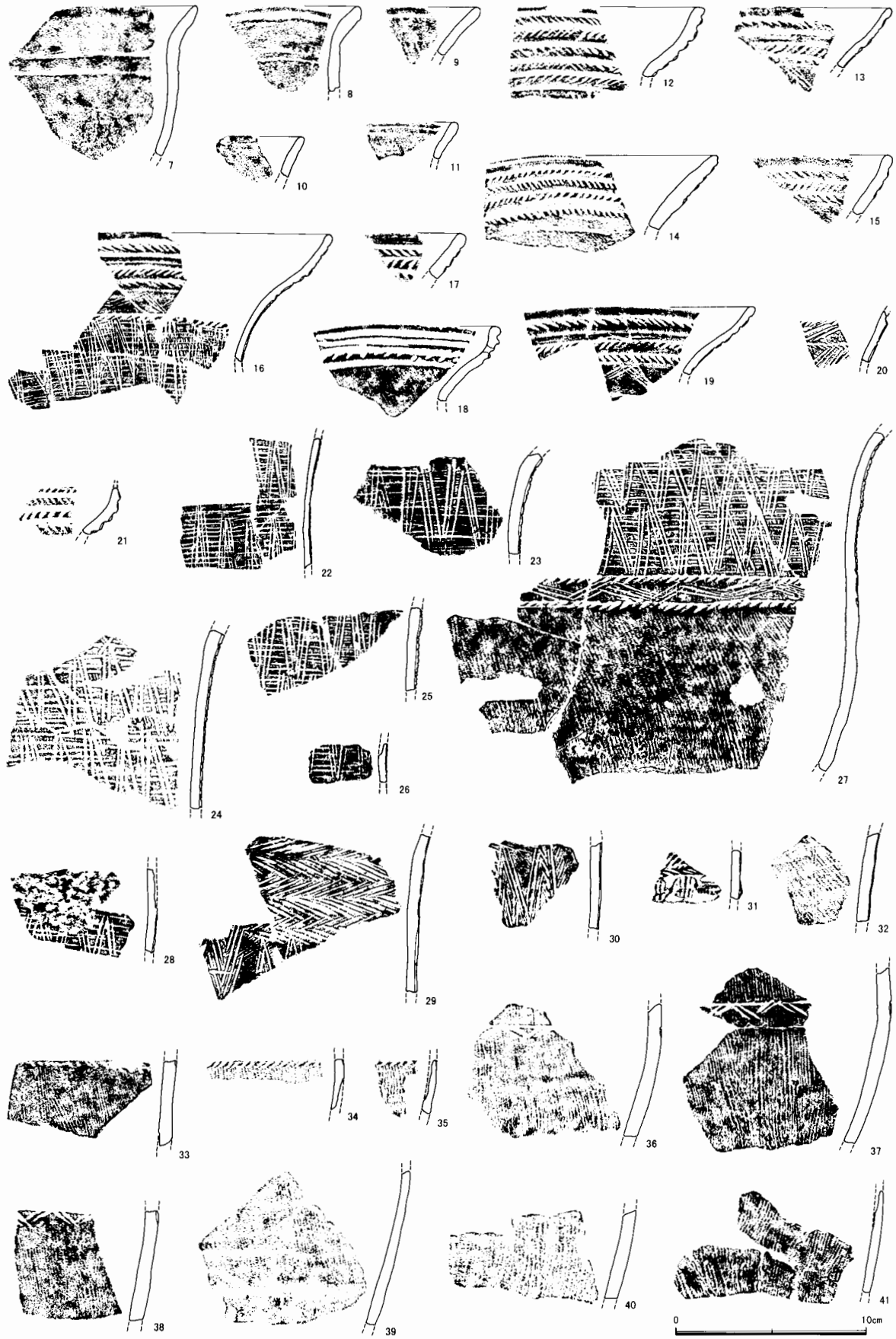
第23図　溝状遺構（1：200）



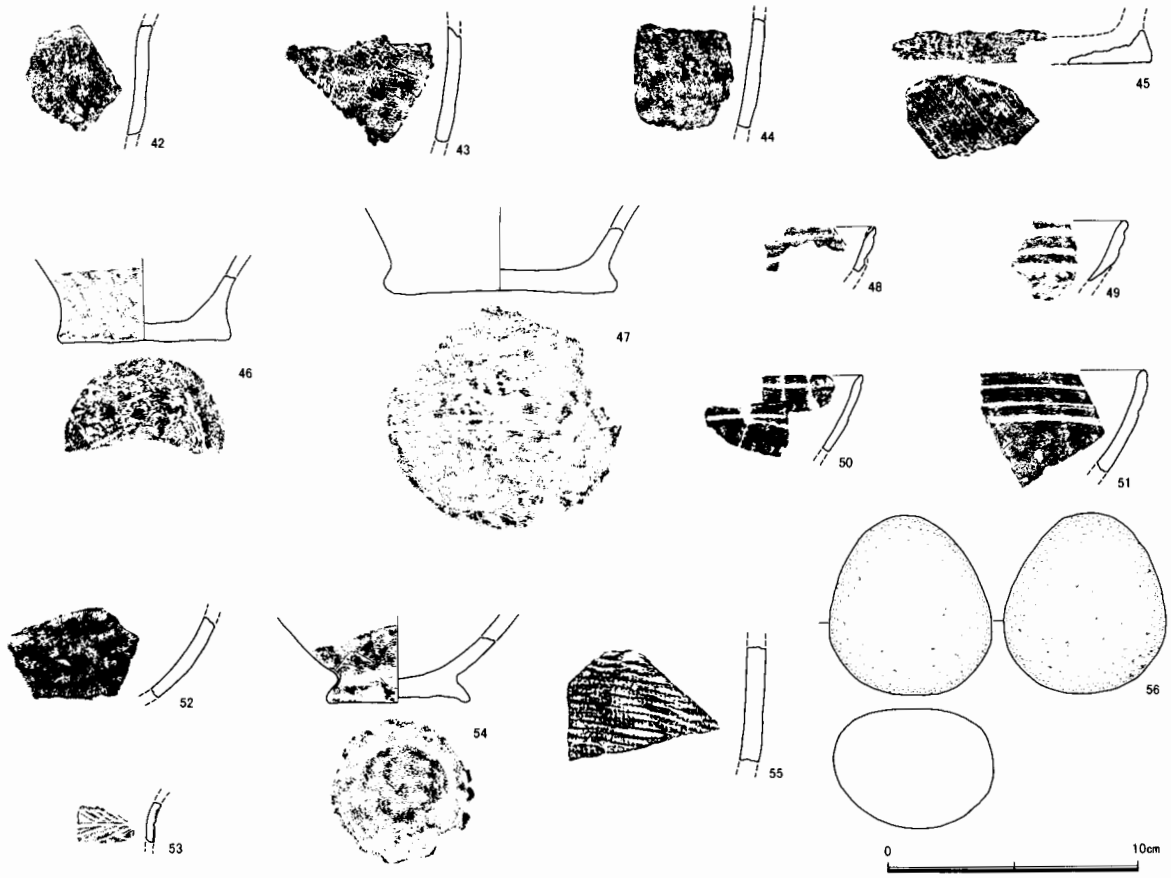
第24図　溝状遺構セクション（１：60）、構内検出焼土粒範囲（１：20）、および遺物集中地区拡大図（１：100）



第25図　溝状遺構出土遺物(1)（１：３）



第26図　溝状遺構出土遺物(2)（１：３）



第27図　溝状遺構出土遺物(3)（１：３、１：２）

55は須恵器の甕の胴部片である。外面には並行タタキの跡がみられるが内面にオサエの跡はみられない。色調は内外面とも黄灰色（Hue 2.5Y 6/1）であり、断面についても同様である。

56は覆土の２層出土の円礫であり、表面の頂部の平滑さを見る限り、磨石として用いられた可能性もある。

第18表　溝状遺構出土土器属性表

挿図番号	個体番号	拓本番号	種類	部位	器面調整 外面	器面調整 内面	文様 口縁部	文様 胴部文様帯	文様 胴下部	底部形状	色調 外面	色調 内面	区名	層位	遺物番号	図版番号	備考
25-1	20A		甕	口唇部～底部	縦ハケメ	横ミガキ 縦ハケメ 黒色処理				笹痕	10YR6/3 にぶい黄橙	10YR4/2 灰黄褐	04-08	2	75,76,77,80,82,89,96,147,170,174,175,176,177,178,179,184,185,187,189,190,212,213,214,215,217,219,220,228,229,230,231,232,234,239,240,241,242,247,250,259,261,262,264,266,273,280,281,285,286,290,309,319,329,335,	20-1	
25-1	20B		甕	口唇部～胴部	横ナデ 縦ハケメ	横ミガキ 黒色処理					10YR6/3 にぶい黄橙	10YR4/2 灰黄褐	04-08	2	74,86,91,93②,93,94,172,218,245,271,272,278,283,284,330,336	20-1	
25-2	29		甕	胴部	縦ハケメ	横ミガキ 縦ミガキ 黒色処理					10YR5/2 灰黄褐	10YR4/1 褐灰	04-08	1c 2	343,349,350 18,21,22,23,31,33,34,35,36,38,39,287,288,294,295,296,297,353	20-4	
25-3	6		小甕	口唇部～胴部	横ナデ 縦ハケメ 一部横ナデ	横ナデ 横ミガキ 縦ミガキ 黒色処理	横走沈線4条 -矢羽根状刺突2段鋸歯文	縦沈線で区画-間横走綾形横沈線3条で段分	貼付鋸歯文等間隔で指頭押厚		10YR5/3 にぶい黄褐	10YR1.7/1 黒	05-07	2	40①	20-2	
25-4	10		小甕	口唇部～底部	横ナデ 縦ハケメ	横ハケメ -横ミガキ 横ハケメ -縦ミガキ 黒色処理	斜刺突	横走沈線	斜刺突	切込み4ヶ所（焼成前）	2.5Y4/1 黄灰	10YR1.7/1 黒	04-08	2	93①,113,114,115,116,118,119,135,137,138,140,144	20-3	
25-5	16		小甕	口唇部～底部	横ナデ -横ミガキ 縦ハケメ	横ナデ -横ミガキ 縦ミガキ 黒色処理	横走沈線1条			砂底・擦痕	7.5YR1.7/1 黒	7.5YR1.7/1 黒	04-08	2	312	20-5	
25-6	25		高台坏	口唇部～体部	横ナデ- 縦ハケメ -横ミガキ	横ナデ- 横ミガキ 縦ミガキ 黒色処理	斜刺突			擦痕	10YR7/3 にぶい黄橙	10YR1.7/1 黒	05-07	2	15,17,19,20,21,22,23,24	20-6	
26-7		12	甕	口唇部～胴部	横ナデ 縦ハケメ	横ミガキ 縦ミガキ 黒色処理		段つき 横走沈線			10YR7/2 にぶい黄橙	10YR6/1 褐灰	04-08	2	24	23-15	
26-8		54	甕	口唇部～胴部文様帯	横ナデ	横ハケメ 横ミガキ 黒色処理	横走沈線1条	段つき 横走沈線			7.5YR6/4 にぶい橙	7.5YR1.7/1 黒	04-09	2	9	23-16	
26-9		146	甕	口唇部～口縁部	横ナデ 縦ハケメ	横ミガキ 黒色処理					10YR7/3 にぶい黄橙	10YR4/6 褐	04-08	2	51	23-17	
26-10		198	甕	口唇部～口縁部	横ナデ	横ミガキ 黒色処理					10YR4/2 灰黄褐	10YR1.7/1 黒	04-08	2	42	23-18	
26-11		197	甕	口唇部	横ナデ	横ナデ 黒色処理					10YR5/3 にぶい黄褐	10YR1.7/1 黒	04-08	2	108	23-19	
26-12		80	甕	口唇部～口縁部	横ナデ	横ナデ 横ミガキ 黒色処理	横走沈線6条 ー斜刺突5列				10YR8/3 浅黄橙	10YR1.7/1 黒	04-08	2	121	23-20	
26-13		212	甕	口唇部～口縁部	横ナデ	横ミガキ 黒色処理	横走沈線3条 -斜刺突間鋸歯文				10YR1.7/1 黒	10YR1.7/1 黒	04-08	2	195	23-21	
26-14		51	甕	口唇部～口縁部	横ナデ 斜ハケメ	横ミガキ 黒色処理	横走沈線5条 ー斜刺突4列				10YR6/4 にぶい黄橙	10YR1.7/1 黒	04-08	2	333	23-22	
26-15		70	甕	口唇部～口縁部	横ナデ	横ナデ 横ミガキ	横走沈線3条 ー斜刺突3列				10YR7/2 にぶい黄橙	10YR7/2 にぶい黄橙	04-08	2	346	23-23	
26-16	89	205	甕	口唇部～胴部文様帯	横ナデ 縦ハケメ	横ミガキ 黒色処理	横走沈線6条 -斜刺突間鋸歯文	横走沈線 -鋸歯文			10YR6/3 にぶい黄橙	10YR1.7/1 黒	04-08	2 耕作土	17,95,313,315 なし③	23-24	
26-17		64	甕	口唇部～口縁部	横ナデ	横ミガキ 黒色処理	横走沈線3条 ー斜刺突3列				10YR6/3 にぶい黄橙	10YR3/1 黒褐	05-07	2	29	23-25	
26-18		62	甕	口唇部～口縁部	横ナデ 縦ハケメ	横ミガキ 黒色処理	横走沈線4条 ー斜刺突1列				10YR4/2 灰黄褐	10YR1.7/1 黒	04-08	2	265	23-26	補修孔あり
26-19	90	206	甕	口唇部～口縁部	横ナデ	横ミガキ 黒色処理	横走沈線6条 -斜刺突間鋸歯文				10YR2/1 黒	10YR1.7/1 黒	04-08	1c 2	352 340②,342,344,351	23-27	
26-20		107	甕	胴部文様帯	横ナデ	横ミガキ 黒色処理		斜行沈線 -横走沈線 ・斜刺突			10YR2/2 黒褐	10YR1.7/1 黒	04-08	2	29	23-28	
26-21		69	甕	口唇部～口縁部	横ナデ	横ナデ 黒色処理	横走沈線4条 ー斜刺突5列				10YR4/1 褐灰	10YR3/1 黒褐	04-08	2	112	23-29	
26-22	91	209	甕	胴部文様帯	縦ハケメ	横ミガキ 黒色処理		横走沈線 -鋸歯文2段			10YR5/3 にぶい黄褐	10YR1.7/1 黒	04-08	2	200,345	23-30	
26-23	62	114	甕	胴部文様帯	縦ハケメ	横ミガキ 黒色処理		横走沈線 -鋸歯文2段			10YR8/2 灰白	10YR1.7/1 黒	04-06 04-08	2 2	3 148	23-31	
26-24	63	115	甕	胴部文様帯	縦ハケメ	横ミガキ 黒色処理		横走沈線 -鋸歯文2段			10YR6/6 明黄褐	10YR6/2 灰黄褐	04-08	2 耕作土	19 なし①	23-32	
26-25	37	15	甕	胴部文様帯	縦ハケメ	横ミガキ 黒色処理		横走沈線 -鋸歯文2段			10YR5/3 にぶい黄褐	10YR1.7/1 黒	05-07	2 耕作土	42 なし②	23-33	
26-26		210	甕	胴部文様帯	縦ハケメ	横ミガキ 黒色処理		横走沈線 -鋸歯文			10YR6/3 にぶい黄橙	10YR1.7/1 黒	04-08	2	28	23-34	
26-27	36	14	甕	胴部文様帯～胴部	縦ハケメ	横ミガキ 縦ミガキ 黒色処理		横走沈線 -鋸歯2段	斜刺突列2段間鋸歯文		10YR2/3 黒褐	10YR1.7/1 黒	06-07	2	14,16,17	23-35	
26-28		16	甕	胴部文様帯	縦ハケメ	横ミガキ 黒色処理		横走沈線 -鋸歯文			10YR3/2 黒褐	10YR1.7/1 黒	06-07	1c	9	23-36	被熱により剥離
26-29	35	11	甕	胴部文様帯	斜ハケメ	横ナデ 黒色処理		横走綾杉文 綾杉文			10YR5/2 灰黄褐	10YR4/1 褐灰	06-07	2	12,13,25	23-37	

挿図番号	個体番号	拓本番号	種類	部位	器面調整 外面	器面調整 内面	文様 口縁部	文様 胴部文様帯	文様 胴下部	底部形状	色調 外面	色調 内面	区名	層位	遺物番号	図版番号	備考
26-30		10	甕	胴部文様帯	縦ハケメ	横ナデ 黒色処理		鋸歯文 -斜刺突			10YR6/2 灰黄褐	10YR3/2 黒褐	06-07	2	11	23-38	
26-31		86	甕	胴部文様帯～ 胴下部文様帯	横ナデ	横ミガキ 黒色処理		横走綾杉文	貼付刺突		10YR6/3 にぶい黄橙	10YR2/3 黒褐	05-07	2	43	23-39	
26-32		149	甕	胴部文様帯	縦ハケメ	横ミガキ 黒色処理		縦沈線			10YR7/2 にぶい黄橙	10YR1.7/1 黒	05-07	2	12	23-40	
26-33		135	甕	胴下部文様帯 ～胴部	縦ハケメ	横ミガキ			斜刺突		7.5YR3/1 黒褐	10YR7/3 にぶい黄橙	04-08	2	117	23-41	
26-34		139	甕	胴下部文様帯	縦ハケメ	横ミガキ 黒色処理			斜刺突		10YR2/1 黒	7.5YR1.7/1 黒	04-08	2	317(1)	23-42	
26-35		147	甕	胴下部文様帯	縦ハケメ	横ミガキ 黒色処理			斜刺突		10YR2/3 黒褐	10YR1.7/1 黒	04-08	2	274	23-43	
26-36		143	甕	胴下部文様帯 ～胴部	縦ハケメ	縦ミガキ 黒色処理			鋸歯文		10YR7/3 にぶい黄橙	10YR5/1 褐灰	04-08	2	120	23-44	
26-37	64	131	甕	胴下部文様帯 ～胴部	縦ハケメ	縦ミガキ 黒色処理			鋸歯文		10YR2/1 黒	10YR5/1 褐灰	04-08 05-08	2 耕作土	111 なし(2)	23-45	
26-38		142	甕	胴下部文様帯 ～胴部	縦ハケメ	縦ミガキ 黒色処理			鋸歯文		10YR6/2 灰黄褐	10YR4/1 褐灰	04-08	2	103	23-46	
26-39	67	144	甕	胴部	縦ハケメ	縦ミガキ 黒色処理					10YR6/3 にぶい黄橙	10YR2/2 黒褐	04-08	2	153,154,277, 301,318	23-47	
26-40	65	140	甕	胴部	縦ハケメ	縦ミガキ 黒色処理					10YR2/2 黒褐	10YR4/1 褐灰	04-08	2	150,151	23-48	
26-41	66	141	甕	胴部	縦ハケメ	横ミガキ 黒色処理					10YR4/2 灰黄褐	10YR1.7/1 黒	04-08	2	211,223, 224,225	23-49	
27-42		134	甕	胴部	縦ハケメ	縦ミガキ 黒色処理					7.5YR5/4 にぶい褐	7.5YR4/3 褐	04-08	2	6	23-50	
27-43		152	甕	胴部	斜ハケメ	縦ミガキ 黒色処理					10YR5/3 にぶい黄褐	10YR3/3 暗褐	04-09	2	8	23-51	
27-44		130	甕	胴部	横ナデ	横ナデ					10YR5/3 にぶい黄褐	10YR7/2 にぶい黄橙	04-09	2	6	24-1	
27-45		29	甕	底部	縦ハケメ					笹痕	10YR7/2 にぶい黄橙		04-08	2	181	24-2	
27-46		8	甕	底部	横ナデ	縦ミガキ 黒色処理				擦痕	7.5YR5/4 にぶい褐	7.5YR1.7/1 黒	06-07	2	21	24-3	
27-47	34	9	甕	底部	横ナデ 縦ハケメ	横ナデ 黒色処理				笹痕	10YR5/4 にぶい黄褐	10YR4/1 褐灰	04-08	2	197,222, 289,339	24-4	
27-48		200	坏	口唇部	横ナデ	横ミガキ 黒色処理	横走沈線3条				10YR2/1 黒	10YR1.7/1 黒	04-08	2	105	24-5	
27-49		75	甕	口唇部 ～口縁部	横ナデ	横ナデ 黒色処理	横走沈線3条				10YR2/1 黒	10YR1.7/1 黒	04-08	2	107(1)	24-6	
27-50		201	坏	口唇部 ～体部	横ナデ	縦ミガキ 黒色処理	横走沈線2条				10YR7/3 にぶい黄橙	10YR1.7/1 黒	04-08	2	192(1,2)	24-7	
27-51		194	坏	口唇部 ～体部	横ナデ	縦ミガキ 黒色処理	横走沈線3条				10YR7/2 にぶい黄橙	10YR1.7/1 黒	04-08	2	30	24-8	
27-52		195	坏	体部	横ナデ	縦ミガキ 黒色処理					10YR8/2 灰白	10YR1.7/1 黒	04-08	2	332	24-9	
27-53		93	坏	体部	横ナデ	横ミガキ		斜刺突 横走沈線 -斜行沈線			10YR5/4 にぶい黄褐	10YR3/2 黒褐	06-07	2	24	24-10	
27-54		193	高坏	底部	横ナデ	横ハケメ -縦ミガキ 黒色処理				揚げ底	10YR6/4 にぶい黄橙	10YR2/1 黒	04-08	2	106	24-11	
27-55		253	須恵器甕	胴部	平行タタキ	ナデ					2.5Y6/1 黄灰	2.5Y6/1 黄灰	04-08	2	199	24-12	断面の色調 2.5Y6/1 黄灰
32-17	59	81	甕	口唇部 ～口縁部	横ナデ	横ミガキ 黒色処理	横走沈線3条 －斜刺突3列 鋸歯文	横走沈線			10YR6/3 にぶい黄橙	10YR1.7/1 黒	04-08	2 3	163,193,194 8	22-24	

第3節　焼土および焼土粒範囲、土壙（第28～31・35図、第19・20表、図版16A～16D・17B・21）

本遺跡検出の焼土及び焼土粒範囲については、被熱層をもつ焼土層をHE、焼土層を掻き出した炭化物や焼土粒の広がる範囲をDBと分類しており、遺構内外の区別なく検出順にナンバリングを行った。ここでは遺構外のものについて取り扱う。

HE－1（第28図、第19表、図版16A）　耕作土を重機で除去した段階で、04－08・05－08区にかけて基本層2層中より検出された大型の焼土とその焼土粒の範囲である。中心部に柱痕状の撹乱を受けていた。何らかの影響を受けて焼土部分が拡大したものと思われるが、原因は不明である。広がりはHP－2の覆土にまで及んでいた。土壌サンプルを行い、フローテーションを実施しているが、肝心の灰層部分は後世の畑地利用によって破壊された可能性もあり、遺物の回収量は少ない。

HE－3（第28図、第19表）　耕作土を重機で除去した段階で、02－08区において基本層3層上面より検出された焼土である。近接のHP－3との関係もあると思われる。土壌サンプルを行い、フローテーションを実施しているが、肝心の灰層部分は後世の畑地利用によって破壊された可能性もあり、遺物の回収は少ない。

HE－4（第28図、第19表）　耕作土を重機で除去した段階で、01－09区において基本層3層上面より検出された焼土である。土壌サンプルを行い、フローテーションを実施しているが、肝心の灰層部分は後世の畑地利用によって破壊された可能性もあり、遺物の回収量は少ない。

HE－6（第28図、第19表、図版16Ｃ）　01－08区において、HP－1とHP－3との間にみられた緩やかな窪み状の落込みの基本層2層中より検出された焼土である。土壌サンプルを行い、フローテーションを実施しているが、遺物の回収量は少ない。

HE－8（第29図、第19表）　基本層2層を除去した段階で、04－09区の溝状遺構の縁際において基本層3層上面より検出された焼土である。土壌サンプルを行い、フローテーションを実施しているが、遺物の回収量は少ない。

HE－10（第29図、第19表）　耕作土を除去した段階で、06－08区のHP－5の北西側において基本層2層中より検出された焼土である。土壌サンプルを行い、フローテーションを実施しているが、遺物の回収量は少ない。

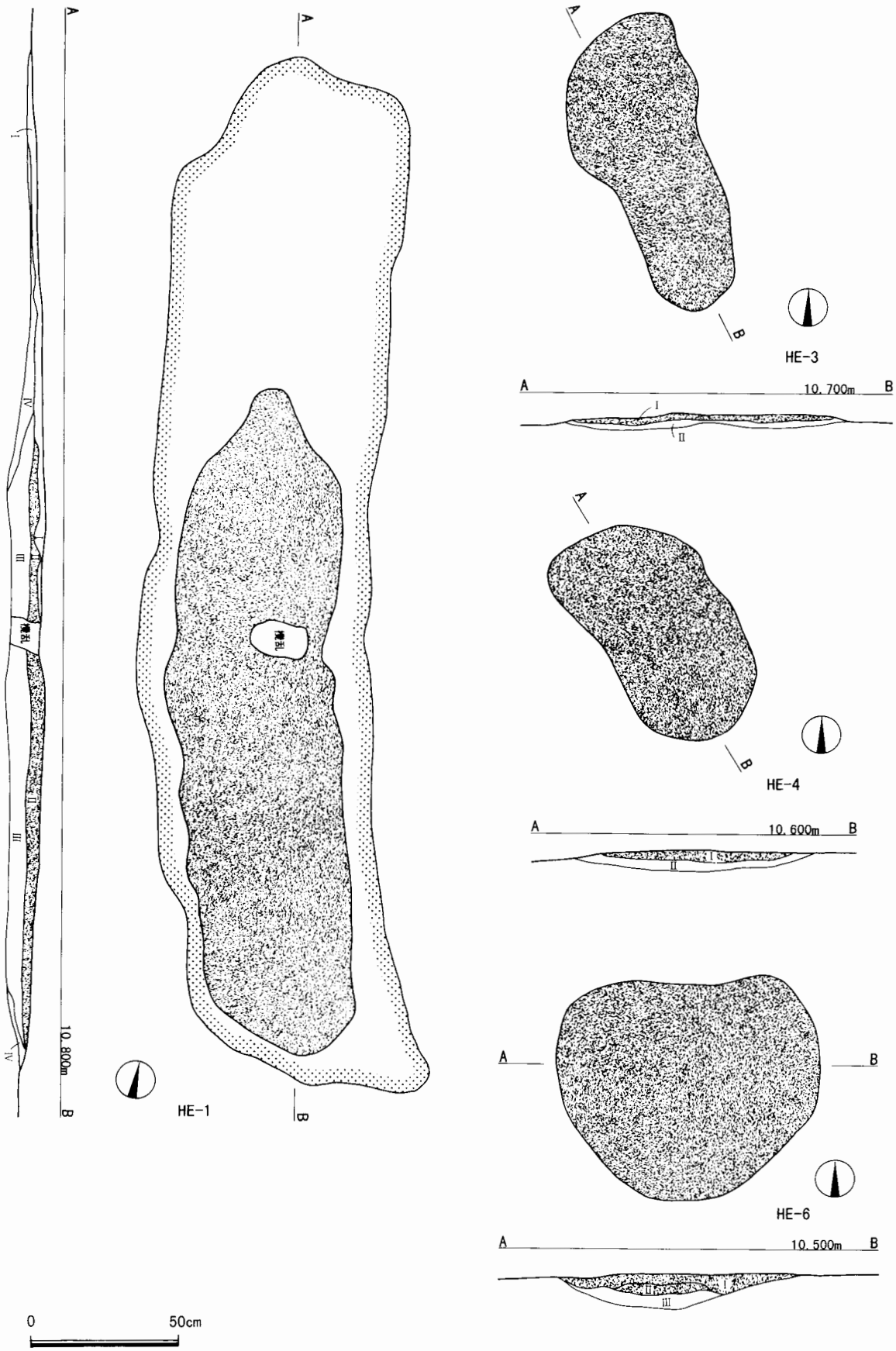
HE－11（第30図、第19表）　02－07区において、HP－1とHP－3との間にみられた緩やかな窪み状の落込みの基本層2層中より検出された焼土である。土壌サンプルを行い、フローテーションを実施しているが、遺物の回収量は少ない。

DB－1（第29図、第19表）　耕作土を除去した段階で、04－08・05－08区にかけて基本層2層中より検出された、被熱層を持たない焼土粒の範囲である。土壌サンプルを行い、フローテーションを実施しているが、遺物の回収量は少ない。

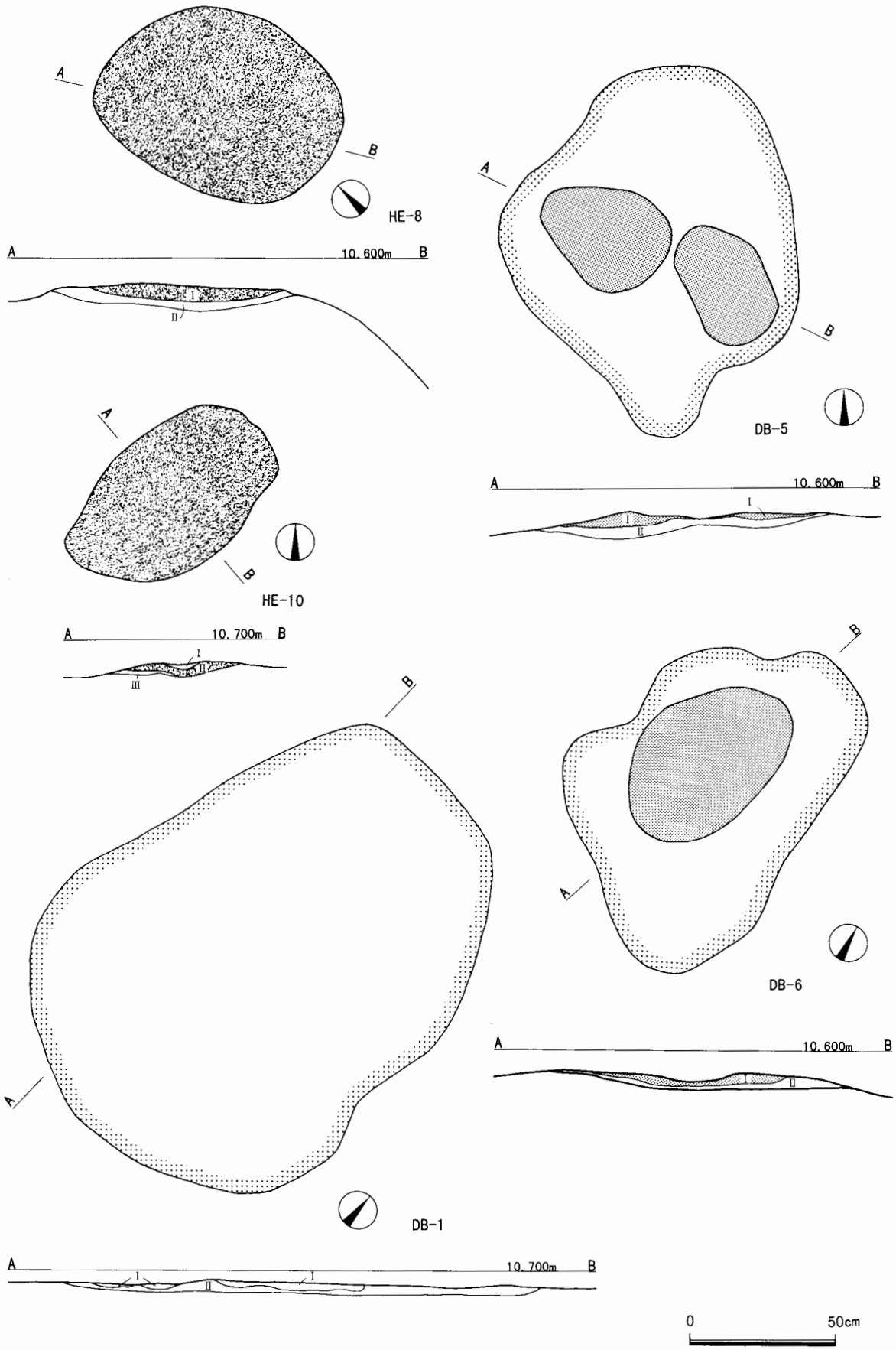
DB－3（第30図、第19表）　耕作土を除去した段階で、02－08・02－09区にかけて基本層3層上面より検出された、被熱層を持たない焼土粒の範囲である。東側に一部撹乱を受けている。土壌サン

第19表　焼土、焼土粒範囲土層注記表

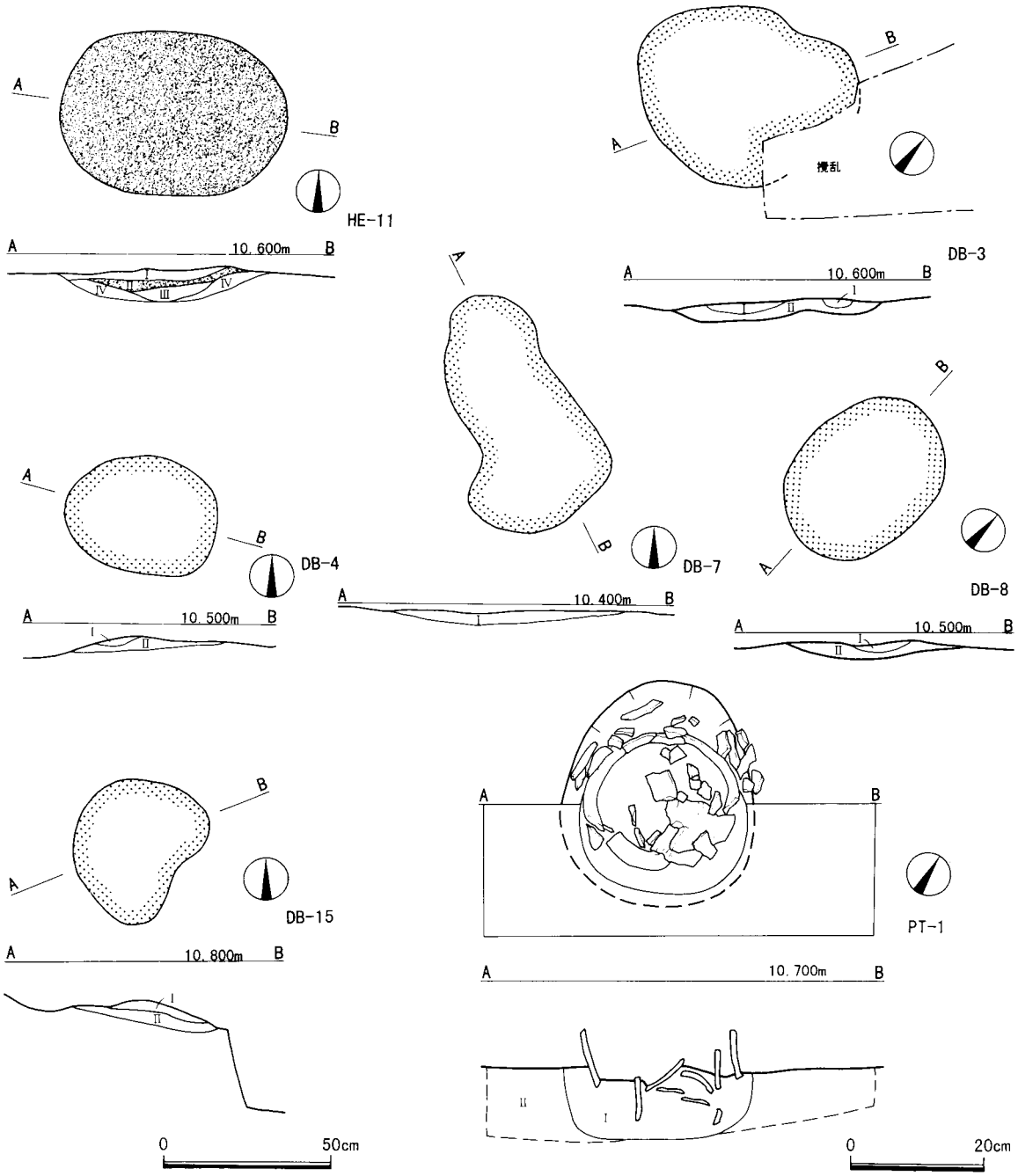
遺構名	層名	色相	土色	土性	粘性	しまり	混入物など
HE-1	Ⅰ	5YR3/2	暗赤褐色	シルト	中	中	焼土粒の流れ込み(基本層の2層)。
	Ⅱ	5YR3/6	暗赤褐色	シルト	中	中	焼土層・骨・炭は肉眼で確認できない。
	Ⅲ	5YR4/4	にぶい赤褐色	シルト	中	中	焼土の影響が大きい層(基本層の3層)。
	Ⅳ	5YR2/2	黒褐色	シルト	やや強	中	焼土の影響層。
HE-3	Ⅰ	5YR3/4	暗赤褐色	シルト	やや弱	やや強	砂質部分が多い。
	Ⅱ	5YR4/3	にぶい赤褐色	シルト	中	中	焼土の影響層。
HE-4	Ⅰ	5YR3/2	暗赤褐色	シルト	やや強	中	焼土層・若干の骨片が混じる。
	Ⅱ	7.5YR3/3	暗褐色	シルト	中	中	焼土の影響層(基本層の3層)。
HE-6	Ⅰ	10YR4/2	黒褐色	シルト	中	やや強	焼土粒・骨が混じる(骨少ない)。
	Ⅱ	5YR4/6	赤褐色	シルト	やや強	中	骨・炭混じりの焼土層。
	Ⅲ	5YR4/3	にぶい赤褐色	シルト	やや強	中	焼土の影響層(基本層の3層)。
HE-8	Ⅰ	5YR4/6	赤褐色	粘土質シルト	やや弱	中	炭が混じる。
	Ⅱ	5YR2/3	極暗赤褐色	シルト	中	中	焼土の影響層。
HE-10	Ⅰ	7.5YR2/1	黒色	シルト	やや弱	中	現代の撹乱。
	Ⅱ	5YR3/2	暗赤褐色	粘土質シルト	中	中	焼土層・骨が混じる。
	Ⅲ	5YR4/3	にぶい赤褐色	シルト	やや弱	中	焼土の影響層。
HE-11	Ⅰ	5YR3/1	黒褐色	シルト	やや強	やや弱	焼土粒(2㎜～5㎜)が混じる。
	Ⅱ	5YR4/6	赤褐色	シルト	やや強	やや弱	焼土層で骨が混じる。
	Ⅲ	5YR3/6	暗赤褐色	シルト	やや強	中	焼土の影響が大きい層。
	Ⅳ	5YR3/3	暗赤褐色	シルト	やや強	中	焼土の影響を受けた層。
DB-1	Ⅰ	7.5YR3/2	黒褐色	シルト	弱	中	焼土粒・炭が混じる。
	Ⅱ	7.5YR4/4	褐色	シルト	弱	中	灰層。
DB-3	Ⅰ	5YR3/6	暗赤褐色	シルト	やや強	中	焼土粒。
	Ⅱ	7.5YR3/2	黒褐色	シルト	中	中	焼土粒が混じる灰層。
DB-4	Ⅰ	5YR4/6	赤褐色	シルト	やや弱	中	焼土粒。
	Ⅱ	5YR3/1	黒褐色	シルト	やや弱	中	焼土粒が混じる灰層。
DB-5	Ⅰ	5YR3/6	暗赤褐色	シルト	やや弱	中	焼土粒。
	Ⅱ	5YR3/3	暗赤褐色	シルト	やや弱	中	焼土粒が混じる灰層。
DB-6	Ⅰ	5YR3/4	暗赤褐色	シルト	中	中	焼土粒。
	Ⅱ	5YR4/1	褐灰色	シルト	中	中	焼土粒が混じる灰層。
DB-7	Ⅰ	10YR3/1	黒褐色	シルト	やや弱	やや弱	炭・焼土粒・骨が混じる。
DB-8	Ⅰ	5YR3/4	暗赤褐色	シルト	やや弱	やや弱	炭・焼土粒が混じる。
	Ⅱ	5YR4/1	褐灰色	シルト	中	やや弱	炭が混じる灰層。
DB-15	Ⅰ	5YR3/3	暗赤褐色	シルト	やや強	やや強	炭・骨は肉眼で確認できない。
	Ⅱ	5YR4/4	にぶい赤褐色	シルト	やや強	中	焼土の影響層(HP-2覆土Ⅴ層上面より検出)。



第28図　焼土(1)（1：20）



第29図　焼土(2)・焼土粒範囲(1)（1：20）



第30図　焼土粒範囲(2)（1：20）・第1号土壙土器出土状況（1：10）

第20表　第1号土壙覆土土層注記表

遺構名	層名	色相	土色	土性	粘性	しまり	混入物など
Pit-1	Ⅰ	10YR4/1	褐灰色	シルト	中	中	
	Ⅱ	10YR4/2	灰黄褐色	シルト	やや弱	やや弱	基本層3層。

プルを行い、フローテーションを実施しているが、遺物の回収量は少ない。

DB－4（第30図、第19表）　耕作土を除去した段階で、01－09区の基本層2層中より検出された被熱層を持たない焼土粒の範囲である。土壌サンプルを行い、フローテーションを実施しているが、遺物の回収量は少ない。

DB－5（第29図、第19表、図版16Ｄ）　耕作土を除去した段階で、01－09区において基本層2層中より検出された被熱層を持たない焼土粒の範囲である。範囲内に焼土粒の集中する部分が2ヶ所みられたため、別個に土壌サンプルを行い、フローテーションを実施しているが、遺物の回収量は少ない。検出層位や状況から隣接するDB－6と関連が深いものと思われる。

DB－6（第29図、第19表）耕作土を除去した段階で、01－09区において基本層2層中より検出された被熱層を持たない焼土粒の範囲である。範囲内に焼土粒の集中する部分が1ヶ所みられたため、別個に土壌サンプルを行い、フローテーションを実施しているが、遺物の回収量は少ない。検出層位や状況から隣接するDB－5と関連が深いものと思われる。

DB－7（第30図、第19表）　01－08区において、HP－1とHP－3との間にみられた緩やかな窪み状の落込みの基本層2層中より検出された被熱層を持たない焼土粒範囲である。土壌サンプルを行い、フローテーションを実施した結果、クルミ＜0.01ｇ、魚類骨0.03ｇが検出された。

DB－8（第30図、第19表、図版16Ｂ）　耕作土・盛土を除去した段階で、03－09区において基本層2層中より検出された被熱層を持たない焼土粒の範囲である。土壌サンプルを行い、フローテーションを実施しているが、遺物の回収量は少ない。

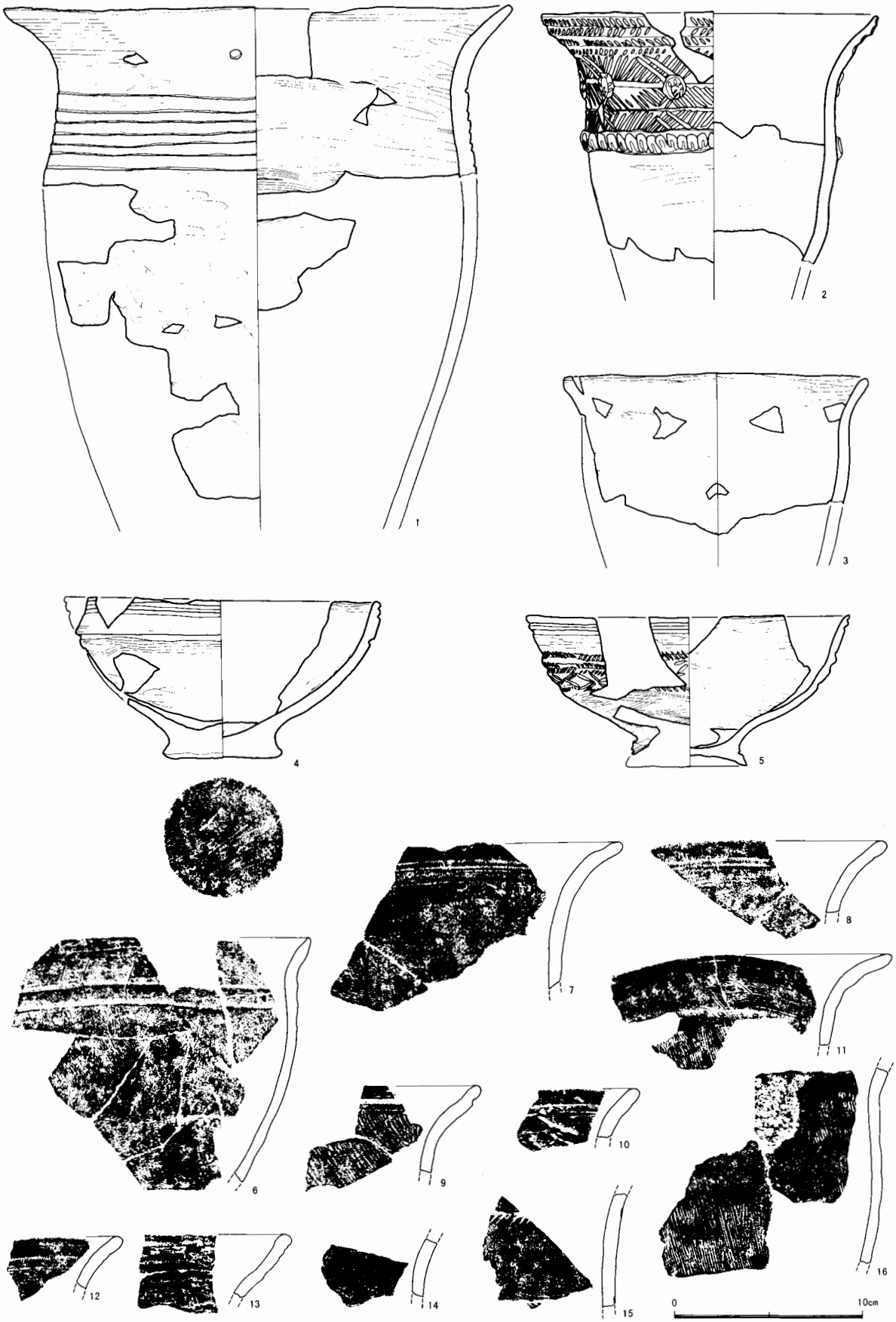
DB－15（第30図、第19表）　HP－2の調査中、覆土内に廃棄されたと思われる焼土粒の範囲が検出された。検出層位は覆土の2層中に対応すると思われるⅦａ層上面である。土壌サンプルを行い、フローテーションを実施しているが、遺物の回収量は少ない。

PT－1（第30・31図、第20表、図版17Ｂ・21）　重機による漉き取りで残された耕作土の除去中、03－06区において一括土器が検出された。出土状態を把握するために上面を精査したところ、甕を逆さに伏せた状態であることが確認された。ただし底部付近は耕作土中に散在しており、プライマリーな状態で出土したのは上半部だけであった。この事から埋設遺構である可能性があったため、トレンチを開け断面を観察し、土壙であることを確認した。覆土は土壌サンプルを行い、フローテーションを実施しているが、遺物の回収量は少ない。報告書の体裁の関係で発掘区と同じ図上にあるが、図31－1が出土遺物である。胴頂部の張り出しがあまりない比較的直線的な器形であるが、口縁部は外反する。口唇部の断面は角型である。内外面ともハケメ調整であり、内面は後でヘラミガキを施している。内面の黒色処理は褐色状態である。文様は胴部文様帯に幅広の浅い沈線が施文されており、それは結果的に段状構造にもみることが出来る。

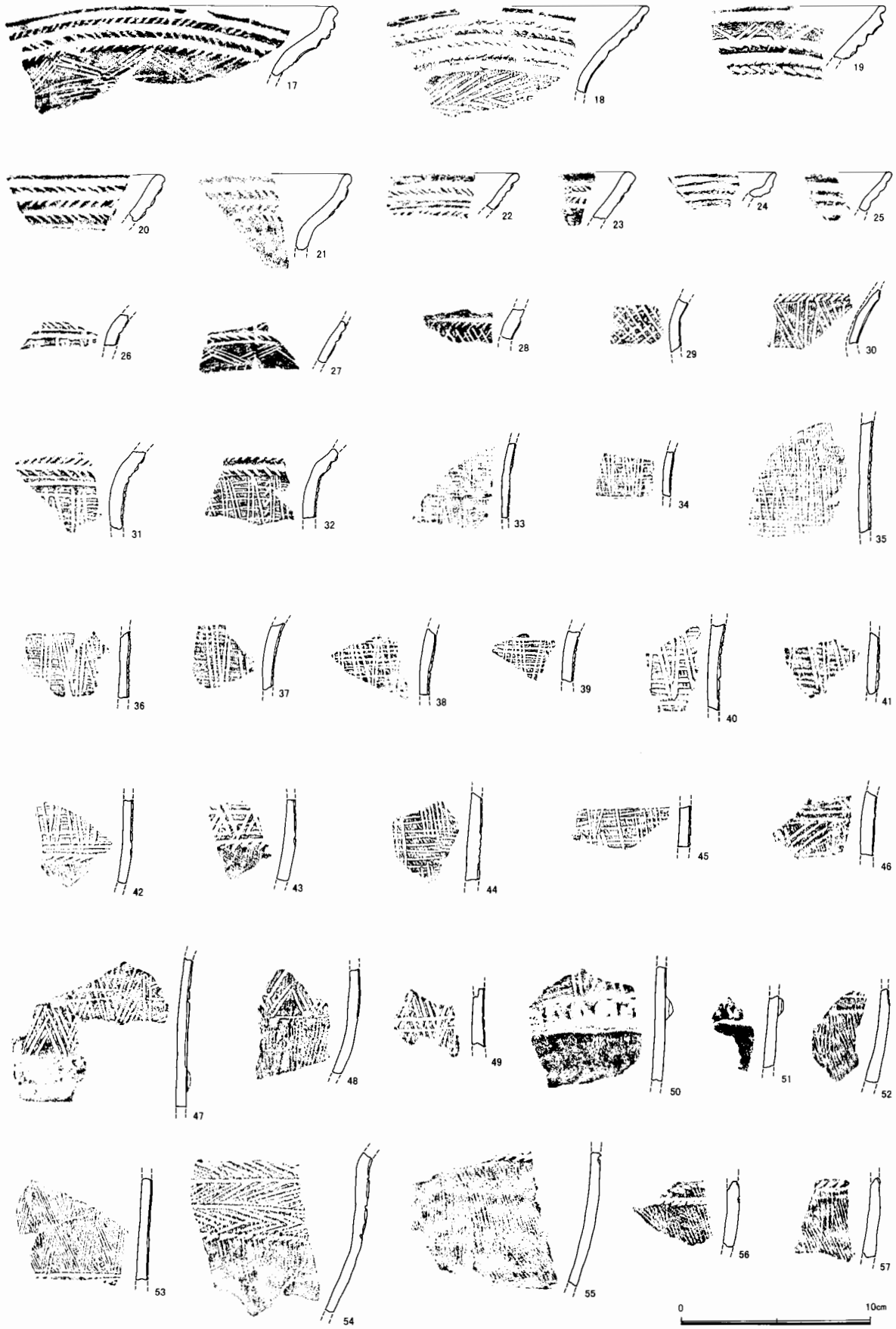
第４節　発掘区出土遺物（第31～35図、第21表、図版17Ａ・21・24・25・27）

本遺跡でプライマリーな状態で出土した遺物は、竪穴や溝等の遺構内出土のものが多く、他にＨＰ－１とＨＰ－３との間に確認された窪み状の落込みやその周辺からも遺物の集中がみられる。遺構遺物データシステムにより記録した遺物点の数は総計1,795点であり、その内訳は竪穴出土が573点、溝状遺構出土が416点であり、発掘区は806点であった。また遺物の種別でみていくと土器、石器28点、礫477点、漆製品、錫製環状装飾品に分類でき、その内訳は土器1,287点、石器28点、礫477点、漆製品２点、錫製環状装飾品１点となっている。

土器　第31図－２、３、６～16、第32図17～57、第33図－58～90は甕である。第31図－２は02－07区の北側で一括出土した資料で、胴部～底部は欠損している。頸部がほぼ垂直に立ち上がり、口縁部が口端部でやや内傾する。胴頂部の張り出しは弱く、成形は粗雑であり一部歪んでいる。また口縁部断面は先端が尖るタイプである。外面調整はハケメで行われ、上半部は横方向であるが、胴頂部より下の胴部は縦方向である。内面は全体にヘラミガキであり上半部が横方向、下半部が縦方向であり、内面の黒色処理は褐色状態である。口縁部にナデ成形で段状構造を作出し、その上に矢羽根状刺突列を施文している。胴部文様帯は２条の横走沈線で文様帯を３段に区画し、一段ずつ同傾斜の斜沈線を施文しており、その方向は一段目が左傾斜であり、２段目は右傾斜、３段目は左傾斜である。その上に下地の斜沈線とは逆方向の２条１組の斜沈線を順に３段目まで施文しており、完全復元ではないため確実ではないが、その間隔により合計８ヶ所あったものと思われる。さらに上側の横走沈線と、前述の逆方向の斜沈線との交点にボタン状の貼付けを行い、渦巻き型の囲繞帯が施文され、それにより生じた隆起部分に斜めの刺突列を充填している。胴下部文様帯には粘土紐が貼り付けられ、馬蹄型の囲繞帯が押圧されている。３は試掘調査出土の資料で、下半部は欠損しているが口縁部がやや短めの無文の小型の甕である。内外面とも丁寧に磨き込んでおり、内面の黒色処理は褐色状態である。発掘調査出土資料との接合関係はみられなかった。５～16は無文の甕の口縁部付近の破片である外面がハケメで、内面はミガキで調整されており、黒色処理はいずれも丹念に施されている。６～８、10、13には幅広で浅い沈線が施文され、９には細く深い沈線がみられた。６は溝状遺構出土の第26図－７と同一個体と思われる。第32図－17～27は文様をもつ甕の口縁部付近の破片である。口端部の確認された破片はやや内傾気味である。文様は横走沈線の上に矢羽根状刺突列が施文されるものが多いが、24、25は沈線のみである。さらに17、27には刺突列の下側に鋸歯文が展開しており、19では上側にみられる。18は下側に横走綾杉文が施文されている。28～57は胴部文様帯と胴下部文様帯の破片である。調整は外面がハケメで、内面はミガキであるものがほとんどであり、黒色処理も丹念に施されるものが多い。28、29は口縁部に近い破片で格子文が施文されており、同一個体片と思われる。28～43は鋸歯文の破片であり、２段で施文されているものが確認できる。44、45は胎土等から同一個体と思われるが、他に破片はなく全体の文様は把握できていない。現状で、多条の横走沈線に、短い数条の縦沈線や鋸歯文を重ねていることが確認できる。45は放射状に沈線を展開した文様と思われるが、この一点のみの出土であり、全体は確認できていない。47～52は同一個体片と思われる小型の甕であり、縦の綾杉文に短い横沈線を文様帯の中位に重ねており、胴下部文様帯には粘土紐を貼付け馬蹄形の囲繞帯を押圧している。53は繊弱な沈線による鋸歯文を数段施文していると思われるが、現状の破片の観察では２段である。54は文様帯を横走沈線で区画し、横走綾杉文を施文している。55～57は胴下部文様帯であり、斜刺突列がみられる。58～79は胴部片であり、外面をハケメ、内面はミガキで調整され、黒色処理は丹念に施されるものが多い。79～90は底部片である。全て平底であり、85には笹痕がみられた。

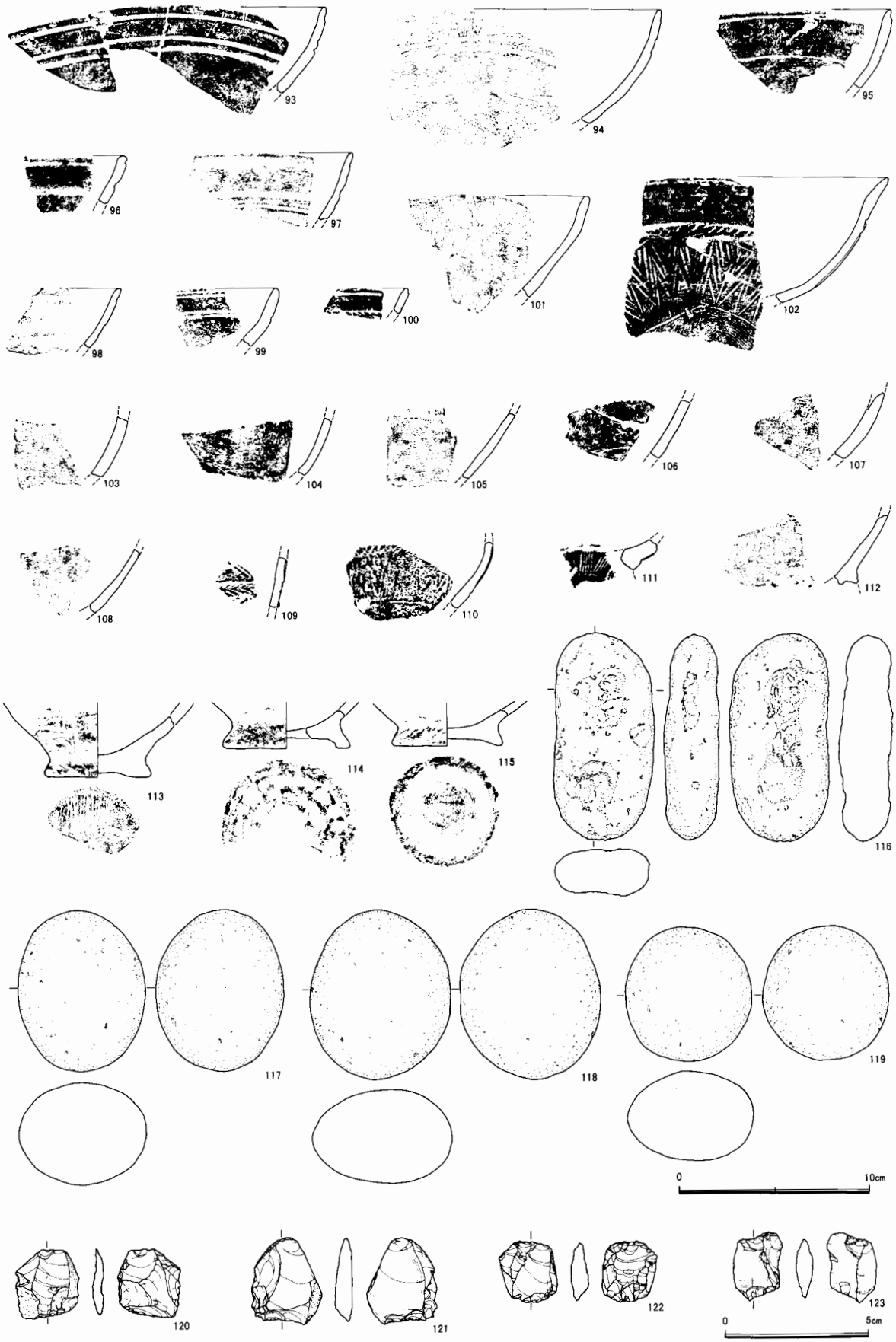


第31図　第１号土壙・発掘区出土遺物(1)（１：３）



第32図　発掘区出土遺物(2)（１：３）

第33図　発掘区出土遺物(3)（１：３）



第34図　発掘区出土遺物(4)（1：3、1：2）

第21表　発掘区出土土器属性表

挿図番号	個体番号	拓本番号	種類	部位	器面調整 外面	器面調整 内面	文様 口縁部	文様 胴部文様帯	文様 胴下部	底部形状	色調 外面	色調 内面	区名	層位	遺物番号	図版番号	備考
31-1	24		甕	口唇部 ～胴部	横ナデ 横ハケメ -横ミガキ 縦ハケメ -縦ミガキ	横ミガキ 横ハケメ -横ミガキ 黒色処理		段つきの 横走沈線			10YR6/2 灰黄褐	10YR5/2 灰黄褐	03-06	3 攪乱	1(1) (4)	21-1	
31-2	23		小甕	口唇部 ～胴部	横ナデ 縦ハケメ 一部 横ハケメ	横ミガキ 縦ミガキ 黒色処理	横走沈線3条 -重ねて矢羽根状刺突2列	横走沈線2条 -間斜行沈線3段ボタン状貼付 -囲繞帯押圧後斜刺突	貼付囲繞帯		10YR6/3 にぶい黄橙	10YR1.7/1 黒	02-07	2	17,18,19,20,21,22,23,25,26,27,28,29,30,31,32,33,34,35,36,37,38,39,40(41),42,43,44,45(1,2),46,47,48,49,50,51,52,53,54	21-2	
31-3	28		小甕	口唇部 ～胴部	横ナデ -横ミガキ 縦ハケメ -縦ミガキ	横ミガキ 縦ミガキ 黒色処理					10YR4/2 灰黄褐	10YR4/1 褐灰	試掘		(2)	21-3	
31-4	19		高台坏	口唇部 ～底部	横ハケメ -横ミガキ 縦ハケメ -横ミガキ	横ミガキ 縦ミガキ 黒色処理	横走沈線3条			笹痕	10YR6/4 にぶい黄橙	10YR1.7/1 黒	02-08	2 3 耕作土	1,6,7,8,9,10 153 (35)	21-4	
31-5	15		高坏	口唇部 ～底部	横ミガキ 縦ハケメ -横ハケメ -横ナデ	横ミガキ 黒色処理	横走沈線2条	横走沈線3条 -重ねて斜刺突 -格子文		側縁に横走沈線	10YR7/3 にぶい黄橙	10YR1.7/1 黒	01-07	2 攪乱	22,31,36,37,38,46,48,49,50,51,52,53,54,55,56,57,59,60,61,62,64,65,84,85,89,90,91 (5)	21-5	
31-6		13	甕	口唇部 ～胴部	横ナデ 縦ハケメ	横ミガキ 縦ミガキ 黒色処理		段つき 横走沈線			10YR4/6 褐	10YR4/1 褐灰	05-08	耕作土	(1)	24-13	
31-7	72	168	甕	口唇部 ～胴部	横ナデ 縦ハケメ	横ミガキ 黒色処理	横走沈線2条				10YR5/6 黄褐	10YR4/1 褐灰	04-08	3	7(1),10	24-14	
31-8	73	169	甕	口唇部 ～口縁部	横ナデ 縦ハケメ	横ミガキ 黒色処理	横走沈線2条				10YR5/6 黄褐	10YR4/1 褐灰	04-08	3	7(2),9	24-18	
31-9		148	甕	口唇部 ～口縁部	横ナデ 縦ハケメ	横ミガキ 黒色処理	横走沈線				10YR6/3 にぶい黄橙	10YR1.7/1 黒	05-08	耕作土	(2)	24-15	
31-10		171	甕	口唇部 ～口縁部	横ナデ 縦ハケメ	横ミガキ 黒色処理	横走沈線2条				10YR5/6 黄褐	10YR4/1 褐灰	03-08	攪乱	(3)	24-19	
31-11	50	48	甕	口唇部 ～胴部文様帯	横ナデ 縦ハケメ	横ミガキ 黒色処理					10YR5/3 にぶい黄褐	10YR1.7/1 黒	01-08	2	1，2	24-16	
31-12		170	甕	口唇部 ～口縁部	横ナデ 縦ハケメ	横ミガキ 黒色処理	横走沈線2条				10YR5/6 黄褐	10YR4/1 褐灰	03-09	2	25	24-20	
31-13		79	甕	口唇部 ～口縁部	横ナデ 縦ハケメ	横ミガキ 黒色処理	横走沈線4条				10YR3/3 暗褐	10YR1.7/1 黒	02-08	3	152	24-21	
31-14		150	甕	口縁部	横ハケメ 縦ハケメ	横ミガキ 黒色処理					10YR2/1 黒	10YR1.7/1 黒	06-08	2	2	24-17	
31-15		145	甕	胴部文様帯	縦ハケメ	横ミガキ		横走沈線 -斜刺突	横走沈線 -斜刺突		10YR1.7/1 黒	10YR6/4 にぶい黄橙	04-07	攪乱	(2)	24-22	
31-16		121	甕	胴部文様帯 ～胴部	縦ハケメ	横ミガキ 黒色処理					7.5YR4/4 褐	7.5YR1.7/1 黒	試掘		8	24-23	
32-18	54	53	甕	口唇部 ～口縁部	横ナデ	横ハケメ -横ナデ 黒色処理	横走沈線4条 -斜刺突5列	横走綾杉文			7.5YR4/6 褐	7.5YR2/1 黒	02-08	2	20,21	24-25	
32-19	55	63	甕	口唇部 ～口縁部	横ナデ	横ハケメ -横ミガキ 黒色処理	横走沈線5条 －斜刺突4列 鋸歯文				7.5YR4/4 褐	7.5YR3/1 黒褐	01-07	2	72,73	24-26	
32-20		61	甕	口唇部 ～口縁部	横ナデ	横ナデ 横ミガキ 黒色処理	横走沈線4条 －斜刺突3列				10YR6/2 灰黄褐	10YR1.7/1 黒	02-08	3	217	24-27	
32-21	57	77	甕	口唇部 ～口縁部	横ナデ	横ナデ 横ミガキ 黒色処理	横走沈線3条 －斜刺突3列				10YR6/6 明黄褐	10YR4/1 褐灰	05-07	3	7，8	24-28	
32-22		213	甕	口唇部 ～口縁部	横ナデ	横ミガキ 黒色処理	横走沈線4条 －斜刺突				10YR2/1 黒	10YR1.7/1 黒	未注記		1	24-29	
32-23		65	甕	口唇部 ～口縁部	横ハケメ -横ナデ	横ミガキ 黒色処理	横走沈線3条 －斜刺突2列				10YR5/2 灰黄褐	10YR4/1 褐灰	05-07	耕作	(7)	24-30	
32-24		19	甕	口唇部	横ナデ	横ナデ 黒色処理	横走沈線3条				10YR5/4 にぶい黄褐	10YR3/3 暗褐	02-08	2	24	24-31	
32-25		74	甕	口唇部 ～口縁部	横ナデ	横ナデ 黒色処理	横走沈線3条				10YR6/2 灰黄褐	10YR3/1 黒褐	03-09	2	22	24-32	
32-26		110	甕	口縁部 ～胴部	縦ハケメ	横ミガキ 黒色処理	横走沈線 -斜刺突	横走沈線 -鋸歯文			10YR5/4 にぶい黄褐	10YR1.7/1 黒	05-07	耕作土	(6)	24-33	
32-27	92	211	甕	口縁部	横ナデ	横ミガキ 黒色処理	横走沈線3条 －斜刺突間鋸歯文				10YR5/3 にぶい黄褐	10YR1.7/1 黒	04-08	2	340(1),341	24-34	
32-28		94	甕	口縁部	横ナデ	横ミガキ 黒色処理	横走沈線 -斜刺突	格子文			10YR6/3 にぶい黄橙	10YR4/2 灰黄褐	06-08	2	4	24-35	
32-29		84	甕	胴部文様帯	縦ハケメ	横ミガキ 黒色処理		格子文			10YR5/4 にぶい黄褐	10YR1.7/1 黒	05-08	3	9	24-36	
32-30		83	甕	胴部文様帯	縦ハケメ		斜刺突	鋸歯文			10YR5/3 にぶい黄褐		01-07	耕作土	(9)	24-37	
32-31		71	甕	口縁部 ～胴部文様帯	横ナデ	横ミガキ 黒色処理	横走沈線4条 -欠羽根状刺突	横走沈線 －鋸歯文			10YR6/3 にぶい黄橙	10YR1.7/1 黒	02-08	3	200	24-38	
32-32		72	甕	胴部文様帯	横ナデ 縦ハケメ	横ミガキ 黒色処理	横走沈線2条 -矢羽根状刺突	横走沈線 -鋸歯文 -側に斜刺突			10YR7/3 にぶい黄橙	10YR1.7/1 黒	03-09	2	5	24-39	
32-33		207	甕	胴部文様帯	縦ハケメ	横ミガキ 黒色処理		横走沈線 -鋸歯文2段			10YR8/4 浅黄橙	10YR7/2 にぶい黄橙	05-07	3	6	24-40	磨滅
32-34		208	甕	胴部文様帯	縦ハケメ	横ミガキ 黒色処理		横走沈線 -鋸歯文			10YR7/3 にぶい黄橙	10YR4/1 褐灰	05-08	耕作土	(3)	24-41	
32-35		104	甕	胴部文様帯	縦ハケメ	横ミガキ 黒色処理		横走沈線 -縦沈線 ・鋸歯文			10YR5/3 にぶい黄褐	10YR1.7/1 黒	03-09	2	17	21-42	
32-36		17	甕	胴部文様帯	縦ハケメ	横ミガキ 黒色処理		横走沈線 -鋸歯文			10YR4/3 にぶい黄褐	10YR1.7/1 黒	05-07	耕作土	(3)	24-43	
32-37		87	甕	胴部文様帯	縦ハケメ	横ミガキ 黒色処理		横走沈線 -鋸歯文			10YR6/3 にぶい黄橙	10YR1.7/1 黒	03-09	2	1	24-44	
32-38		106	甕	胴部文様帯	縦ハケメ	横ミガキ 黒色処理		横走沈線 -鋸歯文			10YR5/3 にぶい黄褐	10YR1.7/1 黒	05-08	2	6	24-45	
32-39		88	甕	胴部文様帯	縦ハケメ	横ミガキ 黒色処理		横走沈線 -鋸歯文			10YR5/4 にぶい黄褐	10YR1.7/1 黒	02-08	3	197	24-46	

挿図番号	個体番号	拓本番号	種類	部位	器面調整 外面	器面調整 内面	文様 口縁部	文様 胴部文様帯	文様 胴下部	底部形状	色調 外面	色調 内面	区名	層位	遺物番号	図版番号	備考
32-40		111	甕	胴部文様帯	縦ハケメ	横ミガキ 黒色処理		横走沈線 -鋸歯文2段			10YR2/1 黒	10YR4/1 褐灰	04-06	2	2	24-47	
32-41		95	甕	胴部文様帯	縦ハケメ 横ミガキ	横ミガキ 黒色処理		横走沈線 -鋸歯文			10YR3/2 黒褐	10YR2/1 黒	03-08	耕作土	(1)	24-48	
32-42		85	甕	胴部文様帯 ～胴部	縦ハケメ	横ミガキ 黒色処理		横走沈線 -鋸歯文	横走沈線 -斜刺突		10YR4/2 灰黄褐	10YR1.7/1 黒	05-08	3	8	24-49	
32-43		82	甕	胴部文様帯 ～胴部	斜ハケメ	縦ミガキ 黒色処理		横走沈線 -鋸歯文	横走沈線 -斜刺突		10YR4/3 にぶい黄褐	10YR5/2 灰黄褐	01-07	2	47	24-50	
32-44		90	甕	胴部文様帯	縦ハケメ	横ミガキ 黒色処理		横走沈線 -縦沈線			7.5YR1.7/1 黒	7.5YR1.7/1 黒	04-06	耕作土	(10)	24-51	
32-45		92	甕	胴部文様帯	縦ハケメ	横ミガキ 黒色処理		横走沈線 -縦沈線			7.5YR1.7/1 黒	7.5YR1.7/1 黒	試掘		(2)	24-52	
32-46		100	甕	胴部文様帯	縦ハケメ	横ミガキ 黒色処理		横走沈線 -間に鋸歯文			10YR4/3 にぶい黄褐	10YR1.7/1 黒	01-07	耕作土	(13)	24-53	
32-47	60	105	甕	胴部文様帯 ～胴部	縦ハケメ	横ミガキ 縦ミガキ 黒色処理		縦沈線区画 綾杉文 -横走沈線			10YR3/3 暗褐	10YR1.7/1 黒	01-07	2 耕作土	70 (15)	24-54	
32-48		97	甕	胴部文様帯 ～胴部	縦ハケメ	縦ハケメ -縦ミガキ -黒色処理		綾杉文			10YR3/2 黒褐	10YR3/1 黒褐	01-07	2	39	24-55	
32-49		99	甕	胴部文様帯	縦ハケメ	横ミガキ 黒色処理		綾杉文 -横走沈線			10YR3/2 黒褐	10YR1.7/1 黒	01-07	耕作土	(12)	24-56	
32-50	69	155	甕	胴部文様帯 ～胴部	縦ハケメ	横ミガキ 縦ミガキ 黒色処理		鋸歯文	貼付囲繞帯		7.5YR4/3 褐	7.5YR1.7/1 黒	01-07	2	77,78	24-57	
32-51		158	甕	胴下部文様帯 ～胴部	縦ハケメ	縦ミガキ 黒色処理			貼付囲繞帯		7.5YR4/6 褐	7.5YR1.7/1 黒	01-07	2	80	24-58	
32-52		151	甕	胴下部文様帯 ～胴部	縦ハケメ	横ミガキ 黒色処理			斜刺突		10YR5/3 にぶい黄褐	10YR1.7/1 黒	05-07	耕作土	(23)	24-59	
32-53	61	113	甕	胴部文様帯	縦ハケメ	縦ミガキ 黒色処理		鋸歯文			10YR3/2 黒褐	10YR1.7/1 黒	01-08	3	16,18	24-60	
32-54		116	甕	胴部文様帯 ～胴部	縦ハケメ	横ミガキ 縦ミガキ 黒色処理		横走綾杉文 -横走沈線	斜刺突		10YR4/2 灰黄褐	10YR1.7/1 黒	試掘		(3)	24-61	
32-55		153	甕	胴下部文様帯 ～胴部	縦ハケメ	縦ミガキ 黒色処理			斜刺突		10YR7/3 にぶい黄橙	2.5YR2/1 黒	01-08	2	70	24-62	
32-56		126	甕	胴下部文様帯	縦ハケメ	横ミガキ 縦ミガキ 黒色処理			横走沈線 -斜刺突		10YR6/2 灰黄褐	10YR5/2 灰黄褐	02-07	耕作土	(19)	24-63	
32-57		138	甕	胴下部文様帯 ～胴部	縦ハケメ	横ミガキ 黒色処理			斜刺突		10YR5/3 にぶい黄褐	7.5YR1.7/1 黒	04-08	3	2	24-64	
33-58	100	204	甕	胴部	縦ハケメ	横ナデ					10YR4/2 灰黄褐	10YR6/3 にぶい黄橙	01-07 試掘	2	7,98 (11)	24-65	
33-59	99	203	甕	胴部	縦ハケメ	横ナデ					10YR4/2 灰黄褐	10YR6/3 にぶい黄橙	01-07 試掘	2	75?,96,113,114 (10)	25-1	
33-60	83	187	甕	胴部	縦ハケメ	横ハケメ -横ミガキ 黒色処理					10YR8/2 灰白	10YR3/1 黒褐	03-06	3 攪乱	1(5) (8)	25-2	
33-61	82	186	甕	胴部	縦ハケメ	横ハケメ -横ミガキ 黒色処理					10YR8/2 灰白	10YR3/1 黒褐	03-06	3 攪乱	1(4) (7)	25-3	
33-62		117	甕	胴部	縦ハケメ	縦ミガキ 黒色処理					10YR4/6 褐	10YR1.7/1 黒	試掘		(4)	25-4	
33-63		128	甕	胴部	縦ハケメ	横ミガキ -横ナデ 黒色処理					10YR5/3 にぶい黄褐	10YR4/1 褐灰	03-09	2	23	25-5	
33-64	85	189	甕	胴部	縦ハケメ	横ハケメ -横ミガキ 黒色処理					10YR8/2 灰白	10YR3/1 黒褐	03-06	3 攪乱	1(7) (10)	25-6	
33-65	80	184	甕	胴部	縦ハケメ	横ハケメ -横ミガキ 黒色処理					10YR8/2 灰白	10YR3/1 黒褐	03-06	3 攪乱	1(2) (5)	25-7	
33-66		119	甕	胴部	縦ハケメ	縦ミガキ 黒色処理					7.5YR5/4 にぶい褐	7.5YR1.7/1 黒	試掘		(6)	25-66	
33-67		118	甕	胴部	縦ハケメ	縦ミガキ 黒色処理					10YR4/4 褐	7.5YR1.7/1 黒	試掘		(5)	25-9	
33-68		157	甕	胴部	横ナデ	縦ハケメ -縦ミガキ 黒色処理					10YR5/3 にぶい黄褐	10YR1.7/1 黒	01-07	2	67	25-10	
33-69		136	甕	胴部	斜ハケメ	縦ミガキ 黒色処理					10YR5/3 にぶい黄褐	10YR5/1 褐灰	04-08	耕作土	(21)	25-11	
33-70		124	甕	胴部	縦ハケメ	横ミガキ 黒色処理					10YR5/2 灰黄褐	10YR1.7/1 黒	02-09	2	30	25-12	
33-71		156	甕	胴部	縦ハケメ	縦ミガキ 黒色処理					7.5YR5/3 にぶい褐	7.5YR1.7/1 黒	01-07	2	2(2)	25-13	
33-72		137	甕	胴部	縦ハケメ	縦ミガキ 黒色処理					10YR2/1 黒	10YR5/1 褐灰	04-07	3	1	25-14	
33-73		132	甕	胴部	縦ハケメ	縦ミガキ 黒色処理					10YR3/2 黒褐	10YR1.7/1 黒	04-08	3	3	25-15	
33-74		120	甕	胴部	縦ハケメ	縦ミガキ 黒色処理					7.5YR4/4 褐	7.5YR1.7/1 黒	試掘		(7)	25-16	
33-75	86	190	甕	胴部	縦ハケメ	横ハケメ -横ミガキ 黒色処理					10YR8/2 灰白	10YR3/1 黒褐	03-06	3 攪乱	1(8) (11)	25-17	
33-76		192	甕	胴部	縦ハケメ	横ハケメ -横ミガキ 黒色処理					10YR8/2 灰白	10YR3/1 黒褐	03-06	攪乱	(13)	25-18	
33-77		123	甕	胴部	斜ハケメ	斜ミガキ 黒色処理					10YR3/2 黒褐	10YR1.7/1 黒	02-08	3	154	25-19	
33-78		101	甕	胴部	縦ハケメ	縦ミガキ 黒色処理					10YR3/2 黒褐	10YR2/1 黒	02-07	耕作土	(14)	25-20	
33-79		41	甕	底部	横ナデ	横ナデ 黒色処理					10YR6/3 にぶい黄橙	10YR2/1 黒	01-08	2	42	25-21	
33-80		161	甕	胴部	横ハケメ -横ナデ	縦ミガキ 黒色処理					10YR5/3 にぶい黄褐	10YR4/1 褐灰	01-07	耕作土	(25)	25-22	
33-81		122	甕	胴部	横ナデ	縦ミガキ 黒色処理					5YR5/4 にぶい赤褐	10YR4/4 褐	02-08	2	64	25-23	
33-82		42	甕	底部	横ハケメ -横ナデ	横ハケメ -横ナデ 黒色処理					10YR5/3 にぶい黄褐	10YR1.7/1 黒	試掘		(1)	25-24	

挿図番号	個体番号	拓本番号	種類	部位	器面調整 外面	器面調整 内面	文様 口縁部	文様 胴部文様帯	文様 胴下部	底部形状	色調 外面	色調 内面	区名	層位	遺物番号	図版番号	備考
33-83	84	188	甕	胴部	縦ハケメ	横ハケメ -横ミガキ 黒色処理					10YR8/2 灰白	10YR3/1 黒褐	03-06	3 攪乱	1(6) (9)	25-25	
33-84	46	38	甕	底部	縦ハケメ	横ナデ				擦痕	10YR6/3 にぶい黄褐	7.5YR6/4 にぶい橙	03-09	2	28,29,30	25-26	磨滅
33-85	47	39	甕	底部	縦ハケメ	横ハケメ -横ナデ				笹痕	10YR6/2 灰黄褐	10YR7/4 にぶい黄橙	04-08	2	146,155	25-27	
33-86		37	甕	底部	縦ハケメ	縦ミガキ 黒色処理				擦痕	10YR6/2 灰黄褐	10YR1.7/1 黒	05-07	耕作土	(6)	25-28	
33-87		34	甕	底部	縦ハケメ	横ハケメ 黒色処理				擦痕	10YR3/4 暗褐	10YR1.7/1 黒	05-08	耕作土	(5)	25-29	
33-88		27	甕	底部	横ナデ	横ナデ 黒色処理				擦痕	10YR7/3 にぶい黄橙	10YR5/1 褐灰	01-07	2	35	25-30	
33-89	44	33	甕	底部	縦ハケメ	縦ミガキ -横ナデ 黒色処理				擦痕	10YR5/3 にぶい黄褐	10YR1.7/1 黒	01-07	2	107,108	25-31	
33-90		183	甕	底部	縦ハケメ -横ナデ					笹痕	10YR7/2 にぶい黄橙		03-06	攪乱	(4)	25-32	磨滅
33-91		254	須恵器甕	胴部	平行タタキ	ナデ					5Y5/1 灰	5Y5/1 灰	04-08	攪乱	(8)	25-33	断面の色調2.5Y6/1黄灰
33-92		252	須恵器甕	胴部	平行タタキ	鳥足状 オサエ					2.5Y5/1 黄灰	2.5Y5/1 黄灰	03-08	攪乱	(7)	25-34	断面の色調2.5Y5/1黄灰
34-93		163	坏	口縁部 ～体部	横ナデ -縦ハケメ -横ミガキ	横ナデ -横ミガキ 黒色処理	横走沈線3条				10YR7/3 にぶい黄橙	10YR5/2 灰黄褐	02-07	耕作土	(7)	25-35	
34-94		165	坏	口唇部 ～体部	横ナデ 斜ハケメ -横ナデ	横ナデ 斜ミガキ 縦ミガキ	横走沈線3条				10YR6/3 にぶい黄橙	10YR7/1 灰白	02-07	耕作土	(8)	25-36	
34-95	88	196	坏	口唇部 ～体部	横ナデ 横ミガキ	横ミガキ 縦ミガキ 黒色処理	横走沈線2条				10YR4/6 褐	10YR1.7/1 黒	04-08	3 耕作土	13 (9)	25-37	
34-96		66	坏	口唇部 ～体部	横ナデ	縦ミガキ 黒色処理	横走沈線2条				10YR6/4 にぶい黄橙	10YR1.7/1 黒	02-09	3	10	25-38	
34-97		164	坏	口唇部 ～体部	横ナデ 横ハケメ -横ミガキ	横ナデ 横ハケメ -横ミガキ 黒色処理	横走沈線3条				10YR5/2 灰黄褐	10YR1.7/1 黒	試掘		(9)	25-39	
34-98		73	坏	口唇部 ～体部	横ナデ	横ナデ	横走沈線3条				10YR7/2 にぶい黄橙	10YR7/1 灰白	01-07	耕作土	(8)	25-40	
34-99		55	坏	口唇部 ～体部	横ナデ	横ミガキ 縦ミガキ 黒色処理	横走沈線3条	横走沈線2条 -間鋸歯文			10YR5/2 灰黄褐	10YR1.7/1 黒	05-08	3	2	25-41	
34-100		199	坏	口唇部	横ミガキ	横ミガキ 黒色処理	横走沈線1条 -斜刺突				10YR1.7/1 黒	10YR1.7/1 黒	04-08	3	12	25-42	
34-101	42	26	坏	口唇部 ～体部	横ハケメ 縦ハケメ	横ナデ 横ミガキ 黒色処理					10YR7/3 にぶい黄橙	10YR5/2 灰黄褐	02-07 02-08	2 3	55,56 89	25-43	
34-102	49	47	高坏	口唇部 ～体部	横ナデ 横ハケメ	横ミガキ 黒色処理		斜刺突 鋸歯文			10YR2/3 黒褐	10YR1.7/1 黒	01-07	2	2(1),3,4	25-44	
34-103		159	坏	体部	縦ハケメ -横ナデ	縦ミガキ 黒色処理					7.5YR6/4 にぶい橙	10YR6/1 褐灰	01-07	2	32	25-45	
34-104		231	坏	体部	横ナデ	縦ミガキ 黒色処理					10YR6/3 にぶい黄橙	10YR4/1 褐灰	05-08	3	10	25-46	
34-105		125	坏	体部	横ナデ	横ミガキ 黒色処理					10YR6/4 にぶい黄橙	10YR1.7/1 黒	02-09	耕作土	(8)	25-47	
34-106	68	154	坏	体部	横ナデ	横ナデ 黒色処理					10YR6/2 灰黄褐	10YR5/1 褐灰	01-08	1c	38,39	25-48	
34-107		133	坏	体部	斜ハケメ	縦ミガキ 黒色処理					10YR7/3 にぶい黄橙	10YR1.7/1 黒	03-08	2	11	25-49	
34-108		162	坏	体部	横ナデ -縦ミガキ	縦ミガキ 黒色処理					10YR6/4 にぶい黄橙	2.5YR2/1 黒	01-07	耕作土	(6)	25-50	
34-109		112	坏	体部	横ナデ	横ミガキ 縦ミガキ 黒色処理		横走沈線 -斜行沈線	矢羽根状刺突		10YR2/3 黒褐	10YR2/2 黒褐	02-07	2	113(1)	25-51	
34-110		127	坏	体部	横ナデ?	横ナデ?		綾杉文			5YR6/4 にぶい橙	10YR8/1 灰白	02-08	2	40	25-52	磨滅
34-111		45	坏	底部	横ナデ	横ナデ 黒色処理		鋸歯文			10YR6/4 にぶい黄橙	10YR3/1 黒褐	02-07	2	3(1)	25-53	
34-112		32	坏	底部	縦ミガキ -横ナデ	縦ミガキ -横ナデ 黒色処理					10YR7/4 にぶい黄橙	10YR4/1 褐灰	01-07	耕作土	(4)	25-54	
34-113		30	坏	底部	横ナデ	横ナデ 黒色処理				揚げ底 笹痕	10YR7/3 にぶい黄橙	10YR1.7/1 黒	04-08	攪乱	(1)	25-55	
34-114	45	35	高坏	底部	縦ハケメ -横ハケメ	横ナデ 黒色処理				揚げ底	10YR6/4 にぶい黄橙	10YR4/1 褐灰	02-06	3	1,2,3	25-56	朱塗り
34-115		36	坏	底部	縦ハケメ -横ナデ	縦ミガキ 黒色処理				揚げ底	10YR6/4 にぶい黄橙	10YR3/1 黒褐	03-08	2	10	25-57	

第31図－4、5は高台坏である。底部側縁が張り出し、口端部は内傾気味の器形である。4の外面はハケメ調整の後ハケメ痕をミガキ消しており、内面はミガキで調整され、褐色状態の黒色処理が施されている。口縁部付近には2条の横走沈線が巡っている底部には笹痕が確認された。5は底部側縁が張り出し、口端部がやや外反しており、文様帯の部分に湾曲部がみられる。外面調整は口縁部付近を横方向のミガキで、それ以下は横や縦方向のハケメで調整されており、一部ハケメ痕をナデ消している。内面はミガキ調整で、丹念な黒色処理が施される。口縁部や器高のほぼ中位、底部側縁に横走沈線が巡らされており、さらに中位部分には斜沈線を組み合わせて菱形にした文様が施文され、その上下に刺突列が展開している。底面が欠損して不明瞭であるが、揚げ底であると思われる。第34図－93～102は坏の口縁部付近の破片である。外面をハケメで、内面をミガキで調整し、黒色処理は丹念

に施されているのがほとんどである。93～99までは口縁部に横走沈線が巡っており、口端部はやや内傾気味である。100、102は同一個体であり、同様の横走沈線の直下に斜刺突列がみられ、その下に縦の綾杉文が施文される。101は無文であり、口縁部付近でやや立ち気味に成形される。103～110は坏の体部片である。文様をもつのは109、110であり、前者は横走沈線の上下に斜沈線がみられ、後者は縦の綾杉文と思われるが磨滅が著しく、判別は困難である。112、113は坏の底部付近の破片であり、前者には繊弱な沈線文が縦に引き込まれている。113～115は坏の底部の破片であり、全点揚げ底である。113には笹痕がみられ、114には成形の際の指頭の跡が確認された。

須恵器　第33図91、92は須恵器の甕の胴部片である。前者は外面に並行タタキの跡がみられるが内面に当て具痕の跡はみられない。色調は内外面とも黄灰色（Hue 2.5Y 5/1）であり、断面についても同様である。後者も外面に並行タタキの跡がみられ、内面には鳥足状の当て具痕がみられた。色調は内外面とも黄灰色（Hue 2.5Y 6/1）であり、断面についても同様である。

石器　第33図116は04－08区溝状遺構のテラス部分付近の2層から出土した敲石・凹石である。下端部に敲打痕がみられる他、両面に凹みがみられる。117、118は02－07区の窪み状の落込みの2層から、119は04－08区溝状遺構のテラス部分付近から出土した円礫であり、表面の最頂部の平滑さを見る限り、磨石として用いられた可能性もある。120～123は黒曜石のピエス・エスキーユである。両極剝離の痕がみられる。

接合状況

本遺跡における接合状況は、HP－3とその南側の落ち込みや溝状遺構のテラス部分などの遺物の出土が集中したところで、一括的な接合を示すものも見られたが、他の遺構や包含層との接合関係を示すものも多数見られた。以下、後者の接合関係について述べる。

HP－1においては、覆土Ⅴ層で出土した坏の底部片が北東側の落ち込みの2層中から出土した底部片と接合している。

HP－2においては、覆土Ⅷ層で出土した甕の胴部文様帯片が溝状遺構のテラス部分の1c層中から出土した底部片と接合している。

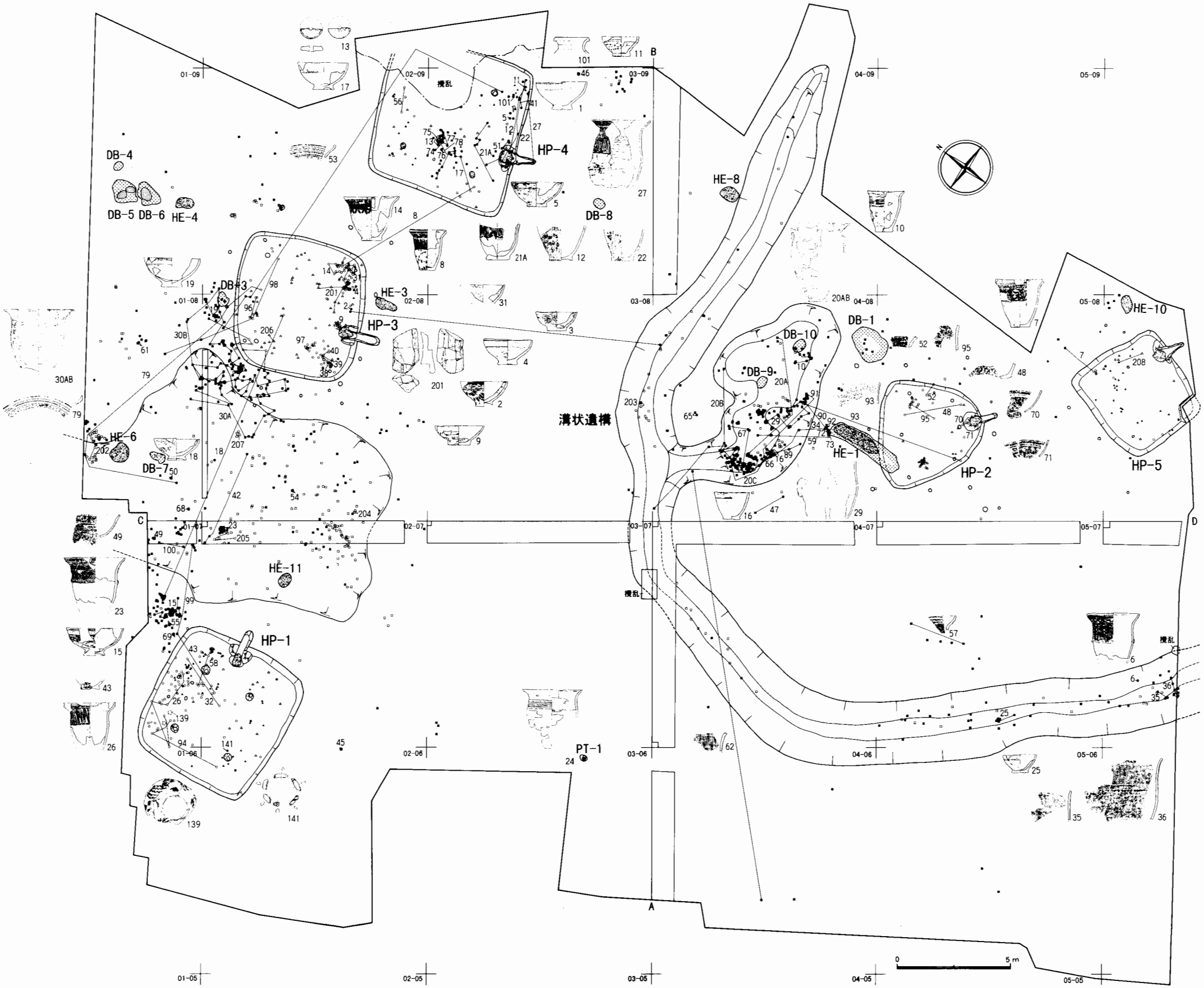
HP－3においては、覆土Ⅱ層で出土した甕の破片は北西側落ち込み2層やHP－4の覆土Ⅳ層の出土土器と接合がみられ、覆土Ⅳ層で出土した甕の胴部片が北西側の落ち込みの3層を主体に出土している胴部片と接合している。他にかまどに向かって左側で一括的に床面で出土した坏が溝状遺構2層出土土器と接合関係がある。

HP－4は、すでに述べたHP－3との接合関係があるのみである。

HP－5は、覆土上層出土土器が北西側隅で包含層2層出土土器と接合している。

溝状遺構では、すでに述べた接合関係の他に、テラス部分付近で2層から出土した甕が、04－08区の包含層2層出土の土器片と接合しており、今回の調査では最長の接合距離、約20mを示した。

今回の接合関係は、単純に土器片と土器片との接合の記載であり、それが当時の生活の動きを反映しているとは限らない。その上、今回の発掘区は畑作による耕作で包含層が削平されており、遺構の掘り込み面は不明確な部分が多く、遺構群の新旧関係は不確実なままになっていた。ただし、この点に関しては接合関係と層位関係を見る限り、HP－3が包含層3層遺物との接合が多く、HP－1が包含層2層遺物との接合関係が見られたことから、HP－1はより新しく構築された可能性を指摘することが出来、HP－3の床面遺物と溝状遺構の覆土遺物には接合関係があり、HP－3は溝状遺構と併存したか、もしくは相前後した時期に構築された可能性が指摘出来よう。



第35図　遺物接合図（1：180）

第5章　分　　析

第1節　K36遺跡タカノ地点出土動物遺存体

富岡直人

札幌市K36遺跡タカノ地点において、実施された平成8(1996)年の調査により、11から13世紀にわたる擦文時代後期から晩期に属する動物遺存体が検出された。

(1)　出土状況

札幌市埋蔵文化財センターより、発掘の際に目視で焼骨が確認された焼土層、灰層、炭化物層の土壌をフローテーション装置(0.42～1.00mm金属フルイ使用)で処理した資料をさらに選別し、得られた動物遺存体資料を分析対象に提供頂いた。

すべての資料は火を受けて白色、あるいは黒色に変色し、激しく収縮して変形・亀裂を生じていた。

竪穴住居のカマドや住居内の焼土、炭化物集中、焼土遺構、溝状遺構からサケ科魚類を中心とした遺存体が検出された。

(2)　出土動物遺存体の概要

第22表　K36遺跡タカノ地点出土動物遺存体種名表

List of animal remains from the Locality T, K36 site

軟体動物門	**MOLLUSCA**
脊椎動物門	**VERTEBRATA**
硬骨魚網	Osteichthyes
サケ科	Salmonidae sp. indet.
サケ属	*Oncorhynchus*
イワナ属	*Salvelinus*
哺乳網	**MAMMALIA**

軟体動物門（第24表）

今まで札幌市で調査されてきた同種のサンプリング法に基づく分析では、概ね軟体動物の出土量は少ないが、K36遺跡タカノ地点のHP－1カマド2層からは網不明の微少な破片が1点（1.02g）検出された。網以下の分類は不可能であった。

サケ科　サケ属・イワナ属（第23表）

出土したサケ科は、現在の北海道に生息するアメマス（イワナ属）、オショロコマ（イワナ属）、サクラマス（サケ属）、カラフトマス（サケ属）、サケ（サケ属）、ギンザケ（サケ属）、マスノスケ（サケ属）、ヒメマス（サケ属）、イトウ（イトウ属）の部位骨である可能性が高い。

犬歯状歯や担鰭骨は属レヴェルでの同定は困難であり、サケ科として一括集計した。

椎骨は、イワナ属とサケ属では特徴が類似しており、一括し集計した。この際に椎骨の特徴が明確なイトウ属は一切検出されなかった。

椎骨は完全な形で検出されているものは殆どないため、腹椎と尾椎の分類は困難で、一括集計した。

イワナ属・サケ属に分類した椎骨のほとんどは、体長50cm～1m近くなる大形の固体に由来するものと考えられる。これらは降海型サクラマス、カラフトマス、サケ、ギンザケ、マスノスケ、ヒメマスである可能性が高い。また、体長30cm程度の小形のイワナ属・サケ属の椎骨と考えられるものが少数検出されており、これらは降海型・河川型アメマスや比較的小さいヤマメタイプの河川型サクラマス、オショロコマなどの椎骨と考えられる。

頭部骨などの部位骨はイワナ属とサケ属で類似しており破片資料の分類は困難であり、一括して集計した。

生態と漁獲方法　本遺跡の立地から、大形のサケ科を対象とした漁は、遺跡付近の旧琴似川流域から河口部で行われていたと考えられる。主漁期はこれらのサケ科が河川生活を送る時期と考えられる。

北海道では降海型のサクラマスの親魚は5～7月に河川に遡上し、8月下旬から10月に産卵する(市川1977)。降海型のアメマスは8～9月頃河川に遡上し10～11月に産卵する(酒井1986)。サケは大河川では夏期遡上郡と秋期遡上郡があるが小河川では秋にのみ遡上する(益田他1984)。カラフトマスは夏に遡上し秋に産卵し、ギンザケは秋から冬に遡上し産卵する(益田他1984)。ヒメマスは初夏から秋に遡上し秋から冬に産卵する(益田他1984)。マスノスケは沿岸で捕獲されることは多いが、遡上することは稀であり(益田他1984)資料中に含まれる率は低いと考えられる。この内、秋から初冬にかけて遡上するサケ科が量的に多く、漁獲対象の中心であったと考えられる。

小形のサケ科は陸封型で周年捕獲が可能な個体であったと考えられるが、本資料中からは検出されなかった。

出土状況　椎骨の全ては破片になっている。この原因は、①調理・摂食段階での破損、②摂餌後埋存保存での破損、が考えられる。サケ科の椎骨を食用とする場合、意図的に砕かれたり、強く煮て脆弱化することがあり、①の可能性は十分考えられる。また、出土資料は特に強く火を受けており、摂餌に適さないほど無機質化していることから、調理・摂餌の段階で火を受けたものならば失敗品であると考えられる。

大形のサケ科は漁期が季節的に集中する事から、これを一時期のみならず長期間有効に利用するには、保存食料に加工することが必要である。北海道に残る民俗例でも多くの加工保存技術が知られている。サケ科の食料としての保存処理方法としては、①魚肉の水分を減らしたり薫製にして腐りを防ぐ乾燥保存の方法、②塩漬けにする方法、③発酵食品にする方法、④冬季に冷凍して保存する方法、が考えられる。このような保存食料は収穫物が少ない季節に生活を維持するために重要な役割を果たしたことが推定される。

特にK36遺跡タカノ地点で検出された、焼土や炭化物を多く含む遺構は盛んに火を焚いた結果生じ、その中に遺存体が残されたことから、①の乾燥保存の方法が採られた可能性が支持される。これはほぼ同時期のK39遺跡長谷工地点や擦文時代前期から中期のH317遺跡などでの様相と酷似しており、広く札幌周辺で行われたサケ科魚類処理の特徴といえよう。

哺乳類（第24表）

小形の哺乳類に由来すると考えられる部位骨の破片と個体の大きさの不明な骨格破片が検出された。小形哺乳類は、イヌ化のエゾタヌキやウサギ科、ネズミ科、イタチ科のエゾオコジョ、コエゾイタチ、エゾクロテンなどの個体が推定される。これらは、食用や毛皮への利用が考えられる。

(3) K 36遺跡タカノ地点における狩猟・漁撈活動

擦文時代のK 36遺跡タカノ地点集落では、旧琴似川流域を利用し、サケ科魚類を対象とした漁撈活動が盛んであった。サケ科の食料資源は極めて高かったといえる。出土した大形のサケ科の捕獲には、刺突漁や網漁、罠漁が行われたと考えられる。

同じく札幌市のH 317遺跡(擦文時代前～中期)やK 39遺跡長谷工地点(擦文時代・晩期)、K 39遺跡大木地点(擦文時代晩期)では、擦文時代のそれぞれの遺構からニシンやウグイ属、イトヨが検出され、特に擦文時代にはニシン漁が盛んになることが推定されたが(富岡 1995)、K 36遺跡タカノ地点の場合、サケ科以外の魚類の魚撈、消費がうかがわれなかった。これは、サケ科漁撈が主体であったというばかりではなく、今回の分析資料が少数だったことも大きく影響していると考えられる。

また本遺跡からは小形哺乳類が出土した。残念ながら、種の特徴が不明確な部位ばかりで詳細な同定が困難であったが、食用や毛皮用として利用されたのであろう。

【謝　辞】

札幌市埋蔵文化財センター加藤邦雄氏、上野秀一氏、羽賀憲二氏、仙庭伸久氏、藤井誠二氏、秋山洋司氏、出穂雅実氏には資料の提供とともに様々な御援助を頂いた。また、分析にあたっては、種市和嘉子さん、宮浦まゆみさん、高橋雅子さんの多大なる協力を得た。資料同定に際しては札幌市豊平川さけ科学館館長金田寿夫氏、研究員高山肇氏に比較標本の提供と御助言を頂いた。

さらに東北大学文学部須藤隆先生には様々なご指導を頂き、東北大学文学部大学院氷見淳哉氏には同定にご協力頂いた。記して感謝の意を表します。

【参考文献】

加藤暁生　1985 「前田耕地遺跡出土の魚類顎歯について」『東京の遺跡』 7 ： pp 84－85

金子浩昌　1987 「Ⅳ動植物遺存体　第1章K 135遺跡の脊椎動物遺存体」『K 135遺跡4丁目地点、5丁目地点』札幌市文化財調査報告書XXX (札幌市教育委員会)

金子浩昌　1992 「第5章　動植物遺存体　第1節N 426遺跡出土の動物遺存体」『N 426遺跡』札幌市文化財調査報告書XLⅠ (札幌市教育委員会)

金子浩昌　1989 「第4章　動植物遺存体　第1節K 441遺跡北33条地点出土の脊椎動物遺体」『K 441遺跡北33条地点　N 12遺跡』札幌市文化財調査報告書XXXⅥ (札幌市教育委員会)

金子浩昌　1989 「第6章　動植物遺存体　第1節K 441遺跡北34条地点出土の脊椎動物遺体」『K 441遺跡北34条地点』札幌市文化財調査報告書XXXⅦ (札幌市教育委員会)

金子浩昌　1993 「Ⅴ　動植物遺存体　第1章北海道札幌市K 435遺跡検出の魚・鳥・獣類遺体」『K 435遺跡』札幌市文化財調査報告書XLⅡ (札幌市教育委員会)

高山　肇　1992 「イトヨの採集と飼育の方法」『札幌市豊平川サケ科学館報』 3・4合併号： pp 72－79

富岡直人　1995 「H 317遺跡出土動物遺存体および鹿角製尖頭器について」『H 317遺跡』(札幌市教育委員会：札幌市文化財調査報告書46)： pp 215－237

渡辺忠重、奥谷喬司　1983 『学研生物図鑑　貝Ⅱ』(学習研究社)

長沢和也、鳥澤　雅　1991 『漁業生物図鑑　北のさかなたち』(北日本海洋センター)

益田　一、尼岡邦夫、荒賀忠一、上野輝彌、吉野哲夫　1984 『日本産魚類大図鑑』(東海大学出版会)

渡邊直経　1950 「遺跡における骨類の保存」『人類学雑誌』62－1 ： pp 17－24

Norden, C. 1961 "Comparative Osteology of Representative Salmonid Fishes, with Particular Reference to the Grayling (Thymallus arcticus) and its Phylogeny" *Journal of Fish* 18–5 : pp 679–791

Ryder, M. L. 1969 "Remains of Fishes and other Aquatic Animals" *Science in Archaelogy* (second edition)" : pp 376–394

第23表　魚類遺存体層位別出土量

		魚類 Pisces																								
		サケ科 Salmonidae																				その他 Others				魚類重量合計 (g)
		イワナ属・サケ属 Salvelinus/Huncho・犬歯状歯 Canine-like teeth												椎骨 Vertebra			部位骨 Ap. skeleton									
遺構・ブロック	層位 Layer	A		B		C1		C2		D2		不明(?)		状態 condition	点数 N	重量 (g)	部位名 Part	L/R	点数 N	重量 (g)	種名 Name	部位名 Part	点数 N	重量 (g)	
		点数 N	重量 (g)	点数 N	重量 (g)	点数 N	重量 (g)	点数 N	重量 (g)	点数 N	重量 (g)	点数 N	重量 (g)													
HP-1 カマド	2層	2	0.04									–	0.35	破片 fr	–	2.95	担鰭骨 Pg	?	7	0.03	不明 Indet.	軟条 Soft fin b.	–	0.04	6.26
																	不明 Indet.	?	–	1.83	不明 Indet.	不明 Indet.	–	1.02	
HP-1 HE-5	2層	3	0.05	2	0.03	5	0.03	5	0.03	1	0.01>	1	0.01>	破片 fr	–	0.80	担鰭骨 Pg	?	1	0.01	不明 Indet.	棘 Spine	–	0.02	1.69
												–	0.25				不明 Indet.	?	1	0.27	不明 Indet.	不明 Indet.	–	0.18	
HP-1 DB-11	2層													破片 fr	–	0.01>									0.01
HP-1 DB-12	2層											–	0.10	尾椎 Cv	1	0.01>	担鰭骨 Pg	?	–	0.03	不明 Indet.	軟条 Soft fin b.	–	0.06	3.77
														破片 fr	–	1.86	不明 Indet.	?	–	1.12	不明 Indet.	不明 Indet.	–	0.59	
HP-1 DB-13	2層					1	0.01>					–	0.01	破片 fr	–	0.04	担鰭骨 Pg	?	1	0.01>	不明 Indet.	不明 Indet.	–	0.01	0.09
																	不明 Indet.	?	1	0.01					
HP-1 C-3	2層																不明 Indet.	?	–	0.01					0.01
HP-2 カマド	2層													破片 fr	–	0.08	不明 Indet.	?	–	0.01	不明 Indet.	不明 Indet.	–	0.02	0.11
HP-3 カマド	3層											–	0.01>	破片 fr	–	0.43	担鰭骨 Pg	?	2	0.01	不明 Indet.	不明 Indet.	–	0.11	0.77
																	不明 Indet.	?	–	0.21					
HP-4 カマド	3層	1	0.01>			1	0.01>							破片 fr	–	0.39	不明 Indet.	?	–	0.12	不明 Indet.	不明 Indet.	–	0.12	0.65
HP-4 HE-9	3層	1	0.01			1	0.01>			2	0.01	–	0.02	破片 fr	–	0.01>	不明 Indet.	?	–	0.03					0.09
HP-4 DB-14	3層	1	0.03									–	0.07	破片 fr	–	0.03	不明 Indet.	?	–	0.01					0.14
溝状遺構 DB-9	2層													破片 fr	–	0.01>	不明 Indet.	?	–	0.01>	不明 Indet.	不明 Indet.	–	0.01>	0.13
溝状遺構 DB-10	2層													破片 fr	–	0.03	不明 Indet.	?	–	0.02	不明 Indet.	不明 Indet.	–	0.01>	0.06
04-09 HE-8	3層											–	0.05				不明 Indet.	?	–	0.03					0.08
06-08 HE-10	2層													破片 fr	–	0.01>									0.01
02-07 HE-11	2層											–	0.01>	破片 fr	–	0.27	顎骨破片 fr. of jaw b.	?	–	0.01	不明 Indet.	棘 Spine	–	0.02	0.48
																	不明 Indet.	?	–	0.11	不明 Indet.	不明 Indet.	–	0.06	
01-08 DB-7	2層											1	0.01>	破片 fr	–	0.01	不明 Indet.	?	–	0.01>					0.03

第24表　出土動物遺存体種名表

		軟体動物門 Mollusca				哺乳類 Mammalia					合計重量
遺構・ブロック	層位 Layer	種　名 Name	L/R	部分 Portion	重量（g）	種　名 Name	部位名 Part	L/R	部分 Portion	重量（g）	Total（g）
HP-1 カマド	2層	貝？ Sell？	－	？	0.04	小形哺乳類 Small size class	四肢骨 Limp	？	骨幹部	0.08	0.52
						不明 Indet.	破片 fr	？	－	0.40	
HP-1 DB-12	2層					小形哺乳類 Small size class	指骨 Phalanges	？	近位端 proximal	0.15	0.15

第２節　Ｋ36遺跡タカノ地点出土の炭化植物種子

吉崎昌一・椿坂恭代

遺跡の名称：札幌市Ｋ36遺跡タカノ地点
遺跡の位置：札幌市北23条西14丁目
発掘調査機関：札幌市埋蔵文化財センター
発掘担当者　：札幌市埋蔵文化財センター　秋山洋司
発掘調査期間：平成８年10月１日～平成８年11月15日
遺跡の性格：擦文時代の集落
遺跡の年代：擦文時代後期・晩期（西暦11世紀から13世紀）
検出遺構：竪穴住居址５軒、溝状遺構１基、土壙１基、焼土遺構・焼土粒範囲24基（竪穴、溝状遺構に伴うもの９基）

１　扱った資料

分析対象資料として扱った炭化種子は、調査者によれば擦文時代集落の各遺構から採取された土壌を、フローテーション法で処理され、その後第1次選別を経て送付されてきたものである。

これらの資料を実体顕微鏡並びに走査型電子顕微鏡で観察と撮影を行った。出土遺構と層準については第25表に示す。

２　出土した炭化種子（第25表、図版28）

検出された炭化種子はアサ、マメ科、ニワトコ属、ブドウ属、クルミ属、不明種子に分類された。

図版28－１ａ、１ｂ

アサ *Cannabis sativa* L. HP －４（HE －９）、（DB －14）から計12片出土している。いずれも破損しており、種皮表面の観察結果からアサ特有の組織が確認された。

図版28－２ａ、２ｂ

マメ科 LEGUMINOSAE HP －１（DB －17）から12粒出土している。種子の形態と種皮組織の観察結果から野生のマメ科種子に分類されるが、いずれも資料のダメージが大きく種類の特定は出来なかった。計測値　長さ2.4㎜、幅2.1㎜

図版28－３、28－４、28－５、28－６

28－３、ニワトコ属 *Sambucus* L. が HP －４（HE －９）、（DB －14）から215粒、溝状遺構から2粒、計217粒出土している。計測値　長さ2.0㎜、幅1.0㎜、厚さ0.5㎜。29－４、ブドウ属 *Vitis* L. が HP －４（DB －14）から1片出土している。29－５、クルミ属 *Juglans* L. の殻片が HP －１（DB －11）、（DB －13）と DB －７から計0.14ｇ出土している。29－６、不明種子が HP －１（DB －11）、（DB －17）から２粒出土している。現生の比較標本がなく同定出来なかったものである。計測値長さ2.1㎜、幅1.35㎜

３　まとめ

これまで道央地域の擦紋時代遺跡では、栽培植物種子が検出されるのが常であった。ところが今回の分析資料からは栽培植物種子が未検出である。この現象が、遺跡の保存状態によるものなのか、あ

るいは土壌のサンプルの部位に起因するのかは不明である。場合によっては、栽培植物種子そのものが存在しないケースも考えられるかもしれない。初期的な農耕が行われている場合には、集落によって生業のスタイルが全く異なることもあり得るだろう。

第25表　K36遺跡タカノ地点炭化種子集計表

遺構名	層位	出土区	アサ（片）	マメ科（粒）	ニワトコ属（粒）	ブドウ属（片）	クルミ属（粒）	不明（粒）
HP-1(DB-11)	2						0.08	1
HP-1(DB-13)	2						0.06	
HP-1(DB-17)	2			12				1
HP-4(HE-9)	3		1		101			
HP-4(DB-14)	3		11		114	1		
溝状遺構(DB-10)	2	04-08区			2			
DB-7	2	01-08区					<0.01	
合　計			12	12	217	1	0.14	2

追加報告

昭和61年度に調査されたK36遺跡の炭化植物種子の資料は、分析については完了していたが、諸事情のことから未報告となっていた。今回のK36遺跡タカノ地点の炭化植物種子の分析の際、お忙しい中、併せて資料の再検討も行って戴いた。記して感謝いたします。

分析結果は下表に示した。焼土1から栽培型のヒエ1粒とキビ3粒が出土している。栽培植物種子に関する情報は、タカノ地点と同様の結果と思われる。（秋山洋司）

第26表　K36遺跡（昭和61年度調査地点）炭化種子集計表

遺構名	層位	出土区	ヒエ（粒）	キビ（粒）	アカザ（粒）	同定不可（粒）	不明（粒）
HP-1(かまど焼土)						3	
HP-4(かまど焼土)							2
HP-4(中央炉跡)					1		1
HP-5(かまど焼土)						2	
焼土1		B－1区	1	3		4	
合　計			1	3	1	9	3

第３節　放射性炭素年代測定結果

古環境研究所

本遺跡から出土した炭化材の放射性炭素年代測定を、加速器質量分析（AMS 法）により測定していただける機会を得た。なお分析は㈱古環境研究所にお願いし、測定は米国のローレンス・リヴァーモア国立研究所（Lawrence Livermore National Lavoratory）において行われた。

１．資料と方法

Ｋ36遺跡タカノ地点放射性炭素年代測定用提出試料と方法

No.	地点	層位	試料の種類	前処理	調整	測定法
1	HP-1かまど	2層	炭化材	酸－アルカリ－酸洗浄	石墨調整	加速器質量分析（AMS）
2	溝状遺構	2層	炭化材	酸－アルカリ－酸洗浄	石墨調整	加速器質量分析（AMS）

２．測定結果

Ｋ36遺跡タカノ地点放射性炭素年代測定結果

No.	14C年代（年BP）	δ13C（‰）	補正14C年代（年BP）	暦年代
1	840±50	−27.8	800±50	交点 AD 1,250
				2σ AD 1,170 TO 1,290
				1σ AD 1,215 TO 1,275
2	1090±50	−26.5	1070±50	交点 AD 990
				2σ AD 885 TO 1,035
				1σ AD 960 TO 1,015

（2σ：95% probability, 1σ：68% probability）

１）^{14}C 年代測定値

試料の $^{14}C/^{12}C$ 比から、単純に現在（1,950年 AD）から何年前（BP）かを計算した値。^{14}C の半減期は5,568年を用いた。

２）$\delta^{13}C$ 測定値

試料の測定 $^{14}C/^{12}C$ 比を補正するための炭素安定同位体比（$^{13}C/^{12}C$）。この値は標準物質（PDB）の同位体比からの千分偏差（‰）で表す。

３）補正 ^{14}C 年代値

$\delta^{13}C$ 測定値から試料の炭素同位体分別を知り、$^{14}C/^{12}C$ の測定値に補正値を加えた上で算出した年代。

４）暦年代

過去の宇宙線強度の変動による大気中 ^{14}C 濃度の変動を補正することにより、暦年代（西暦）を算出した。補正には年代既知の樹木年齢の ^{14}C の詳細な測定値を使用した。ただし、この補正は10,000年 BP より古い試料には適用できない。

第４節　Ｋ36遺跡タカノ地点第１号竪穴住居跡床面出土漆器椀２点について

国立歴史民俗博物館　永嶋正春

１．はじめに

標記の遺跡から出土した２点の漆製品（No.138、No.139）について、製作技術的な検討を行った。加飾に使用された赤色漆中の赤色顔料の識別と、塗装材料、塗装工程などについての調査である。

まずは対象となる資料の細部について丹念に観察し、しかるべき部位から小さな漆試料片を採取した。それら試料については、蛍光Ｘ線分析を実施して赤色顔料を確定すると共に、塗装断面試料を作製して、塗装内容を追求した。

ここではそれらの調査結果について報告をするが、現時点における中間報告と理解していただければ幸いである。なお、資料の状況や層構成の様子が把握し易いよう、関係写真を添付したので参照されたい。

２．調査結果

調査結果を結論から言えば、次のようになる。

１．下地としては、２点とも、炭粉下地が用いられている。恐らく、炭粉渋地と思われる。

２．加飾に用いられている赤色漆は、ベンガラ漆である。

３．本体素地は、木胎と考えて良い。

４．炭素渋地の利用、赤色漆(ベンガラ漆)による文様表現などは、これら２点の漆器椀が13世紀あるいはそれ以降のものである可能性を強く示唆している。

ま と め

本遺跡は河川堆積物により形成された札幌扇状地内に位置しており、旧琴似川流域に分布する遺跡群の一つであった。検出された遺構は、竪穴住居跡５軒、溝状遺構１基、土壙１基、焼土関係遺構24基であり、出土した土器から概ね擦文時代後期・晩期の時期に相当するものと思われる。一方、昭和61年度の調査についてもほぼ同様の結果が報告されており、両地区は同時期に形成された遺跡であることが判明した。

竪穴住居跡は両地区併せて10軒検出され、煙道の方角をみると昭和61年度調査地点のＨＰ－１、２、５とタカノ地点のＨＰ－１が概ね東方向であり、昭和61年度調査地点のＨＰ－３、４とタカノ地点のＨＰ－２～５が概ね南方向であった。また溝状遺構に囲まれたタカノ地点のＨＰ－２、５は、溝外の竪穴より小規模である。なお共存関係は不明だが、タカノ地点のＨＰ－２、３、５の周辺から柱穴群が検出されている。

溝状遺構は調査区域外にも広がりを見せており全体を捉えたわけではないが、現状で見る限りは周溝状に展開し、途中にテラス部分が付帯していた。遺構内の底面やテラス部分からは多量の擦文期の遺物が出土している他、焼土関係遺構も確認されていることから、本遺跡形成に関わって構築された遺構であることは否めない。なお擦文期に相当する道内の溝状遺構の類例としては、尾白内２遺跡の空堀、原口館擬定地遺跡の空堀遺構、小茂内遺跡の環濠、青苗遺跡の山本台地投棄溝、蘭越遺跡の砦（チャシ）、ワシリチャシなどがあるが（名称は調査担当者の当時の記載に準じている）、機能等の問題も含め、同質のものといえるかは検討の余地が必要であろう。

焼土関係遺構は調査範囲内の様々な場所から検出されており、特に竪穴や溝状遺構の中や周辺から確認されることが多かった。ただし栽培種子に関してみると、昭和61年度に調査された焼土１から、ヒエ１粒、キビ３粒が確認されたに止まっている。直接分析にあたって戴いた吉崎・椿坂氏が指摘しているように、生業スタイルが異なるものとして今後注目すべき例となろう。

また接合関係と層位関係から、タカノ地点検出の遺構は時期的に細分できる可能性がある。発掘調査の段階ではタカノ地点のＨＰ－２～５、溝状遺構が３層上面、ＨＰ－１が２層中より検出されており、さらに前者のグループはＨＰ－２、５、溝状遺構とＨＰ－３、４の２つに分けられる可能性があり、土器型式からＨＰ－３、４が構築された後にＨＰ－２、５、溝状遺構が構築され、最後にＨＰ－１が構築された可能性が指摘できる。なお土壙については、出土土器が擦文前期のものであり、他の遺構とは異なる時期に構築されたものと思われる。

遺物は、遺構内や窪み状の落ち込みからの出土が多かったが、これは後世の畑地利用によって包含層の大半が、破壊されていたことが影響しているためであろう。なお、復元土器を見る限り、大型の甕はほとんど見られず、小型の甕や高台坏が多いという傾向がある。

最後にタカノ地点ＨＰ－１の床面から出土した漆製品、錫製環状装飾品についてであるが、次への課題とするべく３つの問題点を指摘したい。第１に少なくともこれらは海を渡ってこの地に持ち込まれていることである。第２にこれらは同一時期に廃棄された遺物であることである。第３にこれらの年代観の問題である。年代測定結果や漆の技術面における分析結果などから、13世紀代に廃棄された遺物であることが予想されてはいるが、類例の出土資料も少なかったことなどもあり結論を導くことなく、問題点の抽出と自然科学や分析科学の結果を報告することでまとめとさせていただく。機会があればこの問題を再考してみたい。

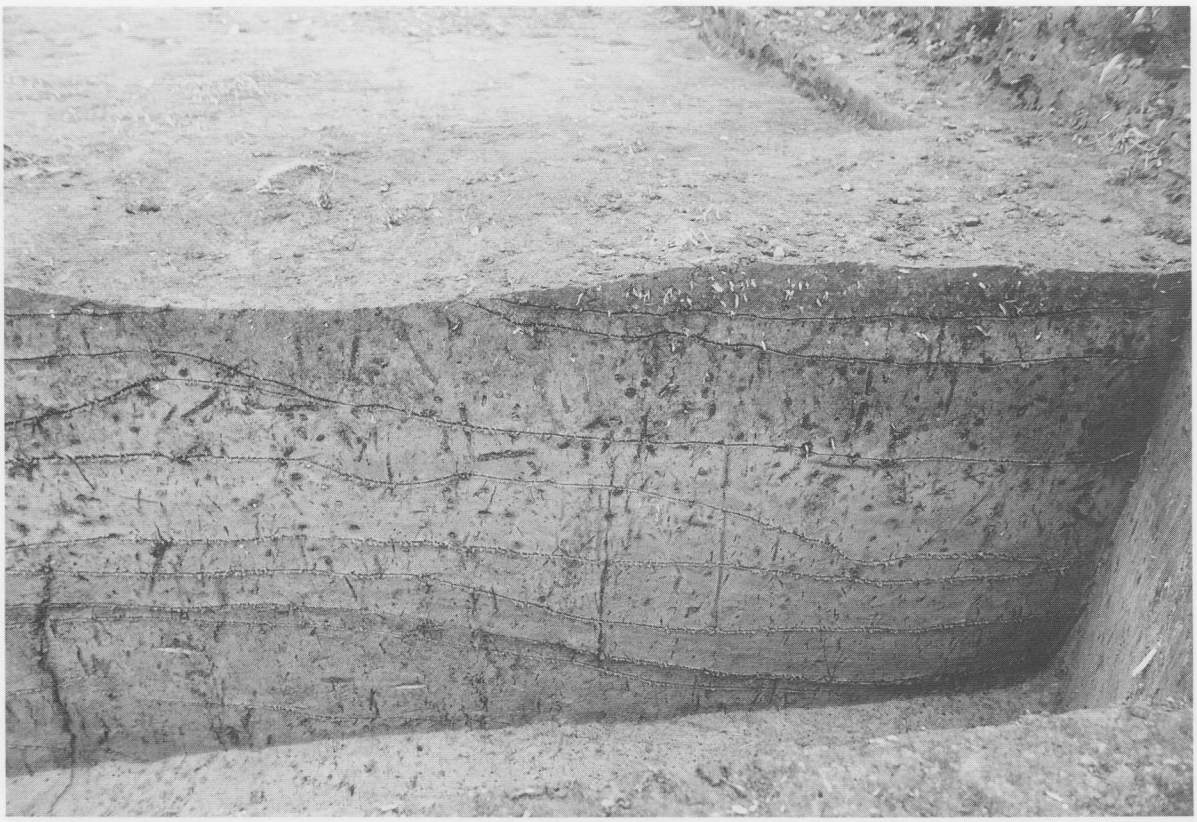
図　　版

A　発掘区遠景(1)（南より）

B　発掘区遠景(2)（北東より）

図版 2

A　発掘区セクション（北西壁）(1)（南東より）

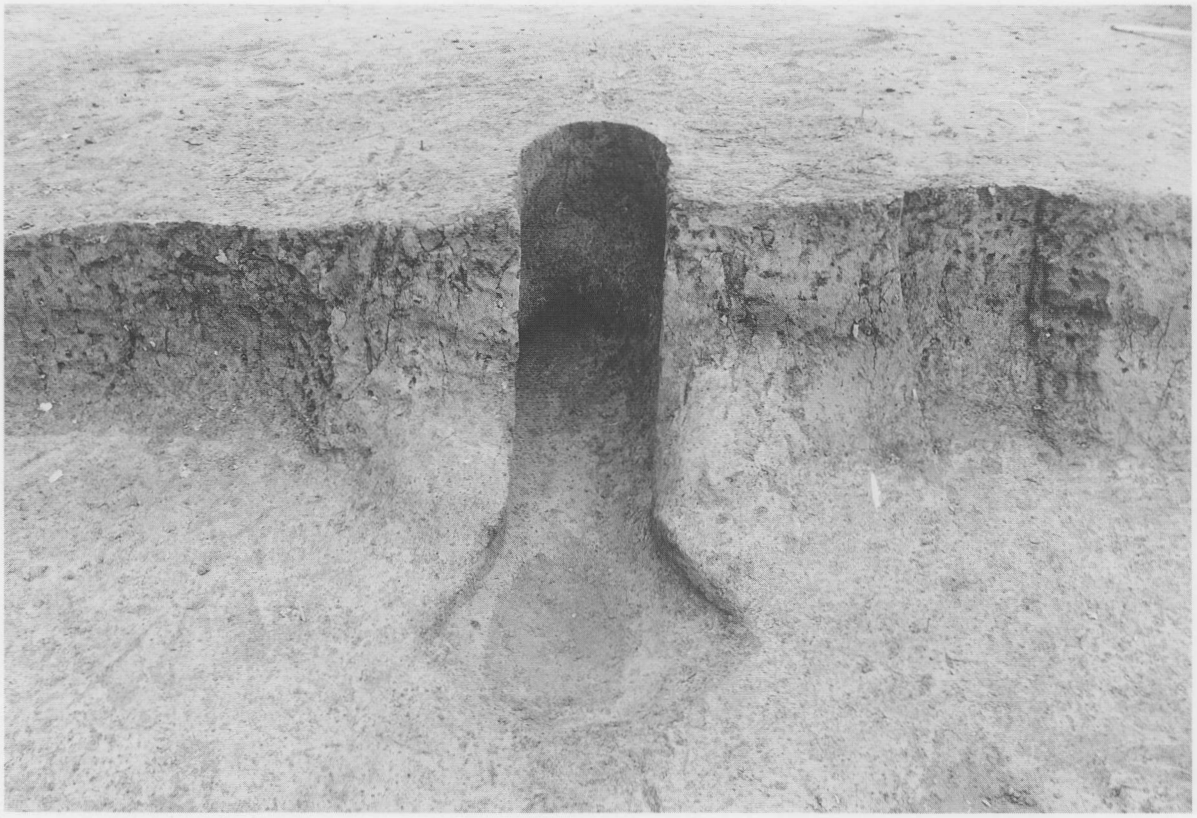


B　発掘区セクション（北西壁）(2)（南東より）

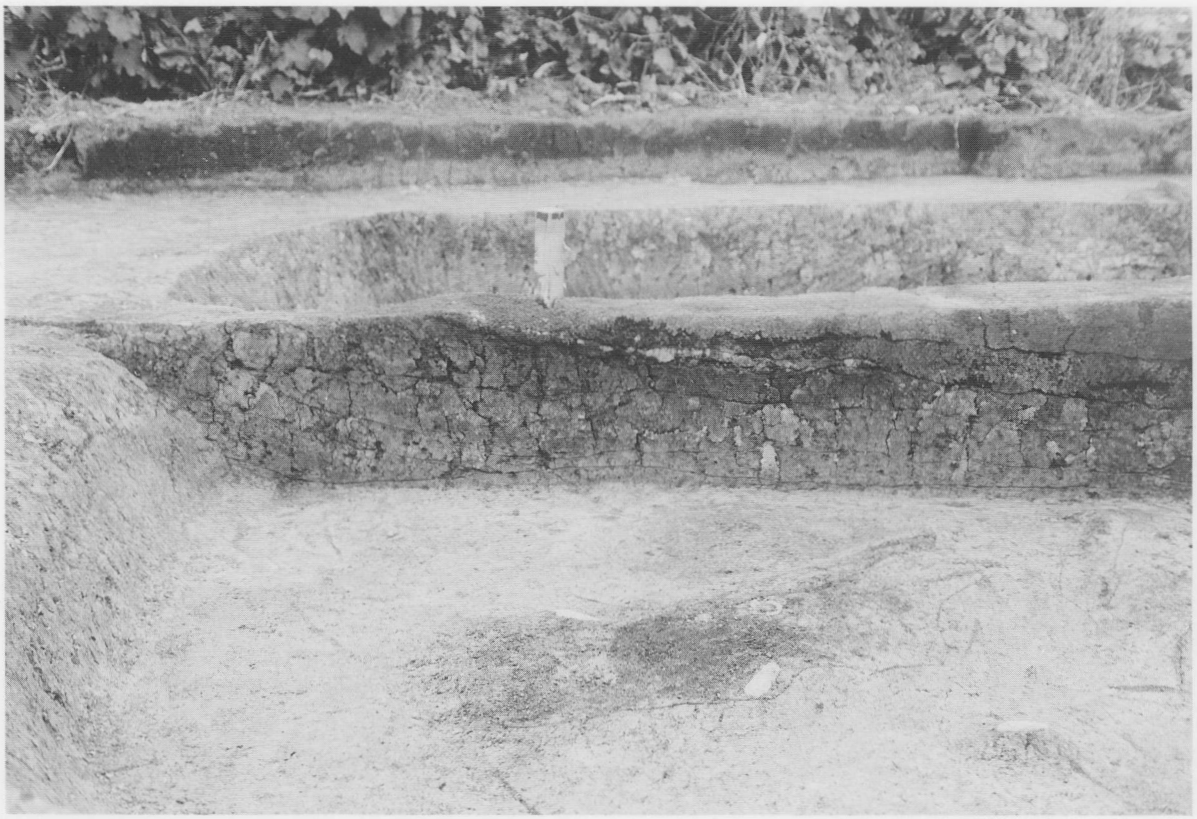
A　第１号竪穴住居跡確認面（北東より）

B　第１号竪穴住居跡完掘状況（南西より）

図版 4



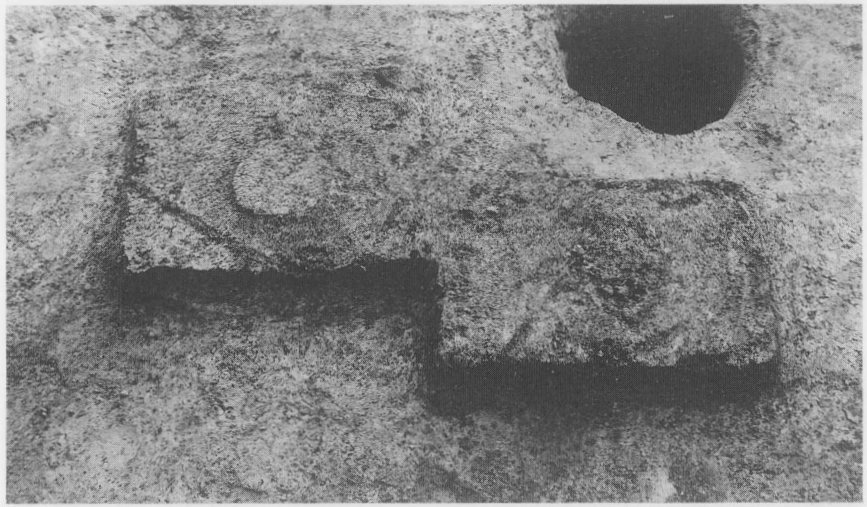
A　第１号竪穴住居跡かまど完掘状況（北東より）



B　第１号竪穴住居跡Ａ－Ｂセクション（北東より）

C　第１号竪穴住居跡床面漆器椀出土状況(1)（南西より）

A　第１号竪穴住居跡床面焼土粒範囲内環状装飾品出土状況(1)（南西より）



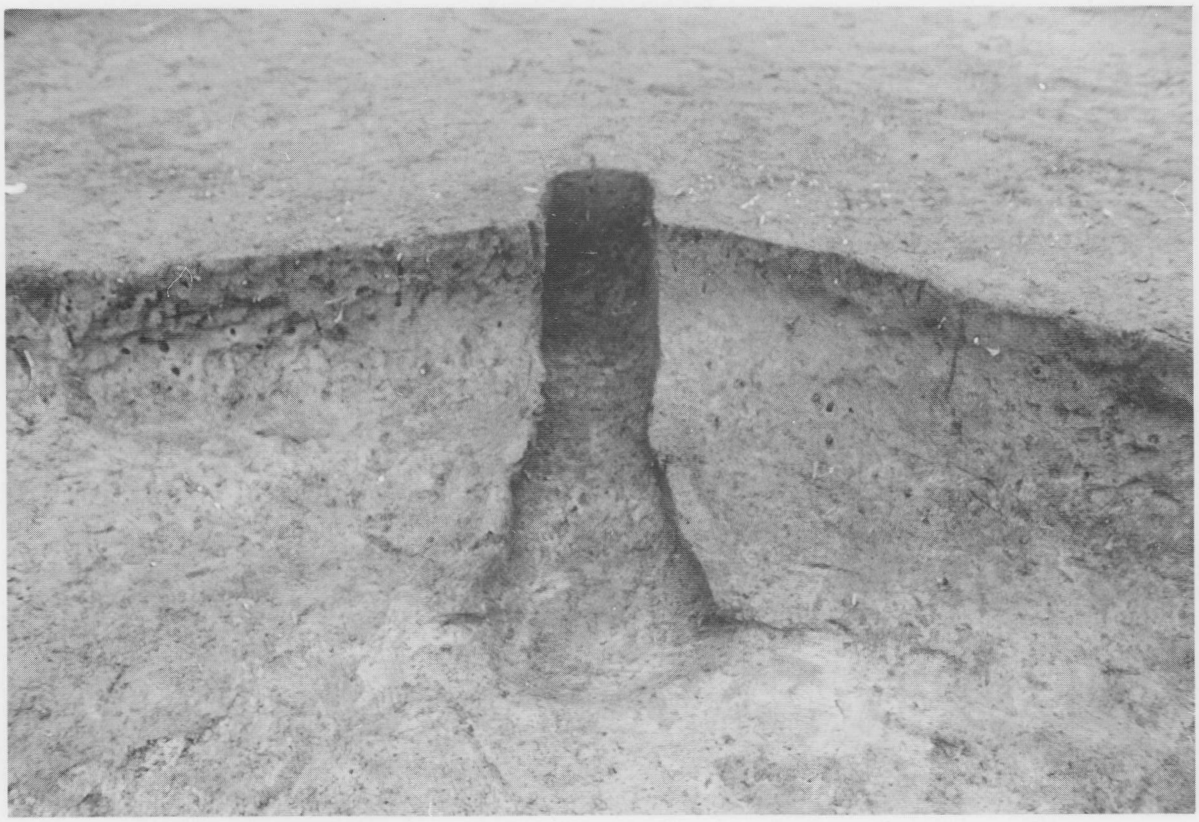
D　第１号竪穴住居跡床面漆器椀出土状況(2)（北西より）

B　第１号竪穴住居跡床面焼土粒範囲内環状装飾品出土状況(2)（南西より）

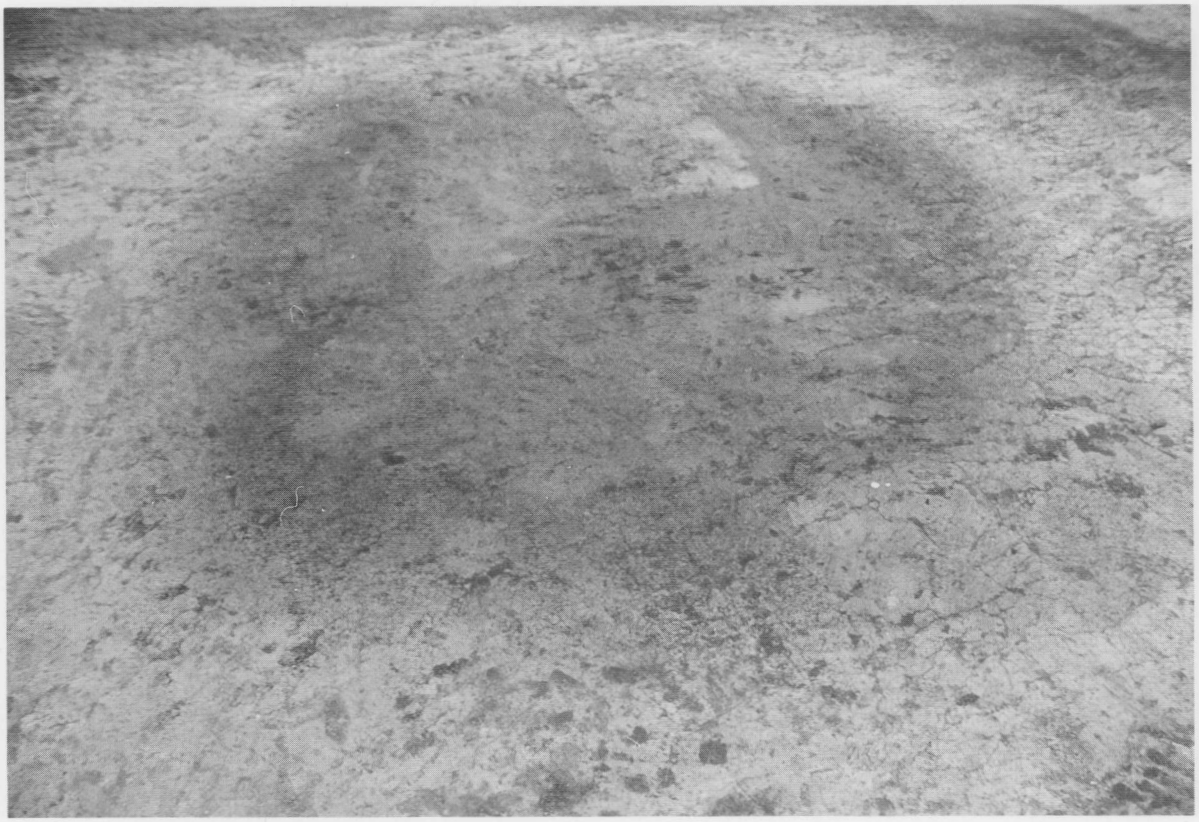
図版 6

A　第 2 号竪穴住居跡確認面（北東より）

B　第 2 号竪穴住居跡完掘状況（北西より）



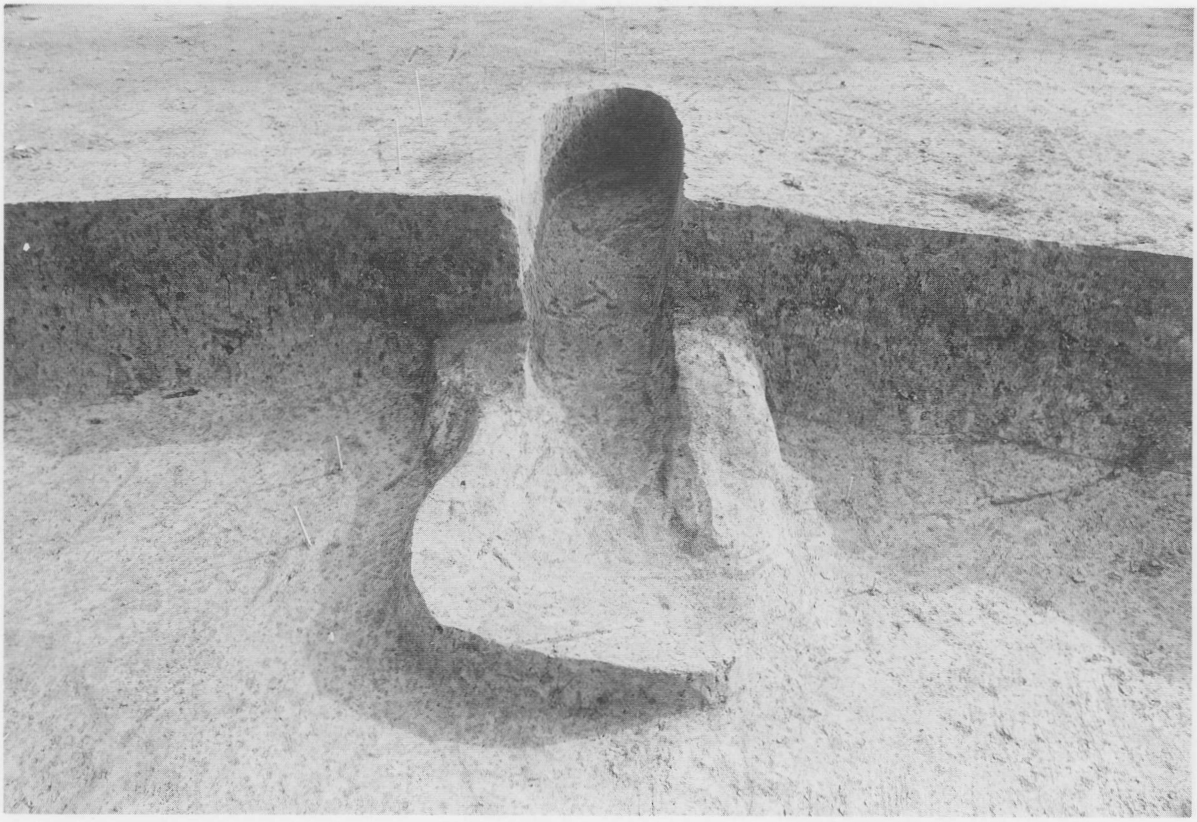
A　第 2 号竪穴住居跡かまど完掘状況（北西より）



B　第 3 号竪穴住居跡確認面（北東より）

図版 8

A　第 3 号竪穴住居跡完掘状況（北西より）

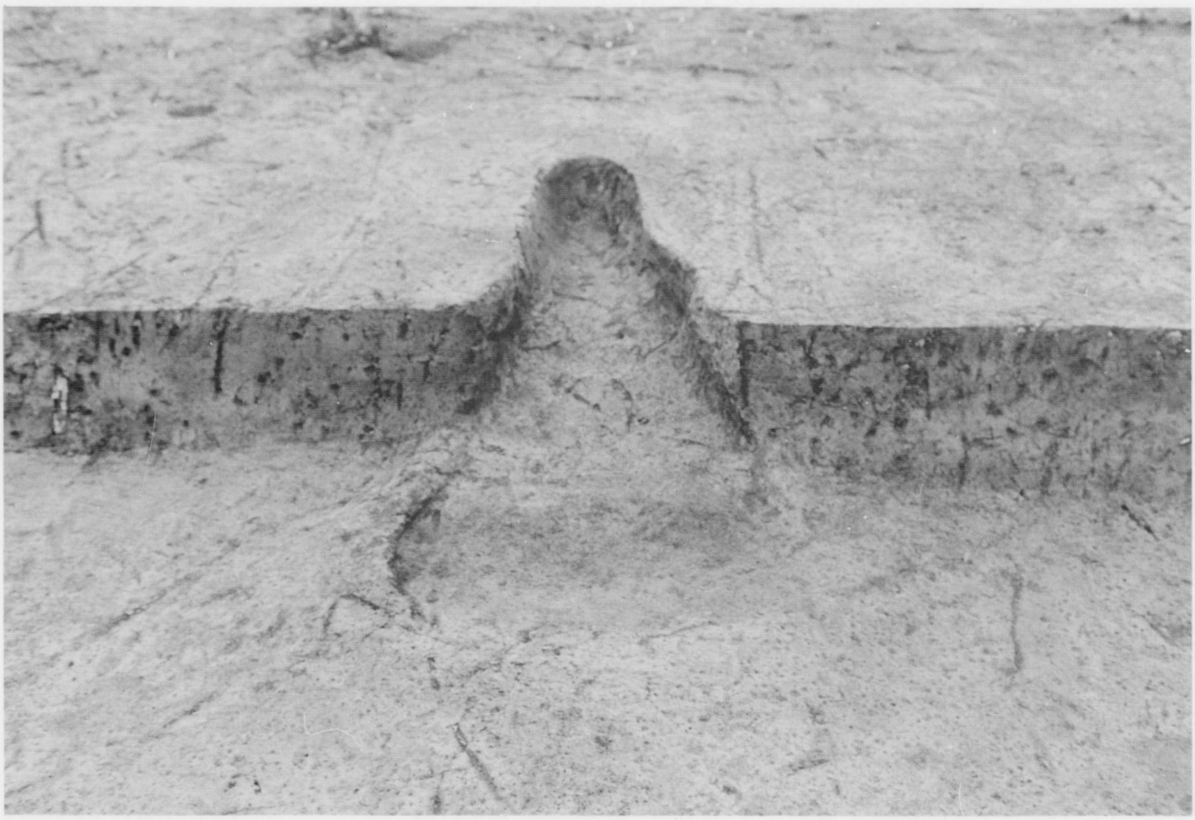


B　第 3 号竪穴住居跡かまど完掘状況（北西より）

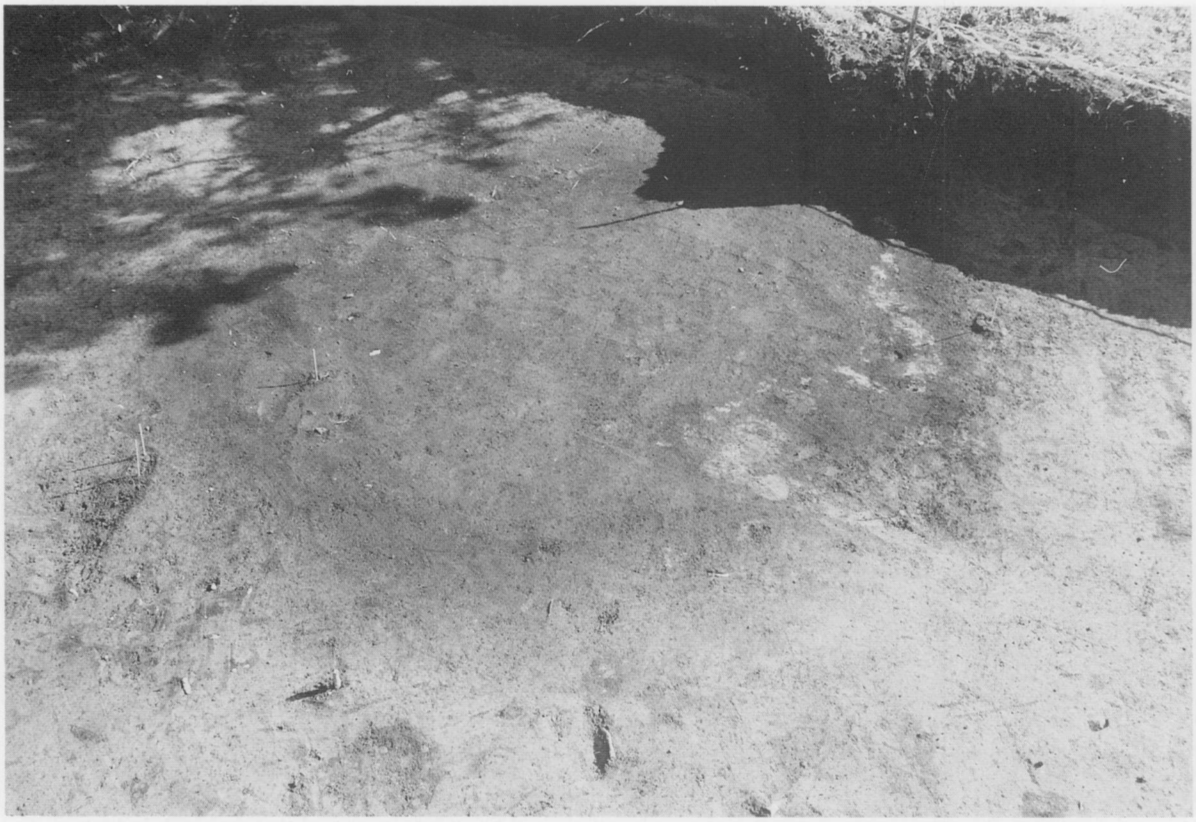
A　第 4 号竪穴住居跡確認面（北西より）

B　第 4 号竪穴住居跡完掘状況（北西より）

図版10



A　第４号竪穴住居跡かまど完掘状況（北西より）



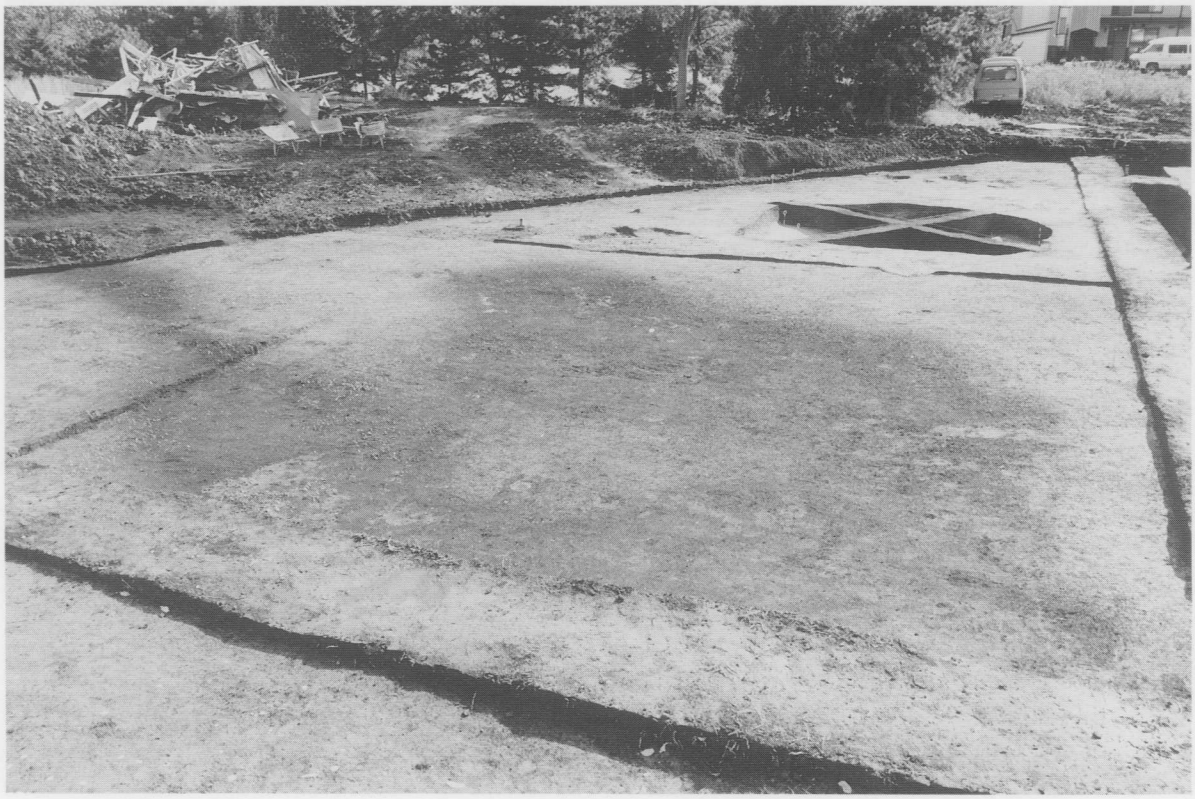
B　第５号竪穴住居跡確認面（西より）

A　第５号竪穴住居跡完掘状況（西より）

B　第５号竪穴住居跡かまど完掘状況（西より）

図版12

A　溝状遺構検出状況(1)（西より）



B　溝状遺構検出状況(2)（西より）

A　溝状遺構完掘状況(1)（西より）

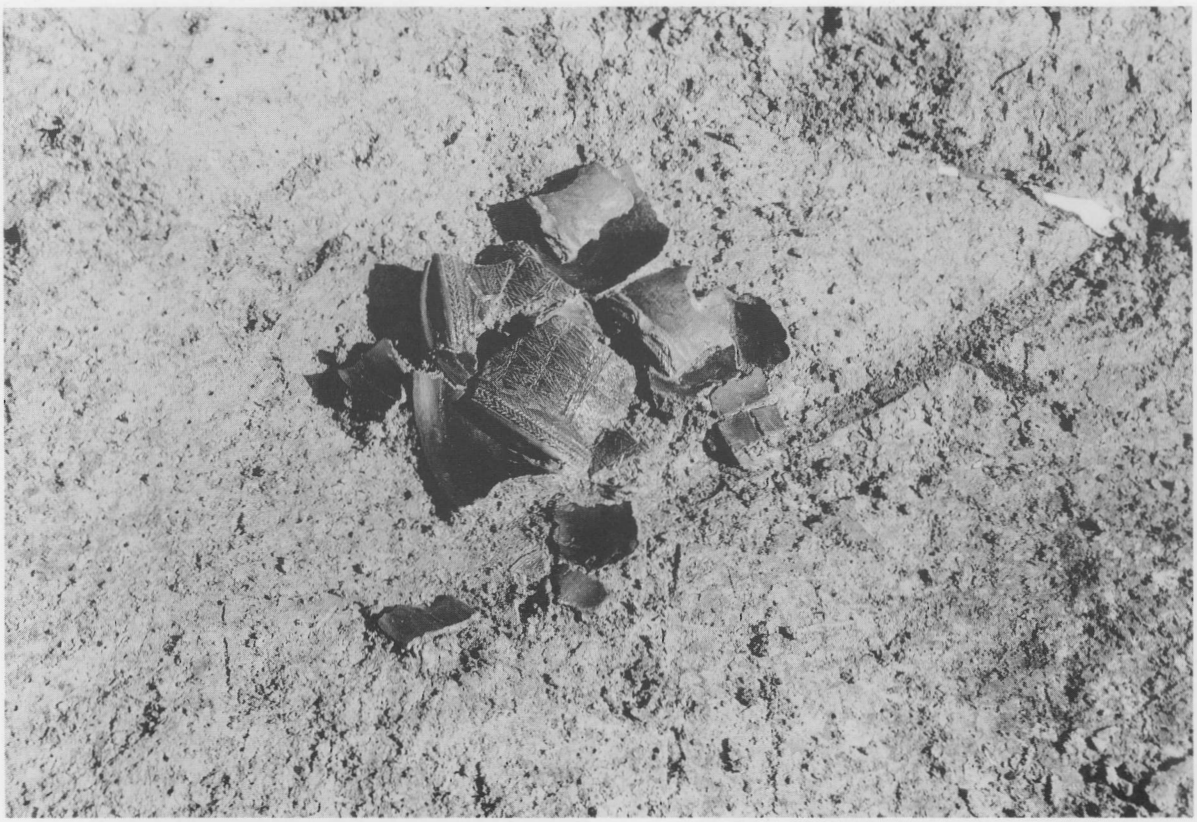
B　溝状遺構完掘状況(2)（東より）

図版14

A　溝状遺構Ａ－Ｂセクション（北西壁）（南東より）

B　溝状遺構Ｉ－Ｊセクション（南東壁）（北西より）

A　溝状遺構テラス部分遺物出土状況（北より）



B　溝状遺構内一括土器出土状況（南西より）

図版16

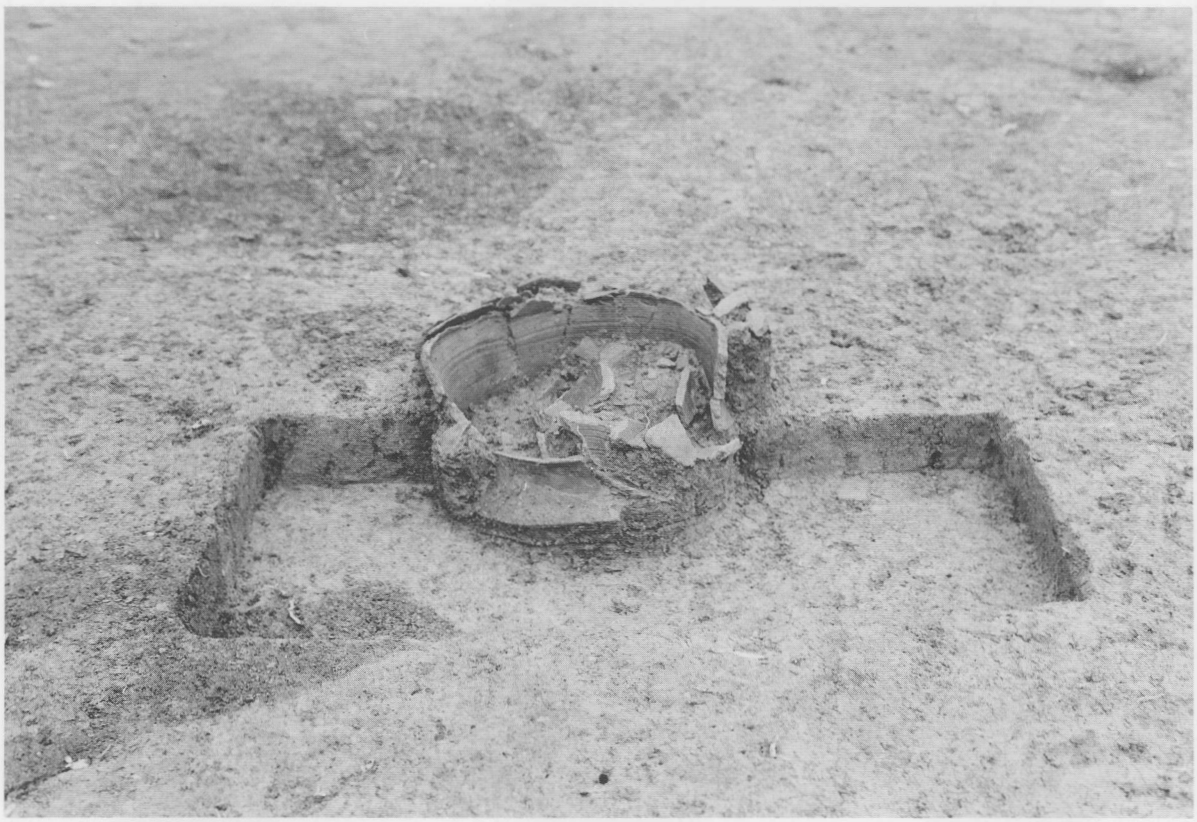
A　第１号焼土検出状況（東より）

C　第６号焼土セクション（南より）

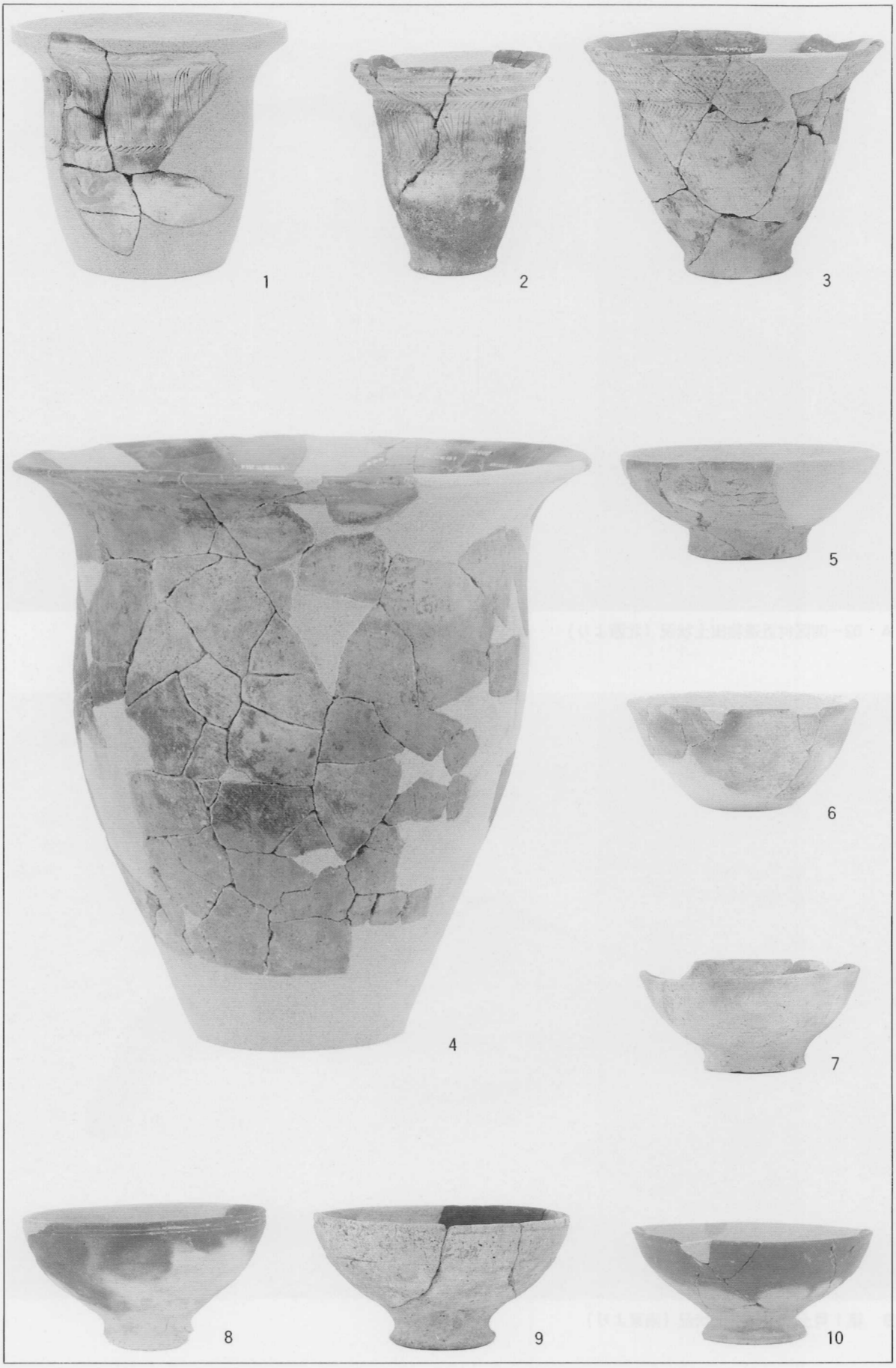
B　第８号焼土粒検出状況（南西より）

D　第５号焼土粒セクション（南より）

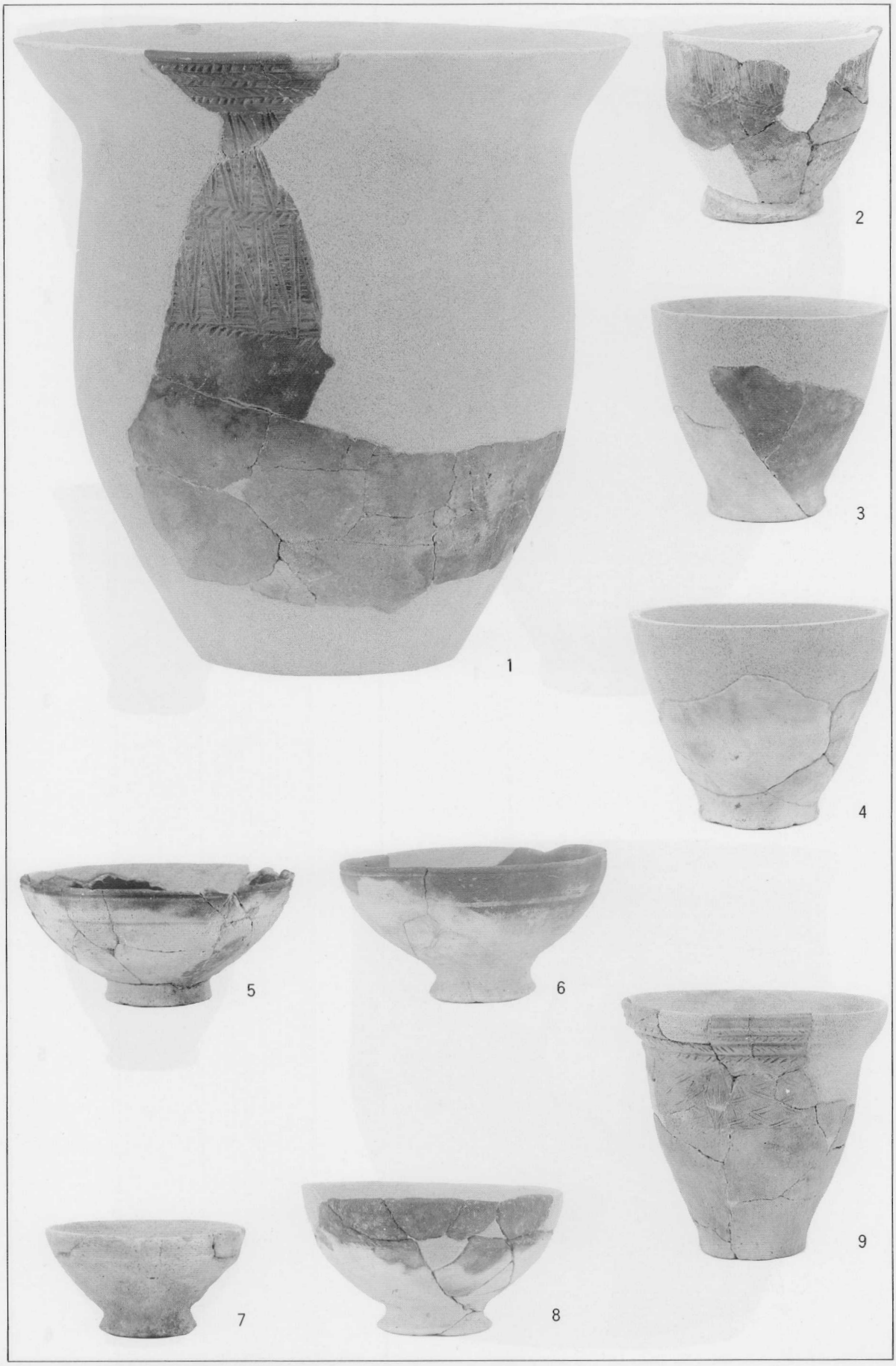
A　02－08区付近遺物出土状況（北西より）



B　第１号土壙土器出土状況（南東より）

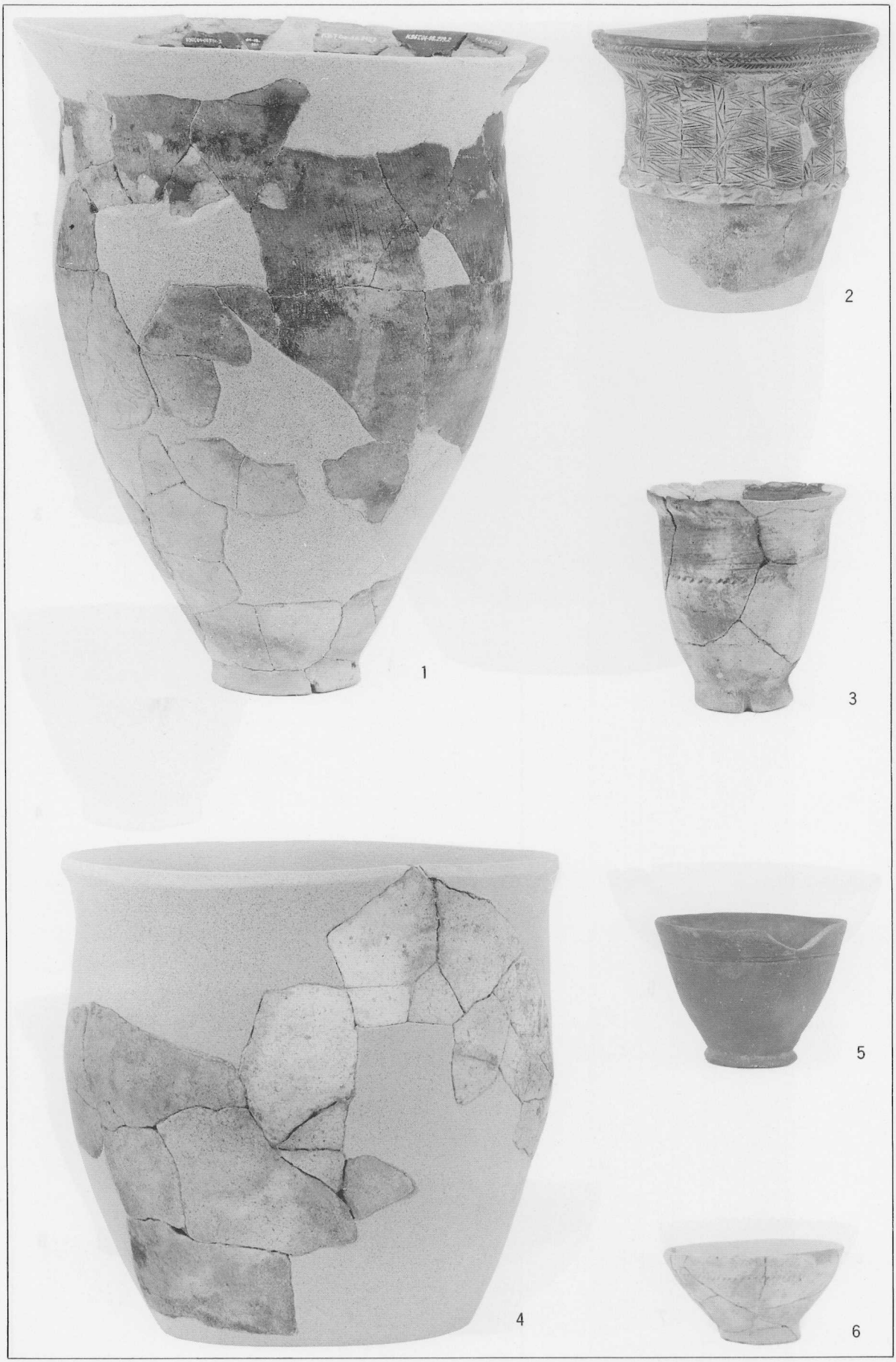


第１号、第３号竪穴住居跡出土土器（１はHP－１、２～10はHP－３）

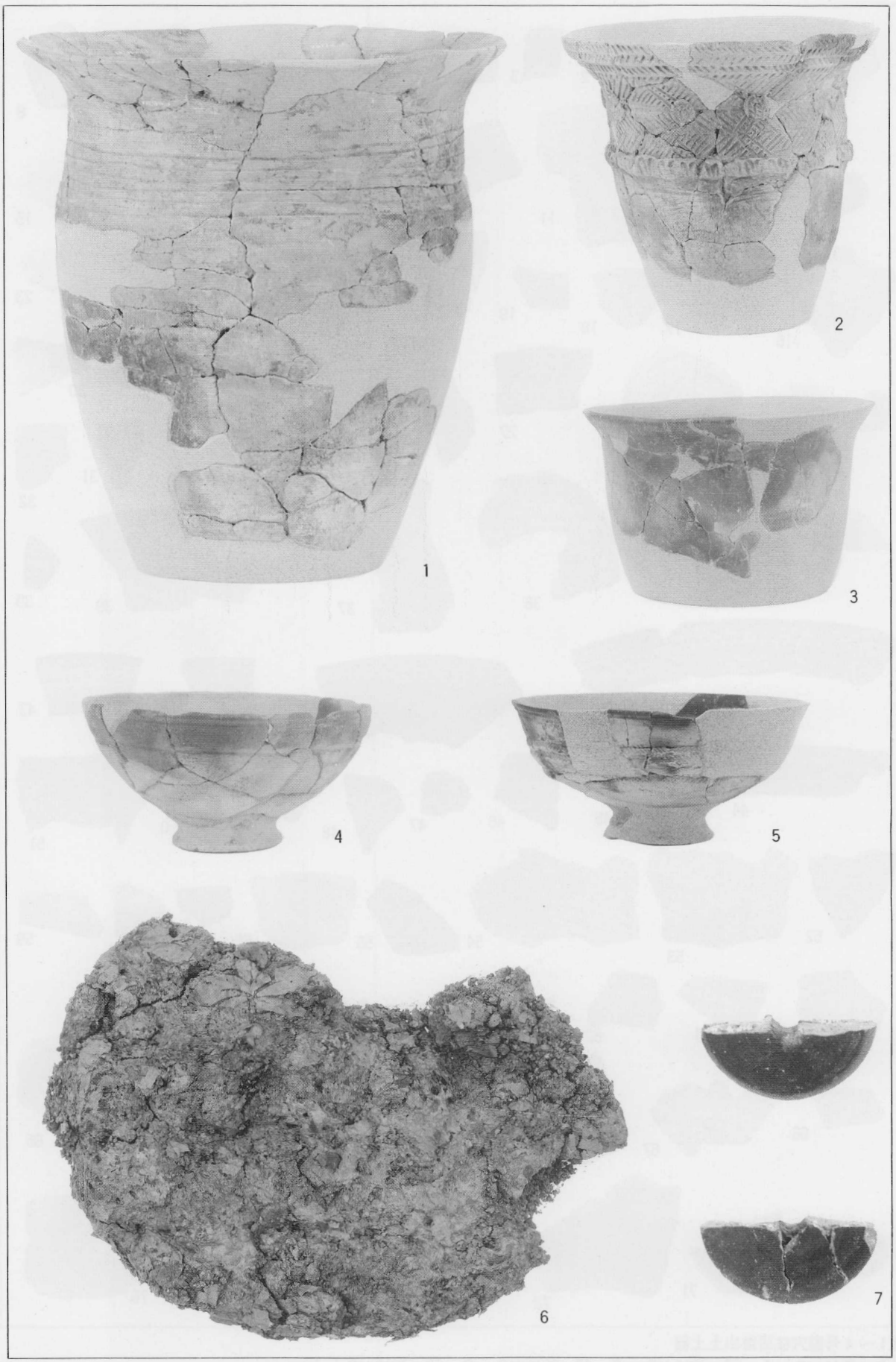


第４号、第５号竪穴住居跡出土土器（１～８はHP－４、９はHP－５）

図版20

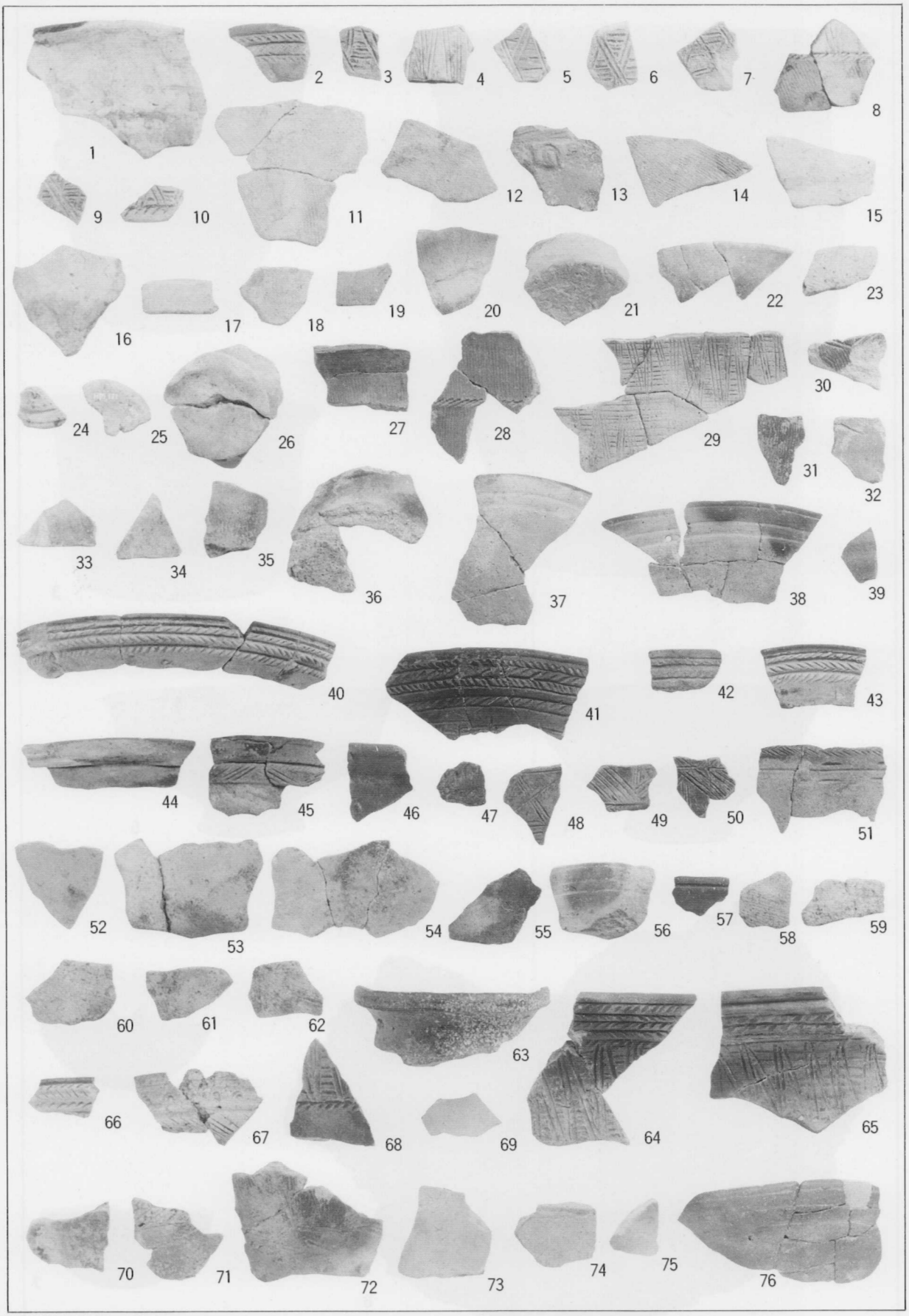


溝状遺構出土土器

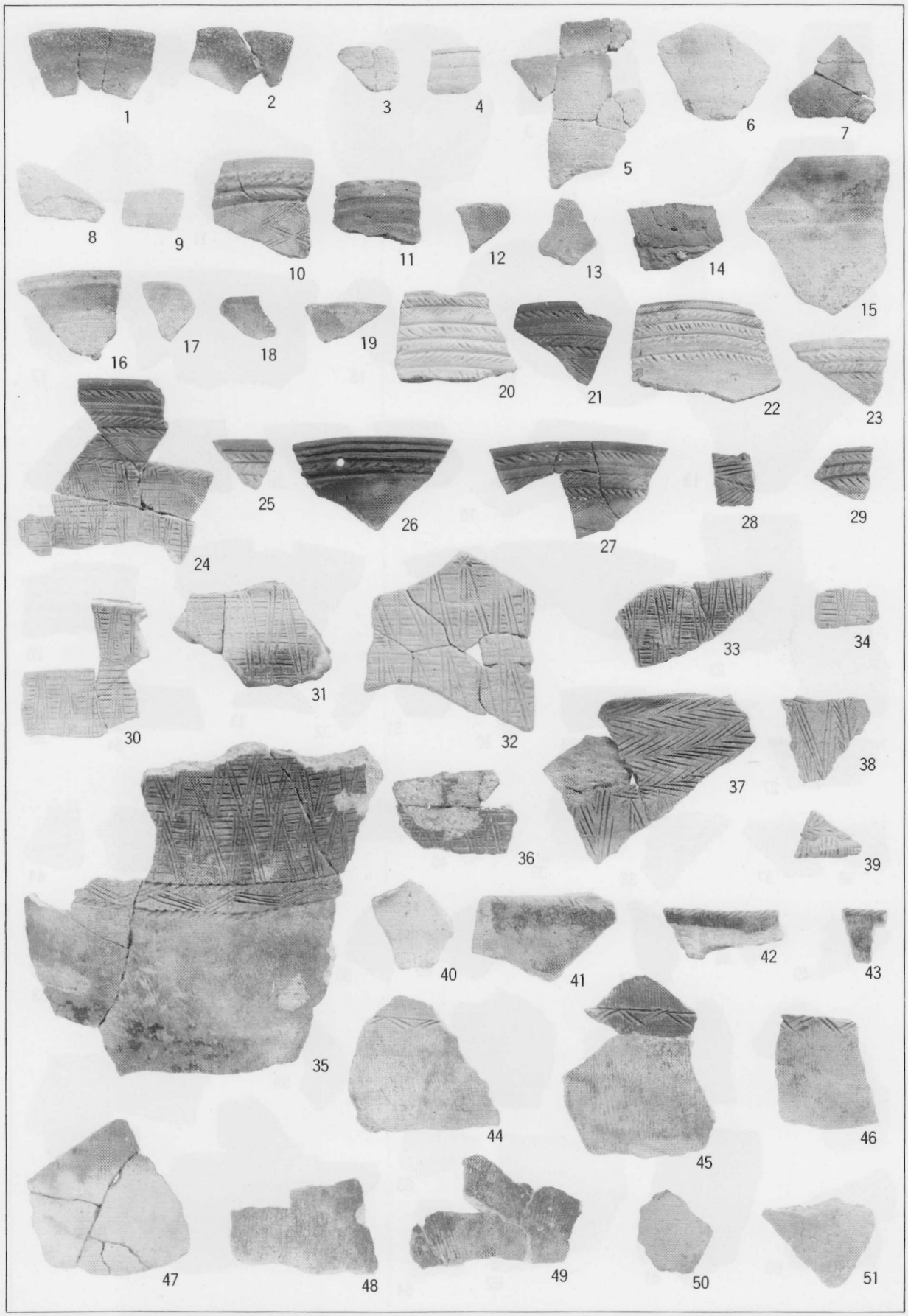


第１号土壙、発掘区出土土器、竪穴出土遺物（１は土壙、６は HP－１ No.138漆製品、７は HP－４ No. ４他紡錘車）

図版22

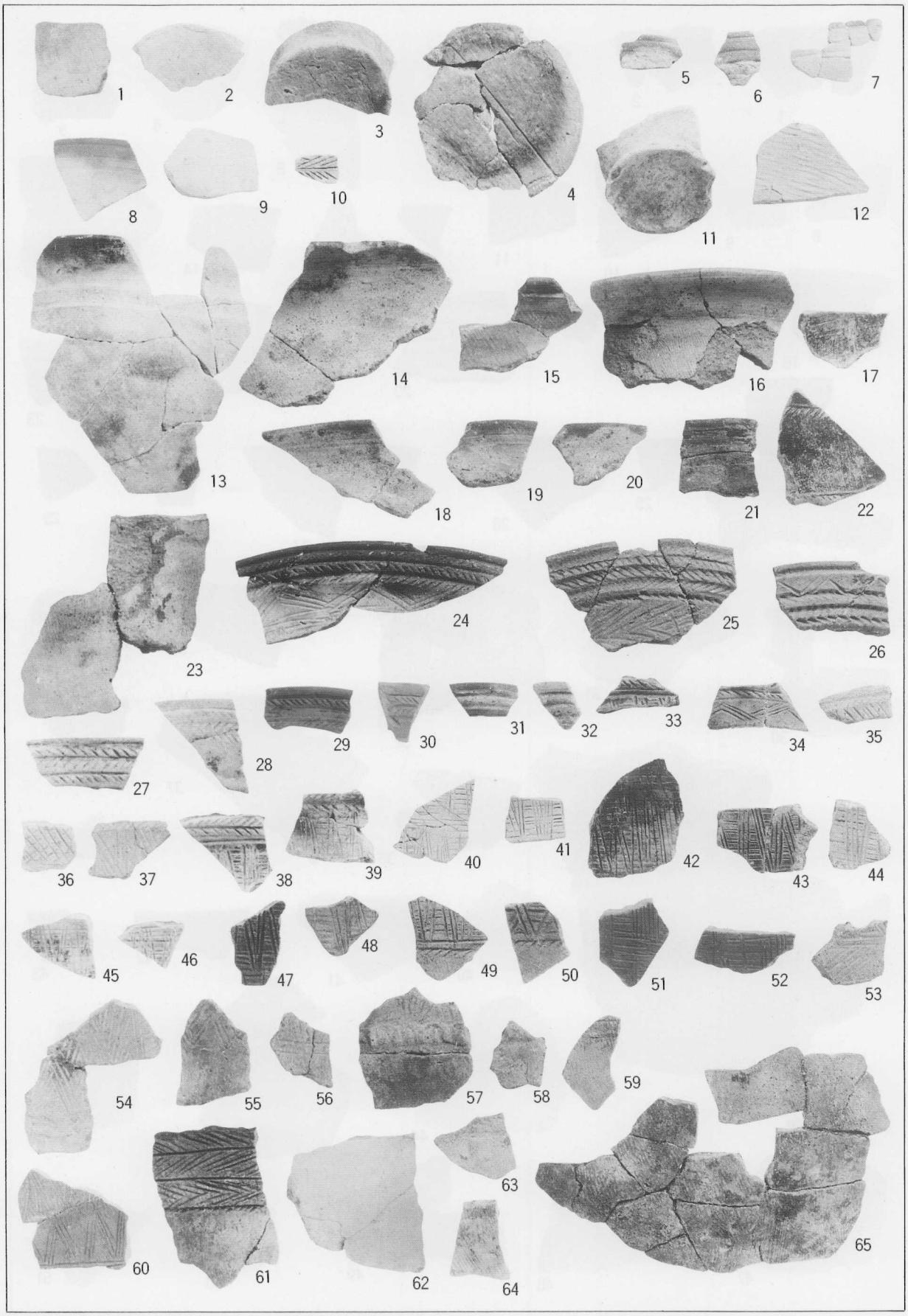


第１～４号竪穴住居跡出土土器
（１～26は HP－１、27～39は HP－２、40～62は HP－３、63～76は HP－４）

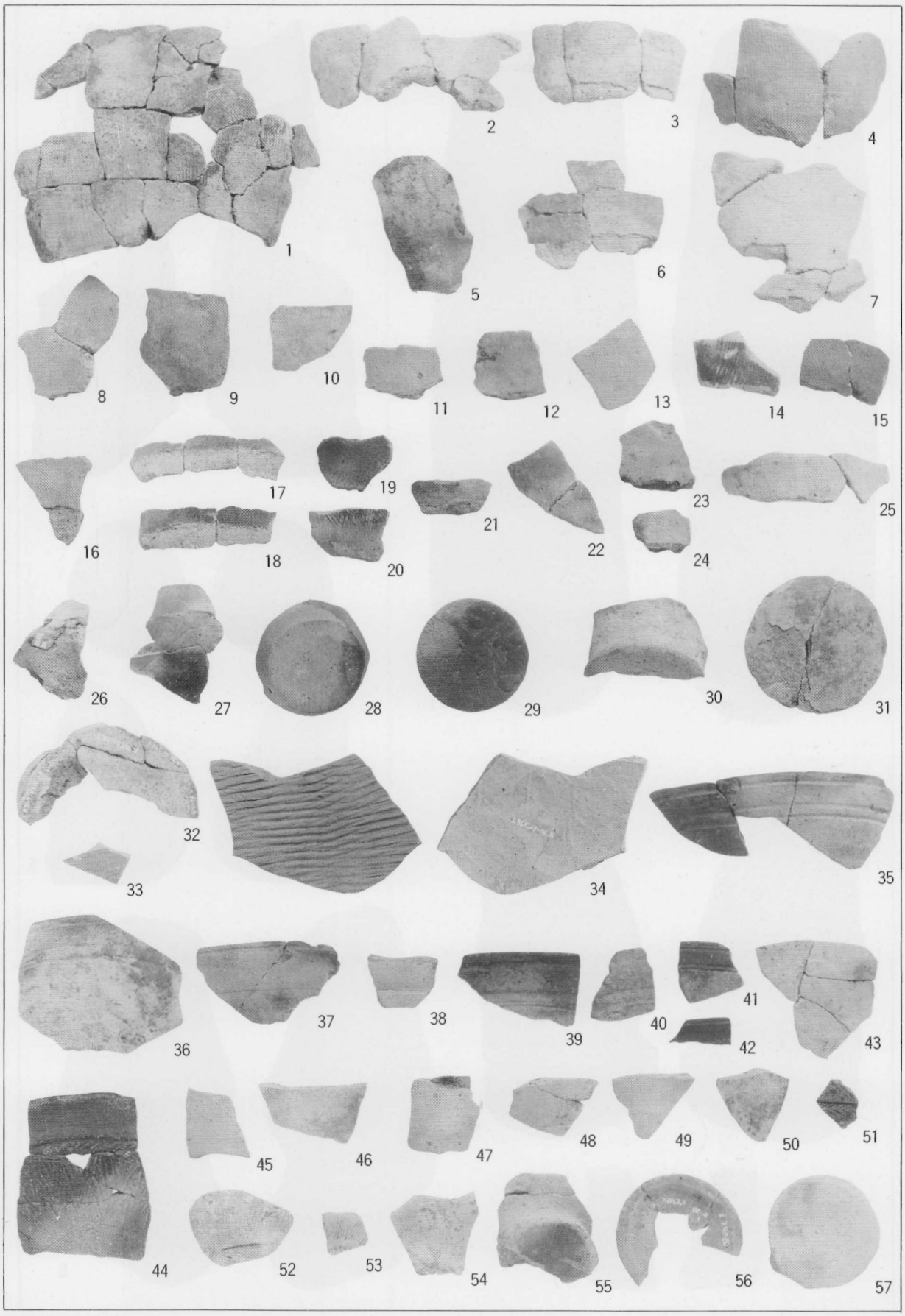


第４・５号竪穴住居跡、溝状遺構出土土器（１～９はHP－４、10～14はHP－５、15～51は溝状遺構）

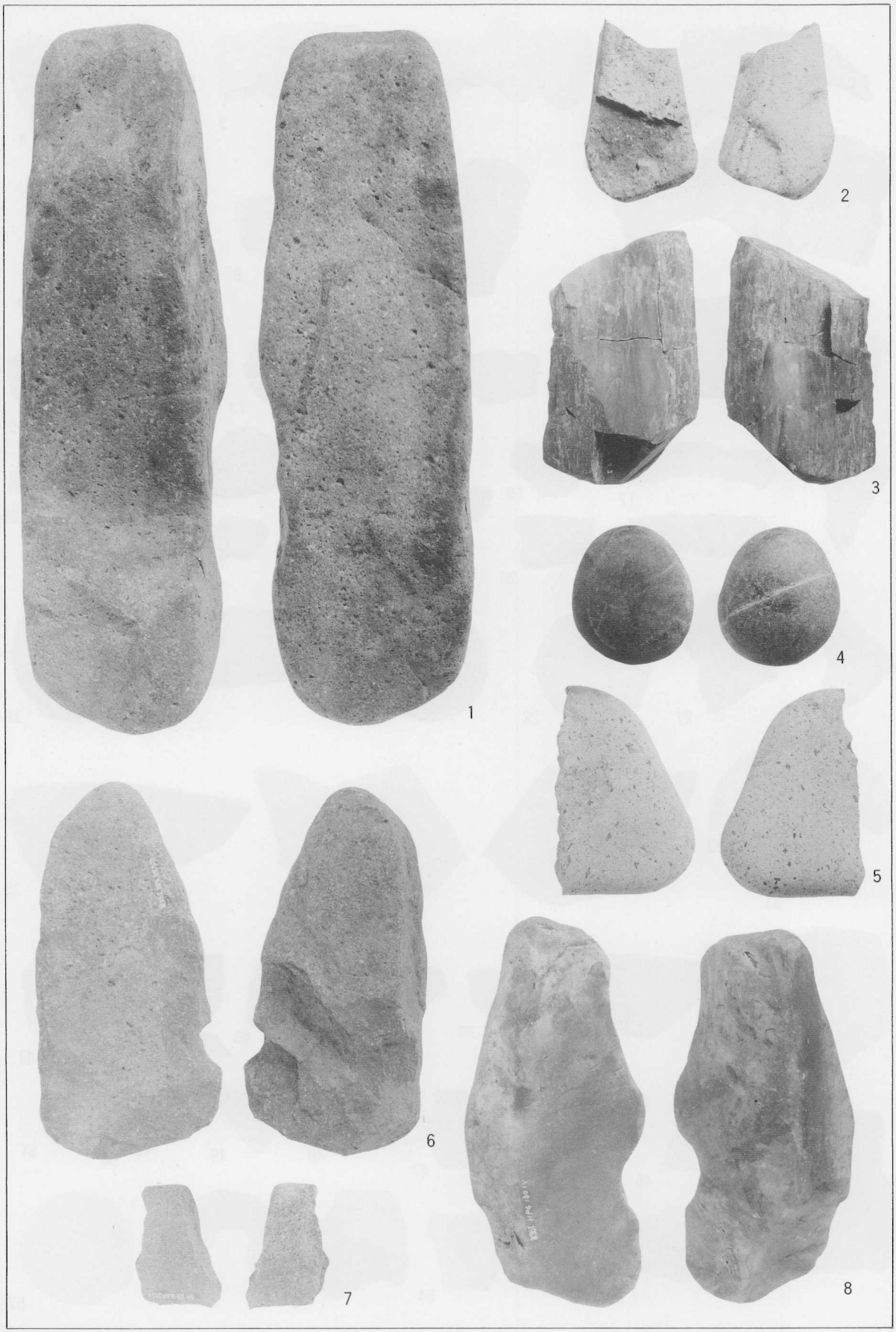
図版24



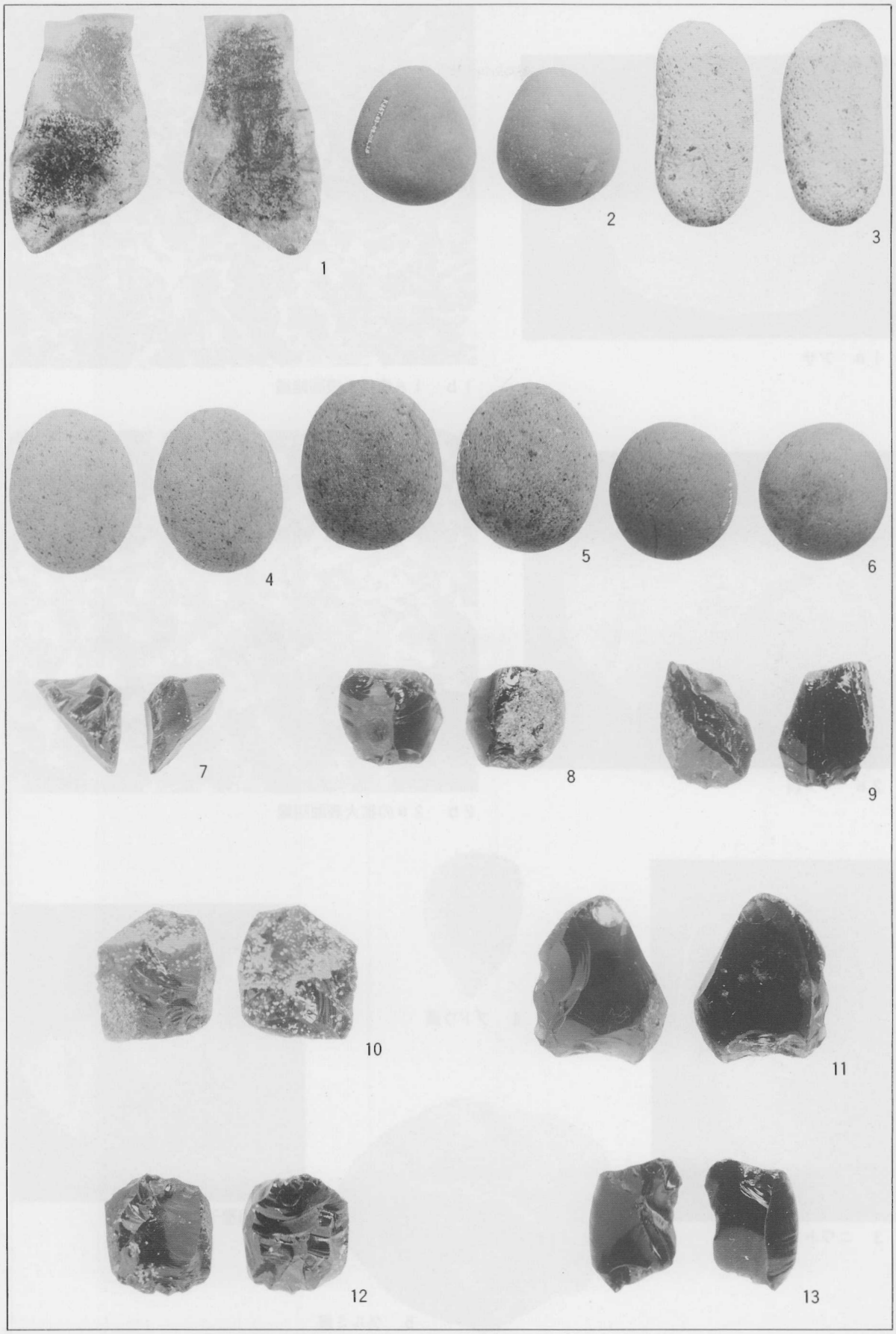
溝状遺構、発掘区出土土器（１～12は溝状遺構、13～65は発掘区）


1
2
3
4
5
6
7
8
9
10
11
12
13
14
15
16
17
18
19
20
21
22
23
24
25
26
27
28
29
30
31
32
33
34
35
36
37
38
39
40
41
42
43
44
45
46
47
48
49
50
51
52
53
54
55
56
57

発掘区出土土器

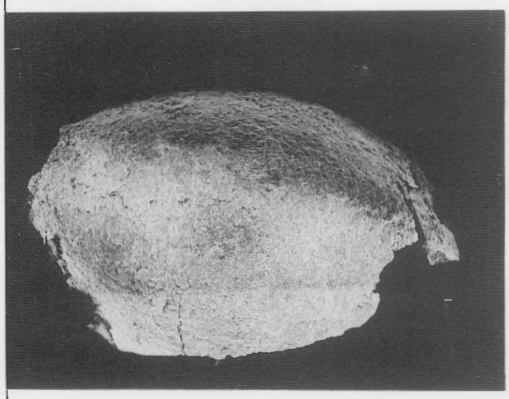


第1～4号竪穴住居跡出土礫石器（1はHP－1　4はHP－2　5～7はHP－3　2、3、8はHP－4）

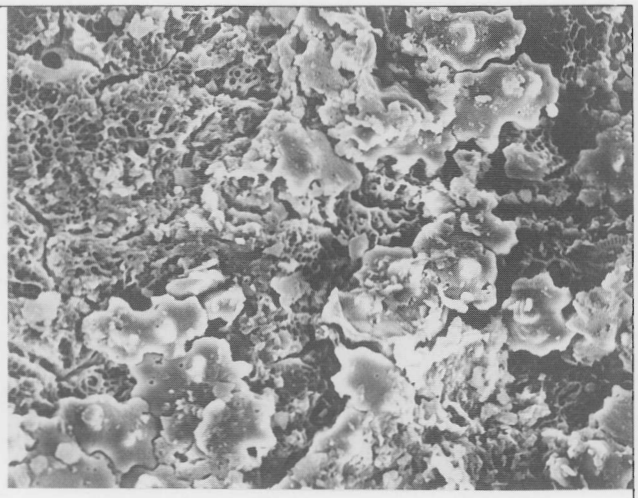


第５号竪穴住居跡、溝状遺構、発掘区出土礫石器
（１は HP－５　２は溝状遺構　７～９は HP－３　３～６、10～13は発掘区）

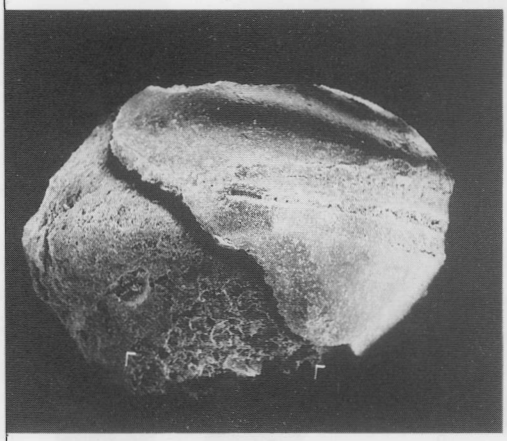
図版28



1ａ　アサ

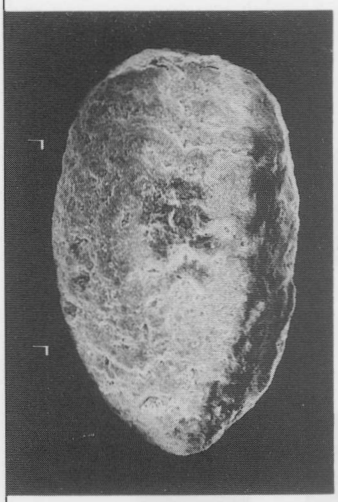


1ｂ　1ａの拡大表面組織



2ａ　マメ科

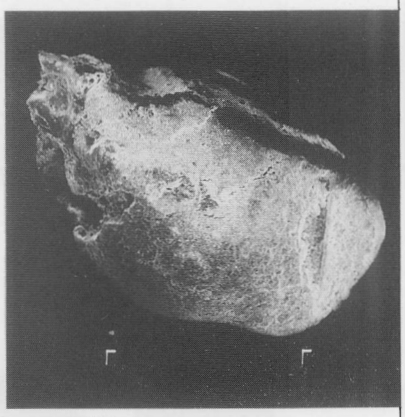
2ｂ　2ａの拡大表面組織



3　ニワトコ属

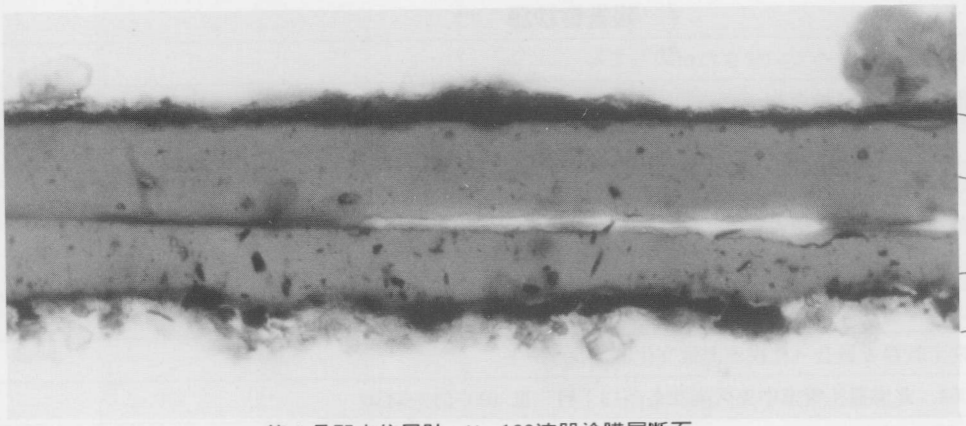
4　ブドウ属

5　クルミ属



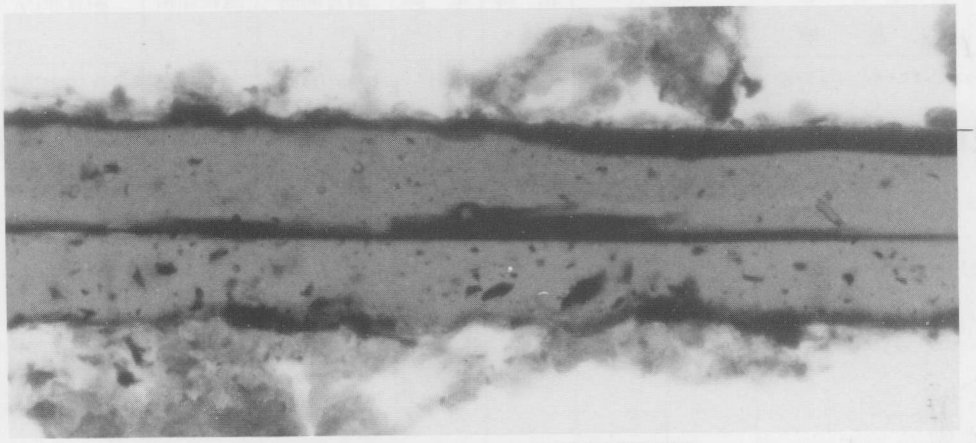
6　不明種子

K36遺跡タカノ地点出土炭化植物種子

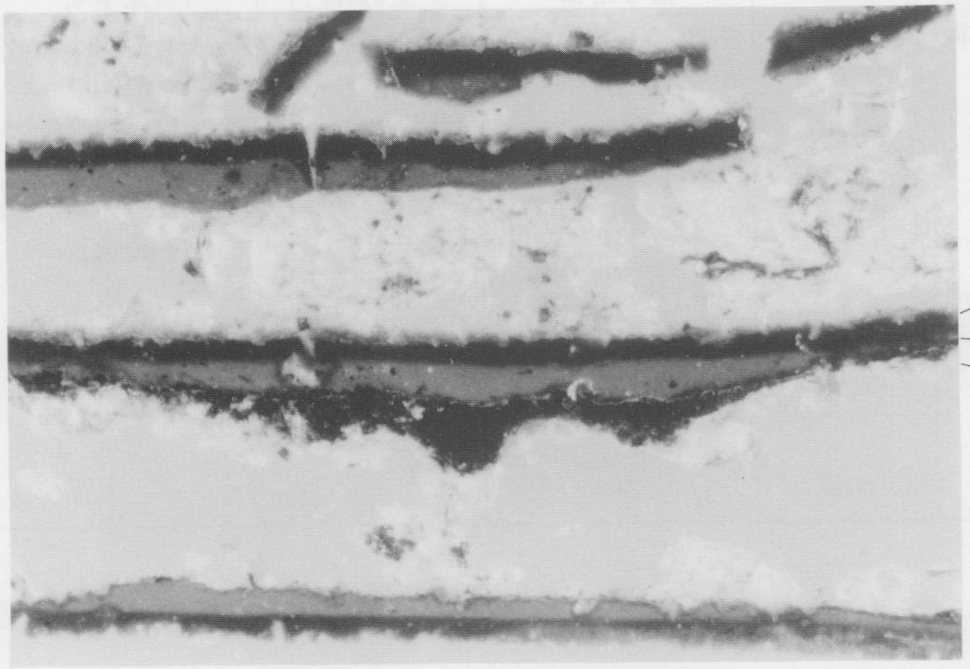


第１号竪穴住居跡　No. 139漆器塗膜層断面　400×（100×）

文様部ベンガラ漆　←|→　文様なし



第１号竪穴住居跡　No. 139漆器塗膜層断面　400×（100×）



第１号竪穴住居跡　No. 138漆器塗膜層断面　200×（50×）

漆器塗膜層断面

第27表　報告書抄録

報告書抄録

ふりがな	けいさんじゅうろくいせきたかのちてん
書名	K36遺跡タカノ地点
副書名	
巻次	
シリーズ名	札幌市文化財調査報告書
シリーズ番号	56
編著者	秋山　洋司
編集機関	札幌市教育委員会（札幌市埋蔵文化財センター）
所在地	〒064　北海道札幌市中央区南22条西13丁目　TEL 011-512-5430
発行年月日	西暦　1997年3月31日

ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード 市町村	コード 遺跡番号	北緯 °′″	東緯 °′″	調査期間	調査面積 m²	調査原因
けいさんじゅうろく K36	さっぽろしきたくきたにじゅうさん 札幌市北区北23条 じょうにしじゅうよんちょうめ 西14丁目	01101	36	43° 5′ 00″	141° 20′ 30″	19961001～ 19961115	1,500	集合住宅建設にともなう事前調査

所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項
K36	集落	擦文時代後期・晩期	竪穴住居跡5軒 溝状遺構1基 土壙1基 焼土等24ヵ所	擦文式土器 剥片・礫石器 紡錘車 漆製椀 錫製環状装飾品	竪穴住居に伴い漆製品、錫製環状装飾品が出土。竪穴住居2軒を囲むように溝状遺構が検出。土器を伏せた状態で埋設された土壙が検出。

札幌市文化財調査報告書56

K36遺跡タカノ地点

平成9年3月25日印刷
平成9年3月31日発行

発行者　札幌市教育委員会
060 札幌市中央区南1条西14丁目
編集者　札幌市埋蔵文化財センター
064 札幌市中央区南22条西15丁目
TEL.011(512)5430
FAX.011(512)5467
印刷所　富士プリント株式会社
064 札幌市中央区南16条西9丁目